

知られざる國々

日本 消費 一七〇百萬瓦 産額 七〇百萬瓦

米國 産額 三一、〇〇〇百萬瓦 消費 二五、五〇〇百萬瓦

消費 三八、五〇〇百萬瓦

日本 五〇(半方里)

和蘭 二方里三二

伊太利 三方里六五

英吉利 五方里〇〇

米國 五方里二〇

佛蘭西 七方里三五

白耳義 九方里四〇

一六方里〇〇

一八方里〇〇

著昂重質

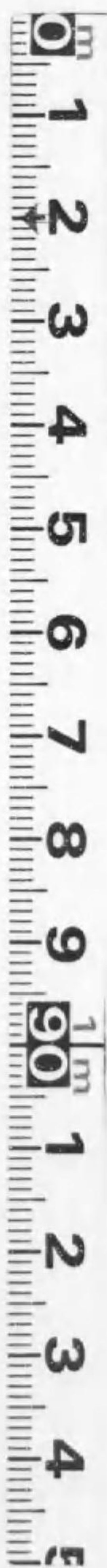
増激は口人 小狭は土
 小極は油きべす動發を光國
 やきべ得し活生ばれす何如底到は人本日
 料資きべす決解を題問的國立の此

特114

2521

亞爾然丁

伯刺西爾



始



(年ヶ一)油石 | (共地領) 地土付 = 千口人

特114
252

(一)

知られざる國々 目次(索引巻末にあり)

一	日本に是より以上の大問題ありや	一一
二	日本の石油政策如何	二二
三	世界的關ヶ原に於ける日本の向背如何	三三
四	日本に是より以上の大問題ありやの解決	四四
五	日本の人口の處分如何	五五
六	世界的關ヶ原に對する豫備知識	六六
七	伯刺西爾の南三州(名温帶三州)	七七
八	巴拉グアイ(巴拉圭)	七八
九	日本人移住の注意	八九
一〇	智利の硝石地方	九〇
一一	中部墨西哥	九一
一二	オーマン(元書の變遷)	九二
一三	オーマン國の概況	九三
一四	オーマン王室	九四
一五	亞刺比亞人の性質	九五
一六	亞刺比亞の宗教	九六
一七	世界的關ヶ原	九七
一八	歴史の痛快なる否皮肉なる繰返シ	九八
一九	世界的關ヶ原	九九
二〇	世界的關ヶ原	一〇〇

知られざる國々

志賀重昂著

一 日本に是より以上の大問題ありや。

「日本をして此の地球の上に存在せしめざる可らず」と、是が吾々の先決中の最も先決の覺悟である、之が參考の萬一にも供へんものと、此の一小書を著はした。かくて能ふ丈ケ平易に記し、能ふ丈ケ簡單に作製し、而して能ふ丈ケ大部數を社會に頒布せんものと、此の三主旨に向つて聊か心を致したのである。「日本をして此の地球の上に存在せしめざる可らず」と覺悟すれば、左の三問題にて決するのである。

一 日本人口の處分如何。

日本の人口は大正三十年には一億とまで繁殖すべく、今日内地のみにても一個年の増加は平均七十餘萬人に上る。七十餘萬人とは、高知縣即ち土佐の人口である。毎年高知縣丈ケの人口が増加すれば、毎年高知縣丈ケの新なる土地を加へざる可からず、否人の一人も居らざる高知縣丈ケの土地(山城、大和、河内、和泉、攝津、淡路等)を加へざる可らず、而も此の如きは固より出來ざる相談である。是に於てか「此の狭小なる國土にては食へなくなる」と云ふことは誰にでも判る。「克く忠に克く孝に」も食へた後のことである、食へなくて何の忠か孝かあらんや、何の倫理かあらんや、社會を根柢より破壊せんとする所謂危險思想も食へぬからして多く生ずる。日本の人口の處分、是ぞ日本國及び國民の死活問題である。

日本に是より以上の大問題ありや(日本の人口の處分如何)

正
15. 11. 20
内交

一	日本貿易の新なる販路として	一六
二	日本の製糖工業は將來如何にすべきや	二七
三	衣食住の新資料の搜索	三三
四	支那と西域との關係研究	四〇
五	沙漠の横斷(東西兩洋最新の最捷路)	四六
六	回教の國土(最新の歐洲外交紛糾の泉源)	五二
七	歐洲外交の温床は巴爾幹より亞刺比亞へ	五八
八	英佛垂離の搖籃(最近の歐洲外交に於ける)	六四
九	パレスチナの獨立運動	七〇
一〇	ケラク國王の謁見に於ける兩人種の軋轢	七六
一一	見込無き亞細亞聯盟(日本が首倡すれば日本)	八二
一二	人種平等問題(是が日本民族發展の根本)	八八
一三	有色人種排斥の根本(南阿研究の大急務)	九四
一四	有色人種排斥の可からず	一〇〇
一五	有色人種排斥の可からず	一〇六
一六	有色人種排斥の可からず	一一二
一七	有色人種排斥の可からず	一二
一八	有色人種排斥の可からず	一八
一九	有色人種排斥の可からず	二四
二〇	有色人種排斥の可からず	三〇
二一	有色人種排斥の可からず	三六
二二	有色人種排斥の可からず	四二
二三	有色人種排斥の可からず	四八
二四	有色人種排斥の可からず	五四
二五	有色人種排斥の可からず	六一
二六	有色人種排斥の可からず	六七
二七	有色人種排斥の可からず	七三
二八	有色人種排斥の可からず	七八
二九	有色人種排斥の可からず	八四
三〇	有色人種排斥の可からず	九〇
三一	有色人種排斥の可からず	九六
三二	有色人種排斥の可からず	一〇二
三三	有色人種排斥の可からず	一〇八
三四	有色人種排斥の可からず	一一四
三五	有色人種排斥の可からず	一二〇
三六	有色人種排斥の可からず	一二六
三七	有色人種排斥の可からず	一三二
三八	有色人種排斥の可からず	一三八
三九	有色人種排斥の可からず	一四四
四〇	有色人種排斥の可からず	一五〇
四一	有色人種排斥の可からず	一五六
四二	有色人種排斥の可からず	一六二
四三	有色人種排斥の可からず	一六八
四四	有色人種排斥の可からず	一七四
四五	有色人種排斥の可からず	一八〇
四六	有色人種排斥の可からず	一八六
四七	有色人種排斥の可からず	一九二
四八	有色人種排斥の可からず	一九八
四九	有色人種排斥の可からず	二〇四
五〇	有色人種排斥の可からず	二一〇
五一	有色人種排斥の可からず	二一六
五二	有色人種排斥の可からず	二二二
五三	有色人種排斥の可からず	二二八
五四	有色人種排斥の可からず	二三四
五五	有色人種排斥の可からず	二十四〇
五六	有色人種排斥の可からず	二四六
五七	有色人種排斥の可からず	二五二
五八	有色人種排斥の可からず	二五八
五九	有色人種排斥の可からず	二六四
六〇	有色人種排斥の可からず	二七〇
六一	有色人種排斥の可からず	二七六
六二	有色人種排斥の可からず	二八二
六三	有色人種排斥の可からず	二八八
六四	有色人種排斥の可からず	二九四
六五	有色人種排斥の可からず	三〇〇
六六	有色人種排斥の可からず	三〇六
六七	有色人種排斥の可からず	三一二
六八	有色人種排斥の可からず	三一八
六九	有色人種排斥の可からず	三二四
七〇	有色人種排斥の可からず	三三〇
七一	有色人種排斥の可からず	三三六
七二	有色人種排斥の可からず	三四二
七三	有色人種排斥の可からず	三四八
七四	有色人種排斥の可からず	三五四
七五	有色人種排斥の可からず	三五〇
七六	有色人種排斥の可からず	三五六
七七	有色人種排斥の可からず	三六二
七八	有色人種排斥の可からず	三六八
七九	有色人種排斥の可からず	三七四
八〇	有色人種排斥の可からず	三八〇
八一	有色人種排斥の可からず	三八六
八二	有色人種排斥の可からず	三九二
八三	有色人種排斥の可からず	三九八
八四	有色人種排斥の可からず	四〇四
八五	有色人種排斥の可からず	四一〇
八六	有色人種排斥の可からず	四一六
八七	有色人種排斥の可からず	四二二
八八	有色人種排斥の可からず	四二八
八九	有色人種排斥の可からず	四三四
九〇	有色人種排斥の可からず	四四〇
九一	有色人種排斥の可からず	四四六
九二	有色人種排斥の可からず	四五二
九三	有色人種排斥の可からず	四五八
九四	有色人種排斥の可からず	四六四
九五	有色人種排斥の可からず	四七〇
九六	有色人種排斥の可からず	四七六
九七	有色人種排斥の可からず	四八二
九八	有色人種排斥の可からず	四八八
九九	有色人種排斥の可からず	四九四
一〇〇	有色人種排斥の可からず	五〇〇

日本に是より以上の大問題ありや(日本の石油政策如何)

二 日本の石油政策如何。

此の地球は空氣、陸、水の三よりして成つて居る、而して空氣を支配するは飛行機であり、陸を支配するは自動車であり、水を支配するは内燃汽船である。然るに飛行機も、自動車も、内燃汽船も、ガソリン油即ち石油に依らざれば一寸だに行る能はず、即ち石油無き國家は、空氣、陸、水に劣敗し、即ち此の地球の上に存在を容さざるに至るべきである。況んや世界に於ける凡百の製造工業の能率を増進するには、器械の摩擦力を減殺するに在る、器械の摩擦力を減殺するには油を注ぐに在る、而して此の油としては石油の他には如何なる植物性、動物性の油を使用するとも何れも効果少きを以て、石油こそは世界に於ける有りと有ゆる製造工業の唯一無二なる増進力となつたのである。然れば將來の事は一言にて盡くる、曰く油の供給の豊富なる國家は光り榮へ、油の無き國家は自然に消滅すと。誰が云ひ初めけん『油斷大敵』と、大敵どころか油が斷ゆれば國が斷ゆるのである、『油斷國斷』である。然るに日本にては現在の少々數なる飛行機、自動車、内燃機關に消費するガソリン油すらも其の三分の一だに國內に於て産出し得ない。日本の石油政策は如何、是れぞ實に日本國家の生存問題である。

三 世界的關ヶ原に於ける日本の向背如何。

白人即ち西洋人種が自己以外の人種を有色人と呼び、之に對し今日の様なる我儘勝手の振舞を續行すれば、必らずや之に對する所謂有色人種の大反抗を來すべく、其の兆候は歴々と顯はれ來つた、即ち東西兩人種の關ヶ原が來る。此秋に於ける日本の去就進退抑も如何。東に在るの故を以て東に與すべきか、

東の諸國には武器なく財力なく理化學なきを如何せん、日本にして之と與に西に向つて反抗せんとすれば、日本は社稷を賭せざる可らず。然らばとて西に與すべきか、是れ一種の裏切である、裏切者は其の當分こそ珍重がらるゝも、後に疎ぜらるゝは古今東西の歴史之を證明して餘りある。東すべきか、西すべきか、徒らに形勢の觀望を許さぬ。凡そ日本建國以來是よりヨリ以上の大問題とては無いのである。

所謂有色人……………一〇〇千萬
 白人……………五〇千萬
 八千五百萬
 日本

關ヶ原の役、眞田父子は相談の上、父昌幸と次男幸村は西方となり、嫡男信之は東方となり、かくて清和源氏七百餘年來の眞田家を保全した。世界的關ヶ原に日本國民の一半は東方となり、一半は西方となり、らんかなぎ、思ふかなれども、此の如き國家的不統一は許されじ。

日本に百の外交問題がある、千の内治問題がある、萬の經濟問題がある。然しながら如上の三者の如き深々甚に日本國及び日本國民の生存に刻み入るもの、眞の意味の根本問題は斷じて他に無しと信ず。然るに日本にては百多、千多、否萬多の問題に對しては筆に舌に紛々饒々するとても、如上の國民生存の根本問題に對しては手を出す者足を運ぶ者なきのみか、さては筆にする者さへ稀れに、平生饒舌是れ好む國民として是に對して舌すら弄ぶ者少きは咄々怪事である。咄々怪事丈で濟めば良いが、如上の三問題はヒシ／＼として日本に迫り來り、宛も絶對的の大命令の如くになつて來たのを如何せんとする。

日本に是より以上の大問題ありや(世界的關ヶ原に於ける日本の向背如何)

『日本に是より以上の大問題ありや』の解決(人口の處分法)

二 『日本に是より以上の大問題ありや』の解決。

(一)日本の人口の處分如何、(二)日本の石油政策如何、(三)世界的關ヶ原に於ける日本の向背如何、吾々は此の三者の解決に向つて眞劍に邁進せざる可らず。這般の解決にして就かざらんか、日本國及び日本國民は此の地球の上に存在するを容れざる様に至るべきである、吾々及び吾々の子々孫々にして日本國民として生きんことを期すれば、須らく至純の心血を濺ぎて之が解決の方法に向はざる可らず。

一 日本の人口の處分如何 解決法。

人口の増加は目出度き事である。然し衣食住の資料に限りある國土なるを以ての故に吾々は其の増加に就て懸念するのである。然れば人口問題の解決の第一着は衣食住の資料を増加するに在る、即ち

(内) Acclimatization(氣化法)に依り衣食住の資料を増加する事。

氣化法とは、異風土の動植物を新たなる環境に馴致し、以て衣食住の資料を増殖し、以て人類の生活を裨補するを目的とする、而して日本は此の事業を遂行することに順適すること世界稀有である、何となれば(一)陸 平面上 日本の地形は細長く、半寒帯よりして熱帯に入つて居る、然れば世界到る處よりの新たなる陸産物を移植して漸く氣化し得べき公算が多い故である。(二)陸 立方上 日本の地形は幅狭く、海岸より一萬數千尺に達して居る、然れば世界到る處よりの新たなる陸産物を移植して漸く氣化し得べき公算が多い故である。

(三)水 平面上 日本には北極よりの寒流も又赤道よりの暖流も流駛する、然れば世界到る處よりの新たなる水産物を移植して漸く氣化し得べき公算が多い故である。

(四)水 深度上 日本の四周の海は零尺より地球上の最も深き所に達する、然れば世界到る處よりの新たなる水産物を移植して漸く氣化し得べき公算が多い故である。

(内) 生産費を遞減して農産物の收穫を遞加する方法を取る事。

是は一の肥料にしても、營養分のみを重キを措かず、之を醱酵せしめて效力を遞加する方法を取る。

(外) 海外發展に依る事。

所謂海外發展に二個ある、即ち

(一)貿易の販路を世界に搜索する事。是は豆腐屋でも八百屋でも肴屋でも大通を呼ばり歩いてのみ居つては、ナカ／＼新たなる御得意は見付からない、英米とか獨佛とか云ふ世界の大通のみ注意したるは今日までの日本の方法である。然し場末の町なり人の氣の着かない新開地に行くと意外に新たなる御得意が見出さるゝは今日の實際である。何故に日本は這般の方面に注目し、且つ向はざるや。

(二)過剰せる人口の捌口を世界に搜索する事。

二 日本の石油政策如何 解決法。

所謂石油政策を解決するに左の方法がある、

(一)『油斷大敵』否油が斷ゆれば大敵どころか、國が斷ゆる事、即ち『油斷國斷』なる語を日本國民の『日本に是より以上の大問題ありや』の解決(人口の處分法 石油政策の解決)

日本に是より以上の大問題ありやの解決(石油政策の解決 世界的關ヶ原に對する豫備知識)

の間に徹底せしむることが、先づ以て日本の石油政策を確立せしむべき第一着の手段である。

(二)日本國內及び日本に接壤する方面に於ける含油地層及び油母頁岩に徹底的調査を遂行すべし。

(三)如何にして最も經濟的に石炭將た頁岩より石油を採取し得べきやとの研究を奨励すべし。

(四)露西亞、ボルネオ、墨西哥等より永久に石油の供給を仰ぐべき契約を締結すべし。

(五)石油以後の燃料問題……例へばアルコール……の研究を奨励すべし。

三 世界的關ヶ原に對する豫備知識

志ある士は一人にても多く、一日にても早く回教系諸國……印度以西の亞細亞諸國、阿弗利加の北岸諸國……を視察し、以て來るべき世界的關ヶ原に於ける日本の去就進退に就き十二分の豫備知識を博されんことを望む、これが此の問題を解決すべき第一着の手段である故である。

沖繩縣(琉球)が面積は過小、人口は過多、而も工業原料及び動力の皆無なる島土にして、全く行詰りとなれる状態は正しく日本の縮圖である、志ある者は先づ琉球を視察するを要す、何となれば日本の將來を洞察し又如何に日本を處理すべきやとの問題を解決すべき最も時宜に適へる前提である故である。

以上の理由にて僭越にも知られざる國々と云ふ小冊子を著はした、然し『知られざる國々』と名稱を附したる其事よりして僭越である、當初は『邦人に未だ多く知られざる國々』と附名して印刷に附した、見ると山鳥の尾の長々しい、遂に知られざる國々と附名した、然し其實は『邦人に未だ多く知られざる國々』に於ける體験を述べ、聊か以て『日本に是より以上の大問題ありや』の解決の萬一に具へんとする。



三 玖馬

Cuba即ち玖馬を其の國人はクーバと呼び、國都Havanaをアバナと云ふ、世界第

一の大富國で、隨て金錢の價値が廉い故に物價の高いのも道理である、即ち世界に於ける物價の高きは第一アバナ、第二ジ・ハネスバード(南阿弗利加、世界第一の金坑所在)、第三伯林(金馬克制定後の)、第四モンテヴィデオ(ウルグアイ國都)、第五華盛頓(米國々都)、第六福岡市なるは體験である。さて予が何故に玖馬に渡航したりやと云ふことを説明すれば、隨て玖馬の事情が判る、故に之を述ぶる。

布哇には日本人が十三萬とまで繁殖し、日本中學校も三、日本高等女學校も四、日本小學校も百四十餘までになつた。然し米國政府は明治四十一年より日本人の布哇入國を禁止し、又此くまでに發達せし日本の教育も布哇縣當局は廢滅を期して居る。加之、布哇の今日まで頼つて以て立つ所は砂糖業にあることなれども、布哇八島に於て苟くも甘蔗を植うるに足るべき地には悉く之を植え付け、今や餘地とは無い。然らば布哇に代はるべき土地を他に探ぐり置くべき必要がある。

玖馬は布哇の八倍の面積あり、砂糖を産する一個年二十億圓にも上ることがある、隨て日本初め世界中の砂糖は毎日同國より來る電報に依り翌日の相場を定む

る。かくて同國は世界に於ける砂糖産額の約四分の一を出し、而も甘蔗の植付地積は同國政府の報告に依るに全國面積の一割に過ぎぬ。況んや巴奈馬運河の開通前までは布哇こそ日本の隣國であつたが、同運河の開通後は、運河の口に横はる玖馬こそ日本の對太平洋隣國となつた、而して氣候は冬も華氏六十度より下らず、夏も同九十度より上らず、隨て國民一個年の死亡率も日本より遙かに少い、而も人口の密度は日本の四分の一に過ぎぬ、又國民一人の貿易輸出率は世界第一の富國と自稱する北米合衆國々民の三倍である。然れば此國と日本との關係は密接にせざる可らずと、是れ予が渡航したる所因である。

▲概説 コロンブス 閣龍の發見せし以來、西班牙領たること四百餘年、明治三十四年獨立、共和國となる。國語は西班牙語。連年政府の歳入は歳出よりも多く、又外國貿易は輸出は輸入よりも遙かに多し。さなきだに人情は華美を好む。倫敦タイムスはウルグアイを世界第一の美人國なりと稱ふ。然れども予は玖馬ほどに容貌の白皙なる男女を認めたる處なく、實に美少年と美人の本場と思ふ。玖馬政府の報告にも『榮えたる眼、柔く和らげる皮膚』を稱へて居る。

▲面積 人口 七千二百万里(日本本州の半分)、三百五十萬人。アマナ市四十萬人、其他十萬人以上の都會二。

▲産物 砂糖の外、煙草の品質産額共に世界稀有なり(所謂ハバナ煙草)。パイナップル、バナナ、柑類も有名なり。プランデー、アルコロール一個年産額二千五百萬圓。蜂蜜同一千萬圓以上。牛の數五百萬頭。近年米作も漸く興れり。森林に富み、マホガニーなど貴重材多し。又礦業は鐵、銅、石油、滿俺、土瀝青の採掘を稼行せり。

▲日本との關係 玖馬は横濱に總領事館を、大阪、神戸、名古屋に領事館を置く。日本はアマナに領事館あり。玖馬まで日本郵船會社は横濱より大阪商船會社は神戸より、東洋汽船會社は巴奈馬まで汽船航路を開通せり。日本よりの輸出 絹物(手巾、シヨール、匹物)、着物、細工品、扇及團扇、紙類(ナブキン、コッピ紙)、陶器、漆器(箱類最も可)、玩具(獨逸品に優らざれば不可)、スリッパ(支那製に優るもの)、屏風、簾、紙製裝飾品、白粉、茶。

玖馬の少女



(玖馬政府農務省報告に據る)

▲在留日本人 予の初めて行きたる頃には三十餘人に過ぎず、然るに玖馬の事情一たび本邦に知らるゝや、忽ちにして六百人となつた、多くは甘蔗耕地の勞働者、小農場經營者、理髮業者である。アパナ市の大平慶太郎氏(三重縣)は日本貿易の開拓者として玖馬人の間にも重視せらる。但し玖馬に初めて渡來したる日本人は若狹幸太郎氏(能登國羽咋町)にして、三十餘年前亞爾然丁、ウルクアイより流浪して來り、玖馬婦人を娶り、小蒸汽渡船を業とす。

▲在留支那人

一萬五千、國都アパナに中華總會館と稱ふる三層樓の俱樂部を設け、華文日報と稱ふる日本の新聞紙大の六頁乃至十頁の日刊新聞を發刊せり、其の廣告の多きと又廣告中に西班牙文の多きを見て、玖馬に於ける支那人の實力を知るべし。日本品と云ふ日本品は殆ど悉く支那人の手に依て販賣せられ、『新日本』とか『近代日本』など掲板を掲げ、人口五千位の田舎の小都會に於てすら此種の掲板を見る。此等の支那商は日本在留の支那商(横濱の萬泰など)より日本品を直接に輸入し、且つ羅甸系の玖馬人の嗜好に投ぜん爲め、玩具類は佛蘭西より、香水は西班牙より直接に輸入し、日本品と共に陳列して販賣する。然れば玖馬の西班牙商人も支那商に壓倒せらるゝと聞く。支那商が何故に成功せるやと云ふに、(一)資力の豊富なる事、(二)各國商人との間に最も善く連絡を通じ居る事、(三)各店何れも賣子二十名内外を有し盛んに行商せしむる事である。此の三者は支那商は世界到る處に然りである。支那人の玖馬に入りたるは、今より八十年前、即ち清朝の道光二十六年である。然れば其の根柢のあるは當然にして光緒十三年(明治二十年)の出使日斯巴爾亞大使張蔭桓の記事にも『前年直粵水患及海防諸費(古巴)華人捐助一呼而集二萬餘金』と見ゆ。日本商にして玖馬に爲す有らんとするには、先づ支那商と云ふ大敵あることを知るを要する。

巴奈馬運河の開通するや、玖馬にては疾く日本其他東洋諸國との貿易を圖らざる可らずと、識者は頻りに腐心して居つた、此の機會に當り恰も予が行つた故に、日本一個の平民の私的旅行なりしに拘はらず、大統領の謁見、參謀總長より要塞巡視の許可等、眇たる孤客に對して過分に待遇し、各新聞紙も亦た日本と玖馬との隣交を立論し、中には大なる予の肖像を掲げて二頁に亘れる記事を掲載するなど、亦た以て玖馬人の日本に對する感情を窺ふべきである。是より先、米國々都華盛頓にてシアーマン夫人(故米國々務卿シアーマン氏令嬢、米國南北戰亂の英雄故シアーマン將

軍の令姪)より其の先大人の手書を轉贈せられた、其中にシアーマン氏が國務卿として米國大統領マッキンレー氏に寄せたる意見、即ち西班牙の玖馬に對する苛政を痛論し、玖馬の革命を交戰團體と承認し、玖馬の獨立を主張せし草稿があつた。玖馬は實にシアーマン氏が此の主張に據り獨立したるものにして、此の草稿は即ち玖馬建國の淵源である。予は之を玖馬人に示した、玖馬人は玖馬の國寶たるべきものが日本人の手に入り、而も其の草稿が鉛筆を以て走書せるなど殊更趣味深しとて何れも感興に入つた。大統領メノールカ爾將軍には此の草稿の餘白に此くなん書せられた、是れシアーマン氏が米國大統領に寄せたる意見の草稿にして、玖馬の交戰團體たる事を承認すべしと主張するものとす。今志賀先生の需に應じ、其の我が共和國に來遊せられたる記念として喜んで茲に署名す。メノールカ爾。大統領メノールカ爾氏を國都アパナ近郊の官邸に訪ふた、花鳥を縫箔にせし日本風の屏風を立てたる一室に通された、予は巴奈馬運河開通の今後、日玖兩國は隣接し來りたるを以て、彼此將來の親交は日本人の希望する所なりと云ふや、大統領には、余も亦た同感なり、願くは貴下に依りて余が日本と親交せんとする希望を通ぜられたしと答へ、且つ貴下には玖馬の内陸を視察せられたりやと問はれたれば、予は先日來各地方を視察し、今日も亦たグイネス方面に赴く心得なりと答へた。大統領又曰く、余の青年の頃、米國遊學中、貴國人と親交したことがある、右の日本青年の寫眞も所有して居る、一千八百八十八年コルネル大學工科卒業の玖馬人メノールカ爾を記憶せる日本人あるべし、これあらばメノールカ爾の健在せることを告げられたし云々と最も打ち解けて物語りせられたるが、何分にも明後日は此國上下兩院議員選舉の當日のこととて、來訪の客相踵げる様子なりしかば、予は聽て別を告げて退邸した。

長劍斬仇耿倚天。英雄此處不神仙。神仙豈負英雄後。黃葉白雲籠墓田。(馬兒智首倡玖馬革命。後戰死)。
大馬長槍彼一時。百年仰見風風姿。英雄回首神仙處。且薦日東梅數枝。(聖馬兒定。首倡亞爾然丁革命)。
報國書生意氣奇。自誇仍似少年時。寧知貿易風蕭颯。掠去白頭吹鬢絲。(予獲其肖像于本邦。乃黃裝梅花)。
拔劍憐汝既無多。風雪長安夜若何。更憶挑燈重補綴。綿袍定到自三河。(憶內)。
鴻爪雪泥何往還。安南之海瑞西山。半生詩句聊成集。多獲風彩兩笠間。(玖馬歸舟。量三身體)。
後五十年誰替人。頭斤馬骨直三千鈞。扶搖九萬騰程外。成就江湖一逸民。(獲二百八十三斤)。

伯刺西爾の南三州一名温帯三州

の西南部即ち我が日向とも云ふべきミランテ高地の外には最早獲べくもあらず。然れば同州の珈琲栽培も今日よりヨリ以上大なる發展を遂ぐべきや否やは疑問にして、云へばサン・パウロ州の珈琲時代は同州の州閥時代と共に漸く去りつゝありと思はれる(伯刺西爾租税總額の殆ど三分の一はサン・パウロ州より納む、又伯刺西爾共和國以來大統領十代、内五代は同州より撰出せり、然るに近代に到り他州よりも選出せらる)。此くてサン・パウロ州の珈琲時代は去らんとし、而も其の南隣なるパラリーナ州の珈琲栽培こそ之に代つて將來あるものと云ふべく、又パラリーナ州、及び其の南隣なるサンタ・カタリーナ州、及び其の南隣なるリオ・グランデ・ド・スール州、即ち三州のマテ茶時代、農業時代は必らず來るべく、此の三州即ち伯刺西爾の『南三州』一名『温帯三州』こそ予が謂ふ北米加州に代はるべき日本人の移住地である。

伯刺西爾は北米合衆國に日本を加へて猶ほ且つ餘りある大國で、而も地形は簡單であるが、南陸は頗る細長くなり、即ち日本的將た加州の地形となり、此處に『南三州』が在つて、此の三州こそ實に温帯に位し、加之大洋にも面し、全くの日本的將た加州的である。三州の面積、人口及び人口密度は、

	面積(本)	人口	人口密度(一)
パラリーナ州	一五、五〇〇(本國)	一、〇〇〇、〇〇〇	六五
サンタ・カタリーナ州	三、五〇〇(九島)	一、〇〇〇、〇〇〇	三〇〇
リオ・グランデ・ド・スール州	一五、〇〇〇(北海道、樺太、臺灣)	三、〇〇〇、〇〇〇	二〇〇
計	三四、〇〇〇(朝鮮の三分の一を除ける日本)	五、〇〇〇、〇〇〇	一五〇(平均)

即ち面積は北米加州(臺灣及朝鮮を除ける日本の大)即ち日本内地の大)よりも大きく、又殆ど日本全國(朝鮮の三分の一を除ける)と同じである、而も人口の密度は日本の十四分の一に過ぎぬ、これをサン・パウロ州の密度三百五十人(日本の六分の一)に比ぶるも未だ『南三州』には多大の餘地を存する。

サン・パウロ州は流石に珈琲の本場丈かありて、熱帯に在る。然るに一たびサン・パウロ州より境を越えてパラリーナ州に入ると、風土が頗る日本的となる、即ち亭々たる Araucaria (『伯刺西爾松』)は天に聳えて起ち、近づけば杉の如く、遠望すれば松の如く、時には高三十間、幹元の見通り直徑十尺にも及ぶものありて、一見其の温帯植物たるを知るべく、聞く所に依れば、此の木材の強力は歐洲北部に繁殖する『瑞典松』よりも二割方強く、其の森林はパラリーナ州のみにも七千方里に及ぶと。此の杉の如く松の如き樹の下には自然の竹藪が翠黒く連り、全體の風景は我が筑後より豊後にかけての如くである。

伯刺西爾の『南三州』は世界稀有の健康地で、現に予がチースの一大片を一ミル(當時日本二十五錢弱)もて購ひたる鐵道驛ボント・グロッサ(人口一萬餘)にては、一個年中一人の死者無きこともあつたと云ふ。佛蘭西の有名なる旅行家サン・イレーは『凡そ世界の中に在つて歐洲人が其身を立てんとするに是程好い處とは無い』と書いて居る。數年前の世界衛生調査に依ればパラリーナ州の首府クリチバ市(人口七萬八千)の死亡率は人口毎一千に對し一・四・五三、即ち全世界の都會に於ける最少の死亡率である、而も其の死亡者も九十歳以上百歳の者が七人もあつたので、世界第一の健康地なりと云ふことが事實上に認められたのである、首府然りとすれば地方の健康地たるべきは推して知るべしと思ふ。

伯刺西爾の南三州一名温帯三州

伯刺西爾の南三州一名温帯三州

如何に世界稀有の健康地なりとて、天産物の少く、土地の狭く、水の少量なる地方にては、人生上に有利では無いが、伯刺西爾の『南三州』は這般の天恵には無比とも云ふべきである。獨逸のビヒ・ヴィテール著『南伯刺西爾』にも『木材も水も牧場も十分なり、空氣の清純にして又た人を健康ならしむることは、全世界中に復た此の如き處なし』と記載して居る。サンタ・カタリーナ州にては馬鈴薯の收穫一個年に四回にも及ぶ處がある(北米加州將た日本にては一個年一回)。リオ・グランデ・ド・スール州(『南の大河』の義)は其名の如く南米の大河系縦横し、水利の便は良く、地勢は平坦で、伊太利人は米田を興して居る。宜べなり地利に機敏なる獨逸人には『南三州』に續々と移住し來り、世界大戰役の前、早く既に此處に五十萬人とまで數へられたることを。獨逸の經世家には、此處に新獨逸國を建設するに在りと、都會村落の稱も新伯林とかバーデン堡とかノイ・ドルフ(獨逸語『新村』)など、傍若無人に自國名を附した、而も戦後一敗地に塗れ、獨逸本國には復た此の如き意氣を存せず、日本人たるもの須らく此の機會を利用し、伯刺西爾の『南三州』に平和の天地を恢弘せんことを望むや切である。

要するに氣候の中和なるは、パラリーナ州首府クリチバ市の平均温度一六度四(華氏六一度五)、最低八度二(四六度八)、リオ・グランデ・ド・スール州ペロータス市の平均温度一八度(六四度四)、最低三度五(三二八度三)なるを見ても、北米加州に優るとも劣らざることは正しく知らるゝ、況んや土地は佳良で廣大で、住民は人種的差別を知らぬ。予が北米加州及び米國太平洋系の各州に代はるべき日本人の移住地は、伯刺西爾の『南三州』に在りと云ふの不當ならざることは悟了せられたるならんか。

更に又た日本人が外國に移住して動もすれば輒ち其の國民より誤解を招くは、獨逸人と同じく集團的傾向の顯著なることである。米國にては日本人の八割は加州に群居し、伯刺西爾にては九割五分はサン・パウロ州に偏在する、假りに米人が日本に來り、風土が佳良なりとて其の九萬餘人即ち八割は静岡縣のみに群居し、將た又た伯刺西爾人が地利がありとて宮崎縣のみに其の九割五分が偏在することありとすれば、静岡縣人なり宮崎縣人が僻目を以て之を見るは當然である。伯刺西爾は人種的偏見の絶無なる國と稱へられて居つた、而もサン・パウロ州農會及び農業聯盟は『日本人は集團的傾向ありて好ましき移民にあらず』と決議した。『集團的傾向あり』とは輕い意の侵略人種と云ふことにも取れる、然れば將來に於て苟くも伯刺西爾に發展せんとする日本人は、今日の如くにサン・パウロ州のみに偏在せず、即ち『集團的』ならず、『南三州』に分布することとなれば、反日氣分を豫防することにもなる、是れ亦た日本人の『南三州』に分布すべきことを主張する別の理由である。總じて日本人にして將來大に海外に發展せんことを期するには、『集團的國民』即ち『第二の獨逸人』と誤解されることを避くるを主要中の主要とする。

パラリーナ州、サンタ・カタリーナ州は土地高低し、谿谷が其間に開けて宛も日本的である。リオ・グランデ・ド・スール州は南に行くほど平坦となり、水利もありて、伊太利人の米田を興して居る處もある。地勢の變化多きと、空氣の清淨なると、飲食物の資料の豊饒なるに因るものによ、南伯刺西爾の人氣は淳樸で大體で、人種的差別など云ふことを知らぬ。黒(阿弗利加の黑人)、白(歐洲人)、赤(伯刺西爾固有のインヂアン人)、黄(日本人)共に一視同仁で、民族的嫌惡の氣配も無い。予がサン・パウロ市よりサルグアイ國の境上まで五日間、發賣車を同じくせし人々には伯刺西爾の騎兵隊長、伯刺西爾出生の土地周旋業者、露西亞オデッサ出身の貿易輸入商、シリア人(此國には土耳其人と稱ふ)の仲買、夫葡萄牙人妻伯刺西爾人の夫婦、伊太利出身の産科醫夫婦であつた、予が遠來の旅客なるを以て、最と慰はり

伯刺西爾の南三州一名温帯三州

何くれさなく親切を盡くし呉れた。シリア人の仲買は親切で又滑稽を云ふ男であつたが、此男が予を「セニョール・セテ」即ち「七君」と呼び敬したるより、予は「七君」の名にて通つた。これは或る驛にて停車時間を問ふと、寢臺車のボーイには「サチ」と答へたるより、予は此のボーイが予の日本人なるを見、氣を利して英語にて答へたるものと思ひ込み、サチ即ち三十分間の停車時間ありと、下車して食堂に入り、食事を注文し居たるに、件のシリア人には、ソナナことをして居ると流車が君を置いてき堀にしてしまふと、予を引張る如くにして車内に逃れ戻すと、流笛一聲、發車した。ソレ見たことかと云ふ、予はボーイが三十分間停車すると致へたと云ふと、それは此邊にては葡萄牙語セテ即ち七をサチと訛るより、君には英語の三十分と思違へしたのであると答へた、然し向後とも君が流車に乗後レない様にする爲め君を「セニョール・セテ」と呼ぶこととする、これが抑も「七君」の起因である。

サンタ・アンナ・ド・リグラーメント即ち伯刺西爾極南の小都會に着き、ホテルにて晚餐の食卓に就くと、會々音楽の合奏中であつた。程たつと、座客一同は予の顔を見詰め手拍子を取り出した。予の前にて食事し居たる陸軍獸醫官が日本人たる貴君の爲めに特にゲイシヤの樂譜を奏して居るのであると云ふ。かく聞きたるもの、「君が代」と違ひ、予には始終起立するワケにも行かず、樂の終るや、起立して樂人に感謝の意を表すると、拍手の聲は滿堂より起つた。翌日此のホテルの主人には國境外の驛まで遠く見送つて呉れた、全く日本の田舎の通りである(志賀南伯刺西爾日記)。

【前略】更に先生(頼山陽)には當時九州地方の酒の赤くして甜タルキを嫌はれ、途中にて偶々伊丹釀の酒を得られたる節は鬼の首にても獲られたるが如くに打ち喜ばれたる事は其の詩作にても判り候へ共、リオ・グランデ・ド・スール州は最も葡萄酒に適ひ、此州に移住せる幾十萬の獨逸人及び伊太利人には各々葡萄酒を醸造し、其の芳醇なるは伊太利ミラノ萬國大博覽會に出品して優等賞を得たるにても之を知るを得べく、此の生粋の醇酒が大瓶一本五十錢以内(日本貨換算)にて容易に購はれ、且つ先生が赤味噌を好かれたるは夫の鴨川畔の雪見が「さて頼サンンの好物は」とて赤味噌を數へたるにても相判り候へ共、パラナ州もサンタ・カタリーナ州もリオ・グランデ・ド・スール州も何れも牧畜盛んにして、此處に移住せる獨逸人は最もチースを製造し、數日前ボンタ・ゲロッサ驛にて紙幣一ミル(日本二十五錢制)一枚

を出したるに、東京銀座龜屋にて賣る一函二圓五十錢のものよりも多量に有之候、ナント五十錢にて生粋の葡萄酒を數大杯傾け、二十五錢のチースの大片を下物とすれば、夫の伊丹の劍菱や赤味噌など何んのその、小生には蒲萄醉處是吾郷。變箱中華雨不妨。六十年來無此樂。大呼前輩頼山陽(張船山、十二萬年無此樂。大呼前輩李青蓮の句あり)と放吟せざるを得候【下略】(志賀南伯刺西爾書信)。

然るに如上の伯刺西爾「南三州」と河を隔て、パラグアイ國がある。「南三州」と一體に成れる太平洋なるを以て、「南三州」のみを視察し、此のパラグアイに及ばざれば眞の要領を得たるもので無い、況んや此國は大正十年十月、日本と通商條約を締結し、亞細亞人中獨り日本人の移住を許可したるを以て、疾く此國の視察に行つたのである。



伯刺西爾の南三州一名温帯三州

パラグアイ

五 パラグアイ(巴拉圭)

パラグアイは、『南米の心臓』と稱へられ、南亞米利加大陸の眞の中心に在る、大平原國で、全くの山無シ國である。日本の如き山ダラケの、古くくより開けたるが故に地力の盡き果たる嘘へばソップ穀の如き國柄に生れたる吾々には想像だにも着かぬ地勢と地利とである、即ち亞爾然丁國都ブエノス・アイレス市より大洋航行の大汽船に搭じ、ラ・プラタ河を上ること五晝夜、パラグアイ國都アスンシオン市に達するのであるが、ブエノス・アイレスとアスンシオンとの距離は一千十里で、而も其間の落差は二百尺にも至らぬとは、亦た以て廣い大平原であることが知らるゝ、而も水路縦横、全體に沖積層の沃土で、未だ世界に顧みされぬ新方土なりと聞けば、世界大戦役後の今日、歐羅巴よりの移民が『パラグアイマタマタ』と、恰も蟻の甘きに就くが如くに集ひ來るの偶然ならぬことを悟るべきである。

面積約三萬方里(即ち日本内地に同じ)、人口約一百萬、一方里の密度三十三人即ち日本内地の七十分の一である、其の餘地あること知るべし。氣候は同溫線の最高二十四度(華氏七十五度)、同最低二十度(同六十八度)で、國の中央部即ち國都アスンシオン市の一個年平均溫度は二十二度(同七十二度)なれば、日本にて櫻の開花する溫度である。知るべし銀河平原(ラ・プラタ河は『銀河』の義)は廣漠で、平坦で、肥沃で、斬新であり、苟くも舊世界に於て志を得ざる徒は齊しく此處に來りて赤幟を樹つるものなることを、咄々日本の小天地に在りて鬱屈爲す無き者誰か此處に來りて冤の如き氣を吐く者ぞ。

▲概説

一五三七年、西班牙人のアスンシオンを創立せし以來、西班牙領たること約三百年、一八一一年獨立、共和國となる。爾來内亂及び外國との戰爭の爲め寧時なく、又外國人の移住を喜ばざりき、是れ此國に移住する者の殊に少かりし所因なり。然るに近年漸く秩序の定りたるを以て、將來は多望なりとて歐洲各國よりの移民多し。公用語は西班牙語、但し地方にては固有の土話グアラニを使用す。國都のホテルにても英語を解する者は殊に少し。國都アスンシオン人口十二萬。大邑グワイヤリカ三萬、其他一萬以上の都會七。

▲産物

天産物はマテ茶(パラグアイ茶)、ケブララシヨ越幾斯(ケブララシヨと稱ふる堅き樹より搾り柔皮用に妙なり)。農産及農産製造は煙草、砂糖、玉蜀黍、豆類、甘薯なり。蜜柑は主要なる産物にして盛んに亞爾然丁に輸出す。土人は在來米を作りたるものもあり、平坦肥沃にして水利の便殊に多きを以て日本人は米田を興すに最も適せり。地勢牧畜に最も適ふを以て世界大戦後以來冷蔵肉の事業盛んとなり、米國の資本も漸く之に投下せらるゝに至れり。畜産製造(乳製品、肉製品、骨製品、皮製品)も在來行はれたりと雖も、將來は益々興起すべし。

養蠶、シット(黄麻)の栽培、農産物製造(澱粉類、麵類、乾果、油臘)も試みれば成功期すべしと思はる。都會及び村落を除けば、殆ど森林と云ふも誇言にあらず、熱帯、亞熱帯、温帯、三帯の樹木何れも豊富なり。礦物には鐵、滿俺、銅に富む。キキオ及びイビグイの滿俺礦山の埋藏量は無慮六千萬噸と積算せらる。

▲外國貿易

輸出 一個年平均二千二百萬圓。獸皮、肉製品、牛、マテ茶、木材、ケブララシヨ越幾斯。蜜柑。煙草。輸入 一個年平均二千萬圓。織物。食料品。金物類。日本より直接の輸入品なし。

▲交通

日本郵船會社又大阪商船會社汽船にて亞爾然丁に行き、それより鐵道又はラ・プラタ河汽船にてパラグアイに入るを最も順路とす(伯刺西爾と鐵道の連絡もあれども)。日本より船車賃一等約一千圓、三等約二百五十圓。

▲日本との關係

大正十年十月、日本と通商條約締結。日本人の移住を許可し、歸化權、土地所有權を許可せらる。

▲在留日本人

未だ十人に足らず。アスンシオンに福岡庄太郎氏(佐賀縣唐津町)あり、大正四年亞爾然丁より移り、國人を娶り、『日本花園の福岡』を知らざる者なきまでの盛譽あり。イナッルベの南亞米利加製糖會社(英人經營)製造技師長田崎エザアルド氏(長崎縣大村町)、ホルト・カサードの單寧製造會社會計長佐古田謙藏氏(京都府舞鶴町)

パラグアイ

パラグアイ(日本人移住の注意)

一 日本人移住の注意 資本の必要。

パラグアイの土地は廣漠無邊である、隨て土地の低廉なること日本など、比較すれば只と云ふも可なりで、パラグアイ河より西方北方の所謂チャコ地方にては二十町歩や三十町歩は無代にても得らるべしと思ふ。然れば相應の金額にて大々地面を購求せらるゝのである。然り然るが故に苟くもパラグアイに移住せんとする者は、須らく日本より資本を携帶して行くべく、在來の如く外國に移住して外國人に使備せられ、其下に勞働するなど、云ふ觀念、時代を解せざる觀念は一切脱却すべく、資本を携帶せざる者は、成功の見込覺束なきを以て、パラグアイなどに行く可らず、是が日本人移住の第一の注意である。只同様にて廣大なる土地が得らるゝ、故に之を開拓するには集約的方法を要せず、粗放式の農業を主とする、粗放式の農業には大なる器械を要する、即ち一も資本二も資本で、勞働の如きは第三第四である。然るを土地が只同様なりと云ふことのみを聞き込み、何等資本を携帶せずして移住すれば、百年銀河の水の清キを待つも成功を期すべからず。豈にパラグアイのみならんや、亞爾然丁に在留する日本人は殆ど三千人に上り、而も成功者として見るべき者一二に止り、就中獨立して農業を經營する者極少數なるも亦た資本の缺乏に座する。然るをパラグアイに於ては其の國都に於てすら一日の勞銀一圓二十錢(日本貨換算)より八十錢、二十歳前後の男子一箇月給料十二圓、十三四歳の男子同六圓、下婢同六圓、子守同三圓二十錢より四圓なりと知れば、日本より勞働の爲めに移住したりとて何程の貯金することをか得べきぞ。然れば外國とさへ云へば移住し、移住して勞働し、勞働して貯金し、貯金して資本を博し

資本を博して開拓に従事するなど云ふことは、全くの時代後レで、今日は日本より資本を携帶して南米に移住し、勞銀の日本に於けるよりも低廉なるパラグアイ人なり伯刺西爾人なり但しは伊太利人を使備し、自から地主となり、以て我も利し彼も利し、以て自己も榮へ他をも榮へしむべきものである。

二 日本人移住の注意 西洋人なるもの諒解。

以上は日本人の移住に對する有形上の注意であるが、更に大なるは無形上即ち精神上の注意で、即ち西洋文明の眞髓を解せざる者は、所謂排日を免る可らざることである。予は今日まで世界到る處の排日地方に出入した、而して何故に日本人が此の如くに排斥せらるゝやと云ふことを種々の方面よりして解釋した、曰く人種上、曰く日本人の勢力の發展、曰く日本國家の膨脹、曰く一種の世界的流行、曰く日本の教育方針の田舎的なる事……世界より看下して……、其他曰く何、曰く何、而して何れも其の眞諦を得たるものに非ざることウルグアイ第二回の旅行中に悟發したのである、即ち日本人は西洋文明の眞髓を未だ解せざる者にて、これあるが爲めに西洋人との間に眞成なる理解を得ず、かくて以て排日なるものゝ到底免る可らざること悟發したのである。所謂西洋文明の眞髓とは何ぞや、婦人と藝術とを神視することで、此の精神は如何な南米三界に到るまで、西洋人種の國は西洋人種の國として滿遍なく浸み込んで居る。然るに日本人には此の眞諦を悟發しなかつた、是に於てか彼此の思想の間に劃然たる大溝渠が存する、是が彼此の融合せざる骨子で、即ち排日問題たるものゝ早晚いつしか發作すべき所因である。然れば苟くも日本人の海外發展を期するには、先づ以て此よりして悟發するを要する。

ウルクグアイ(日本人移住の注意)

ウルグアイを旅行中、連日の新聞紙上に日本を野蠻視する婦人連の意見が満載せらるゝを閲讀し、事の意外千萬なるに一驚を喫したるのみならず、記事上より推察すれば、予は同國旅行中、日本人として石でも投げられはせぬかと思へる氣勢であつた。然し毎日々々の新聞紙を讀み下して事の顛末が判明した。是より先、日本艦隊がモンテヴィデオ港(ウルグアイ國都所在)を拔錨せんとする當日、軍艦淺間の一機關兵が脱艦した、亞爾然丁駐在の日本官憲には艦長の依囑に應じ、其の逮捕をウルグアイ政府に照會した、ウルグアイ政府は探索して逮捕した、件の水兵は言語の通ぜざるより、手眞似もて日本官憲に引渡せば、自分は死罪に處せらるべしと示した。するとウルグアイの婦人は一齊に起つた、自分の稼ぐ仕事(しごと)が嫌だと思つて其の仕事(しごと)を止めるとして何が悪い、全く當人の自由意思に任すべきものである、元來が罪とすべきもので無い、然るを死罪に處すべしとは何たる事ぞや、是れ實に人道問題である、アと外國の憐れなる弱者に同情せよ、若し我がウルグアイが南米の最小國たるの故を以て大國たる日本の武威に屈服し、此の水兵を日本官憲に引渡すなどのことあれば、アルチーガス以來俠義を以て一貫したる我がウルグアイの歴史を潰すものであると、婆(おば)サンも小娘(こむすめ)も大統領に書面を送る、書面は丘(やま)の如くに積む、大統領の夫人は家庭に於て其夫たる大統領を詰責する、外務大臣の夫人も其夫に怒鳴る、警視總監の夫人は其夫に對し何故に件の日本水兵を逮捕せりやと叱咤する、はては全國の婦人團體は總聯合して政府に迫る、各國體よりは代表者を派遣して水兵を監獄に慰問する、差入物(さしいれもの)をする、貴婦人連よりは自から編みたる靴下(くつした)、自から縫ひたる衣類(いり)を續々と送り來る。すると青年團體は之に共鳴して起

ち、若し政府にして水兵を日本官憲に引渡すなど云ふ沒義道(めつぎだう)のことをすれば、疾く政府を顛覆すべしと唱へ、且つ一日も速かに水兵を監獄より放免すべしと迫る。是に於てか大統領は水兵を監獄より放免した。すると婦人連は大群集を成して水兵を歓迎し、一貴婦人は逸早く之を其の家庭に使傭することとした。是に於てか一時ヒステリーの發作したる如きウルグアイの婦人社會も鳴を靜めたのである。

又パラグアイ國都アスンシオンの裁判所の前を通ると、五十歳バカリの貧乏らしき一婦人が街上に怒の聲を上げつゝ演説して居る、曰く余の訴訟事件に對する判事の判決は不條理なり、特に辯護士の不親切なるはコレ／＼の如しと、往來の男子は立止りて謹聽し、多くは脱帽して居る。婦人の人格を尊敬することは如何なる南米の片隅(かたすみ)にても以上の如くである、而して此間の消息は未だ日本人に理解せられぬ。

又一たび「志賀」と云ふと、伯刺西爾の内陸の如何なる耕地に行きても赤痢菌發見の大先生かと問ふ。同國パラナ州の汽車中にて隣席の伊太利人が予に姓名を問ひたれば、志賀と答ふるや否や、件の伊太利人は注射液發明の恩人其人かと叫んだ。又パラグアイに行くや、同國外務大臣にも日本に志賀あることを知つて居つた、以上の志賀とは醫學博士志賀潔氏、即ち赤痢菌發見者のことである。志賀潔氏より更に大なる某氏あり、歐洲大戰役の前に一たび紐育(ニューヨーク)より歐洲に行くや、獨逸にては皇室の正賓となり、壤地利にては老皇帝フランツ・ヨーゼフ陛下の正賓となり、丁抹(てんま)及び西班牙にては滞在中は各々男爵として待遇せられ、後南米のエクアドル國に行くや、同國陸軍名譽將軍に任ぜられた。總じて西洋にては學問を尊尙すること此の如くである、而して此人一たび日本に歸朝するや、先例とか申す過去の因襲に

パラグアイ(日本人移住の注意)

拘泥し勳五等に叙せらるべき内議があつた、其間に周旋する者があつて僅に勳四等に叙せられたのである。此人既に世界の萬衆よりして事實上大勳位以上に叙せられて居る、勳四等勳五等彼に於て何かあらんや。然れども翻つて沈黙考すれば、東西思想の大溝渠は此に存するのである、咄々「女子と小人とは養ひ難し」など云ふ思想、學問藝術を輕視する思想、是が日本と西洋と全然反對する點で、所謂排日の眞の奥源は此處に在るのである、而して此の奥源を究めず奥源を淨めざれば、折角に日本人が海外に發展したりとて、排日なるものは早いか晚いか發作すべきものである。ウルグアイの旅行中、會々排日の由つて以て來るべき眞諦を悟發したるを以て、聊か日本人の移住者の爲めに注意せんとするものである。

パラグアイは南亞米利加大陸の眞の中心に在る、大陸の眞の中心に在る國にこれから行くのかと思ふと、當初何んとなき悲壯なる感懐を催ふした、然らば同國に入らんとするや、

黏天大野望將迷。一鵬掠空雲脚低。不厭游蹤落三人後。荒塗自是入巴圭。

の一絶を得た。天涯漂泊の一遊子、固より官命に非ず公用を帯びず又囑托に受けたるものに非ず、然れば國情の調査も困難なるべきを深想し、ラプラタ河(銀河)湖上の汽船中に相乗の諸客に向ひ、パラグアイ國都アスンシオン市内にてホーイの英語を使用するホテルありや否を問ひ合せた、諸客は何れも無しと答へたるが、一塊地利人夫婦には獨逸語もてパルク・ホテルと云ふがある、主婦が英人なれば主人は伊太利人(ナブル出身)なれども亦た英語を解すと敬へて呉れた。依て上陸するや直ちに自動車を飛ばし行くに、頗る優雅なる建築風にて、主婦には Waiter(給仕する、米國英語 Wait on) depart(出發する、同 leave)なげふより、予には「奥懐 私 は南米に來て初めて倫敦の英語を聞きました」と云ふと、主婦には「如何にも生粋(Cooney)の倫敦子です」と莞爾として答へた、予は此處に宿泊して誠に日本に歸つた様な心地となつた。

パラグアイ(日本人移住の注意)

翌日早天、アスンシオン税關長ルイス・エルモサなる人、大統領閣下よりの公命なりとて來り謂つて曰く伯刺西爾駐在弊國公使より貴君(志賀)が弊國に來遊せらるべきことを電報し來つた、依て弊國大統領には小官に命令し、貴君を埠頭に出迎はしめ、且つ貴君の手荷物一切を検査無くして通關せしむべしとのことであつた、即ち小官には昨夕汽船の到着するや、「ヒューコー・シダ」にて船中を搜索したるも遂に其人に見當らず、聞けば「シゲタカ・シガ」云ふ一等船客の日本人が上陸するや直ちに自動車にて驅け去つたとのことである、依て昨夕以來、市内の各ホテルを物色し、貴君の此の旅館に滯泊せられたること判明したれば、茲に公命を致し、且つ昨夕小官が貴君を見出す能はざりし疎忽を謝す云々と、依て予には税關長に對し、手数を懸けたることを感謝し、且つ後刻大統領閣下に面謁して其の厚待を感謝すべしと云つた。「ヒューコー」とは「重岳」の西班牙發音であるが、曰くゲユッカウ、曰くヒューコー、曰くチヨウカウ、曰くシゲタカ、一名にて日本ほど混淆せしむる處とては世界に復たない、今回に限らず是か爲めに予には低位他人に迷惑を懸けたことか知れぬ、依て前非を後悔し、子々孫々に復た漢學的名を附けべからずと、爾來實行して居る、日本人にして將來の世界に發展せんことを期するには、先づ漢學的の命名を廢止するに在る。

大統領ニウセヒオ・アジャレ氏を政廳に訪ふた、其父佛蘭西より移住し、此子を此國に生んだ、即ち子はパラグアイ人なるを以て大統領となりたるものである、然れば流暢なる佛蘭西語を使用し又英語を操る、故に十二分に相互の意思を通ずるを得た。大統領曰く、小國よりして大國と化したるもの何ぞ限らん、然るに日本の如き其の最も典型となすべきもので、余は驚嘆すべき國として日本を景仰する、其國人にして弊國に來住すれば、余は之を歡迎すべし、實は余が外務大臣の在職中に日本と通商條約を締結したのであると。予云ふ、僕青年時代に英國文豪カーライルの『ドクトル・フランシス論』を愛讀し、又ロベス伯刺西爾、亞爾然丁、ウルグアイ三大國の聯合軍を逆へ討ちて六年の久しきに亘りたる事蹟を知り、人をして憧憬措く能はざらしめた、今日圖らずも其の憧憬措く能はざらしめたる國土に來り遊び、先づ大統領閣下に謁見して半生の所懐を述べ得たるは誠に感激に堪へざる所なりと。大統領は聞き了りてペソを取り數行の西班牙文を手記し、是れ先生が能くも弊國に來遊せられたることを欣喜する余の所感を記したるものである、聊か以て記念とせらるれば幸甚なりと、翌日大統領秘書官は大統領の名刺を携へ、予のホテルに答禮に來た。

パラグアイ(日本人移住の注意)

予がドクトル・フランシアを憧憬せりとのこと傳はるや、國立大學總長パーエス博士(再び外務大臣となり又英米兩國公使となりし人)よりは其著「ドクトル・フランシア論」(「パラグアイ史考」を贈り來る、國立博物館も同圖書館も水曜日閉館すれども特に開館し、パーエス博士の令息は懇々來りて説明の勞を執られる、圖書館長には一つ貴君に御覽に入れるものがあるとして示されたるは「陸軍大將伯爵乃木希典」と云ふ名刺である、予は天涯萬里、故將軍に逢ふが如き感を催ふした。政府よりは各種の統計表を運び來る、此國の魚譜、植物譜、氣象の研究、人種の研究に關する夫れ々の著述を贈り來る。ハラグアイの官民が予の今回同國に遊び來りたることを如何に喜びたるやは、其の感情が歴々と見ゆる。依て予は此際同國の内閣諸公を予がホテルに招請し、一夕の歡を盡くすも亦た兩國將來の交情の爲めに可なるべしと、晚餐を供することとした。外務次官は招待に應じて來るべき人名を告げん爲めホテルを訪はれたるが、折柄予は外出中なりしを以てホテルの主婦に告げて去つたのである。依て予は主婦に向ひ、外務大臣は其の夫人同伴にて來り臨まると云ふ、夫人はバリー子なることである、此際意氣な献立もて倫敦子の腕を示されたしと云ふ。主婦云ふ、然らば銀河のゴルビーナ魚(川鱈の如き魚)を調理し、紅白葡萄酒は伊太利釀よりも亞爾然丁メンドーサ釀が垢拔せり、三鞭酒は矢張り佛蘭西釀を供すべしと。日本のハラグアイ開拓者福岡庄太郎氏(日本花園主)をも招く、氏には其の花園より大輪の薔薇花を澤山に携へ來りて食卓を飾り、杯盤は花の裡に在るが如し。

此夕、外務大臣アルセ氏及夫人、大蔵大臣エリヒオ・アジャラ氏(當時未婚、現大統領)、外務次官エグスカイサ氏(夫入は喪中にて缺席)、其他諸君子皆來臨、十一時歡を盡して辭し去つた、諸君子が記念自署の紙端に書すらく、

大正十一年十一月。游于巴拉圭國。其廿二日夕。招請臺閣諸公子。Parque Hotel。會政府軍破革命軍于猿橋。外務大臣凱旋三國都。乃携夫人一見臨席。得意可想也。時新月懸于檳榔樹上。微光透葉而射杯盤。來。如畫如詩。以上の如くパラグアイの旅は愉快々々で、予が外國旅行中の最大開心事であつた。然るに當初悲壯なる感懷の詩を賦したかと思ふと、自分にて可笑しやら恥しいやら、純の島國人で、純の純たる島國根性たりしことを告白する。

珈琲肯不三向君誇。萬里巴西莫憶家。少女水晶簾外立。慧心留客薦唐茶(Brazil)。漢人呼做巴西。

鷲鳥低迷大野開。長江不棄向天回。平林小聚家三五。定自日邊移住來(聖保羅途上)。

六 智利の硝石地方(當時の記事文)。

「科學と金錢とさへあれば何事も出來得る」とは、札幌在學の時、米人の教師より聞いた語である、其時は聞流シにしたが、圖らざりき四十年後の今日と云ふ今日、此語が事實中の事實であることを眼前に見るべかりしとは。北智利の海岸、約四百三十哩、唯だ砂、砂、砂、砂のみである、雨無く、水無く、一木一草無く、見渡す限り無き沙漠である。さるを或は百哩、或は百五十哩、或は百八十哩、或は二百數十哩の鐵管を敷き、これを一萬尺乃至一萬五千尺の高あるアンデス山中に埋め、山の雪汁を利導して沙漠に漑ぎ、此處にタルタル(人口一萬)、アントファガスタ(五萬二千)、メヒョーネス(五千)、イキーク(二萬八千)の如き都會を造り、「沙上の樓閣」とは創世紀以來堅固ならざるもの、諺なりしが、沙上に最も堅固なる樓閣を築き上げたのみか、防火用の水管は市中に四通八達し、アスファルトたよきの巷衢には水を撒き散らし、草木はおろか、土までも遠隔の地方より輸送し來りて、幾多の公園を造り、街路樹を植え、アントファガスタ市の「十月十二日公園」の如き長八町、草木鬱葱として、内に三池二噴水あり、園の中部は兒童の運動場に充て、折柄の日曜日なりとて、集ひ來れる男女兒童は二百を數へ、各種の體操器械に依て相遊び相戯れ、其の祖父母、或は父母、或は兄弟姉妹は綠蔭のベンチに倚りて嬉笑しつゝ眺め居れるなど、宛も一幅天國の圖である。それよりホテル・ロンドレスに歸り、室に備付の風呂に入り、冷水のシャワーを頭より浴びて髪に纏へる沙漠の砂を一洗し、やがて温湯のタップに全身を浸し、

智利の硝石地方

智利の硝石地方

得も云はれぬ好き心地となりける折柄、つく／＼考ふれば、これが日本に於ける南米通の某君が何かの翻譯に依り、此の地方にては水一杯とビール一杯と同値なりとか、又は米國隨一の南米通なるベック女史が「水の無き時は其代りに三鞭酒を飲みたり」など記せるは、是れこそ創世紀時代の事實にはあらずやと、今更ら「科學と金錢とさへあれば何事も出來得る」と、往にし恩師の語をば茲に感悟した。

智利に於ける各硝石會社、又之に附帶して興されたる鐵道、水道等は殆ど悉く英國會社の所有にして、水道は這般會社の副事業である。本社は倫敦に在るものと合算すれば、智利硝石に投ぜられたる總資金は約一億磅に上るべく、其の一個年の輸出額は一百數十萬噸、智利政府の歳入の半額は輸出税より來る、是が大沙漠の砂の數尺の下に埋藏せられ、未だ二百餘年の生命あると云ふに至ては驚くの外は無い。

さて硝石の成因に就ては研究未だ不十分であるが、獨逸ネルネル氏の説が宗とされて居る、即ち北智利の沙漠はアンデス山の隆起に依り大洋より持ち上げられたる内海で、無量の海藻が生じて居つた。内海は漸次に隆起して海拔千五百尺乃至千八百尺の高となり、水は涸渇し、海藻は腐敗し、並に硝化作用を成す黴菌を生じたが、降雨の無き地方のこと、て流失の患も無く、自から硝石を造り、其上を土砂が吹來つて蔽ふたのである。

硝石の起因は簡單であるが、採掘及び製造法も簡單で、硝石の上を蔽へる土砂に穴を穿ち、内に黒煙硝又はダイナマイトを盛りて爆發し、かくて四散せる硝石の裂片を拾ひ採り、水に投じスチームにて蒸して溶解させ、ダン／＼と冷えると、重き土砂は水の下に溜り、輕きは上に浮び、六日間たつと皎々雪の如くに結晶する、これを取り出して天日に乾かすこと亦た六日間。かくて袋に入れて輸出する。

予の郷里三河は花火狂の處で、誰一人として花火の製法(大きく云へば硝石の成因までも)知らぬ者は無い、予の幼童の頃には、椽下の土を掘り、鼠の死んだのや魚の腸を埋めて置くと硝酸が多量となり、又硝化作用も多力となり、且つ椽下のこと、て硝酸の流失する患も無い。かくて此の硝土を堀り採りて花火用の煙硝を造つたもので、ネルネル先生が智利硝石の起因を發表されたる説と吻合する。そこで三河にては、椽下より堀採つた土を粉にして鍋にて煮る、煮ると土砂は鍋の底に落ち、上に灰汁が残る、此の灰汁を冷して置くと白く結晶する、これに桐の炭を雜せて薬研にて磨つたものが煙硝となるのである。今予が此の四百三十哩の大沙漠の中央に立ち、資本金一億磅(日本十億餘圓)を投じたる硝石田の中央に立ち、硝石の成因を考へ、採掘及び製造法に考へ廻らすと、妙不思議にも考へられたが、然し三河の幼童の花火を造つた通りで、妙でも不思議でも無い。

それよりも妙不思議なるは、硝石なるもの、此處に存在することを識り、其の性分を識り、反應を識り、效力を識り、利用の途を識りたる科學の力其物である、而して之に依て一水一泉一草一木無き大沙漠の全くの砂の上に堅固なる樓閣をば百となく千となく萬となく築き上げ、「危きこと砂の上に築きたる樓閣の如し」と叫びたる耶穌基督其人をして一千九百年後の今日に顔色無からしめたるは、「科學と金錢」の力其物である、アと「科學と金錢」の力、誠に以て妙不可思議と云ふべきにあらずや。

之を妙不可思議とは云ふ、妙不可思議の極とは云はぬ。知れよ土を肥して植物の生長を助け、收穫を倍增する肥料其物が量の限りも無く幾萬年の久しき間、此處に埋藏せられ居るも皮肉である、然し之が一草一木だに無き處に埋藏せられ、之が一草一木どころか世界麗億の植物の生長を助け收穫を倍增し、依て以て世界麗億の生靈の衣食を豊足せしむるかと思へば思ふほど愈々皮肉の感に堪へられぬ。かくて世界麗億の生靈の衣食を豊足せしむべき肥料かと思へば、亦た世界の大禍害たる戦争其物を助長し其の

智利の硝石地方

惨烈を倍増せしむる火薬、爆薬、炸薬となり、以て世界麗億の生靈を殺傷せしむるに至ては、愈々益々皮肉である。かく死傷せしむるかと思へば、亦た此傷を治療する最良薬の沃度は硝石より製造せられ、一方に於て人を死傷せしめ、他方に於て克く其傷を治療するのみか、火薬、爆炸薬は外部よりして人身を糜爛せしむるのみであるが、内部よりして人身を糜爛せしむるもの、即ち人の血を腐らしむる疾病、即ち戦争其物よりも禍害惨烈にして、今の世界の最大禍害なりと稱へられたる微毒其物に至ては、これを根本的に驅逐するには沃度に是れ頼るの外無い、而して沃度は硝石の副産物として其の産出餘りに多く、かくては世界に於ける沃度の價を低下せしむる慮ありとて、此の地方の硝石田にては沃度の産出を豫め制限して居るのである。かくて初めは皮肉に思ひ、次で愈々皮肉に思ひ、次で愈々益々皮肉に思ひ、次で皮肉の思以上に出で、是に於て自然の力こそ眞に妙不可思議の至致なれてふことを感悟し、『科學と金錢』とが克く之に及ばざることを覺り、茲に天地の恩の洪大無邊なることを感悟し、予は今洪大無邊なる感悟に打たれつゝ北智利の沙漠に獨り立つて居るのである。

汽車はツン／＼とホリグイア國との境界を目懸て北東行する、兩側は砂、砂、砂、砂のみである。謂ふ勿れ、沙漠の景色は單調なりと、谿が穿たれて居る、平地が連なる、高臺が延いて居る、圓き岡が立ち、稜線の鋭い山が崛起する、一谿一山苟くも雷同せず、一々それ／＼の趣を具ふるのみかは、其の太陽に對する光線と影とに云ふ可らざる趣がある。十餘年前に埃及の沙漠を涉りたることがある、其節には何の感興だに催ふさざりしが、今日は汽車が進行すれば進行するほど愈々益々面白味を増し、今更らファン・ダイク氏(米國ニュー・ジャーシー州ラットガース大學の)が千古不磨の美文『沙漠』を想ひ起した。車中食堂にて南米刺下の大問題たるABC三雄國(A亞爾然丁、B伯刺西爾、C智利)

の軍備縮小問題に花が咲いた。予は隣席の西班牙人に向ひ、君は外國人として公平なる批評を下さるべきが、智利の如き硝石と武とを以て立てる國が果して軍備を縮小せられ得べきものなりやと問ふた。すると西班牙人の云ふには、智利は今や財政困難の極に達して居る、外國債を募集したるも前々度よりの外國債の元利に差引せられて手に入りたるものは少額に止り、紙幣は下る一方である、何とか局面を轉回せざる可らざる秋に當り、其の歴史的友邦たる伯刺西爾よりABC三國歩調を共にして軍備を縮小すべき内議を提出せしのみかは、夫の四十年間智利秘露兩國葛藤の温床なりしタクナ、アリカ所屬問題も、米國の仲裁に依り、タクナは秘露に歸し、アリカは智利領と確定せられ、智利としては今や北顧の患は無くなつた、然れば智利は軍備を縮小すべきものであると。聞き了りて予には、南米隨一の武國たる智利すら軍備を縮小すべき氣運にありとすれば、南米の平和は依て以て期し得べく、世界の人道の爲めに慶して賀せざるを得ずと、革囊より櫻正宗の瓶を取り出し、是れ一萬五千粒の先より來りたるものである、希くは諸君子には此酒を酌み杯を舉げて世界の平和を祝されたしと、皆云ふ余等は生來未だ曾て日本酒なるもの、味を知らず、疾く御馳走に預らんと。依て予には車中の十六人に一々注ぎ廻はり、さて智利及び西班牙の諸紳士の外に其他の國人在らせらるゝやと問ふた、後方に座を占め居たる二人がダルマチア人なりと答へた、即ち予は杯を舉げて、智利大統領閣下、西班牙皇帝陛下、セルボ・クロアト・イ・スローヴェネス皇帝陛下の萬歳を祝すと唱へた、すると一人のダルマチア人が余はクロアト種なり、日本皇帝陛下萬歳と唱ふるや、堂内の十六人は一齊に之に和した。ア、我が親聖文武なる天皇陛下の萬歳を祝し奉りたる者世界に於て幾千萬人あらん、然し智利ホリグイアの境上、大沙漠の中央、日本酒の杯を舉げて祝し奉りたる者は恐らく此の十六人を以て空前なりとせん。

日本天皇萬萬年。一齊和唱西邦賢。舉杯相酬櫻花酒。十有六人無後先。

と口吟した、惡々句も茲に至て極れりと云ふべきも、字々悉く事實にして、漢詩人一流の浮辭一だに交へない。

汽車は沙漠を走ること八時間、午後三時、プラーシヤ驛に着いた。マリア硝石田監督ロバート氏夫妻自動車も待受け居られ、沙上を驅ること少時、其の役宅(Office)に投じた。水を二百哩以外一萬五千尺の高々あるアンデス山中より引き來り、役宅の四周には木を植え、花を植え、芝を植え、野菜を植え、殊に菊、薔薇、葵、石竹、朝顔、セラニ

智利の硝石地方

智利の硝石地方(Fampra Maiaの一夜)

チーム、カーネーションなど紅白紫黄咲き亂れ、人をして大沙漠の中に在ることを忘れしむる、況んや所在に學校あり、病院あり、集會所あり、ホテルあり、音樂壇あり、劇場あり、活動寫真館あり、兒童唱歌の聲と鶏犬の聲と相和するなど、愈々以て『科學と金錢とさへあれば何事も出來得る』の事實を感悟せしむるのである。

夜九時、ロバーツ氏夫妻主人となり、マリア硝石田の首腦を一堂に會して晚餐を供せられた。餐後、サルンにて出生調が初まつた、ロバーツ氏は英蘭人、夫人はケント州(倫敦附近)の産、其他、一氏は英蘭デヴォンシャー州で、他の六氏は悉く蘇格蘭人である。依て予は此くも蘇格蘭の方々が幅を利かして居つては、私は此際英蘭に轉籍し、曾てコロンウォールを巡遊し、風景を愛賞し措かざれば、コロンウォール人となつて蘇格蘭の諸君子の向フを張らんと云つて、此夕は英蘭人となつた。話題は何處も同じ南米ABC三國の軍備縮小問題である。予は凡そ社會改革を進行するには年の若き人々に限る、老人は舊例とか慣行とか云ひて兎角に過去に執着するが故に到底改革なるものを進行する果斷が無い、眞の世界の改造は年少者の猪突猛進に是れ限ると云つた。すると六氏は未婚の年若き人々であつたが、一齊に予の所説に鋒を向け來り、經驗と云ふものが社會改良には必要である、經驗を多く所有する人こそ社會を適當なる處に導く教師であると、六十の老人たる予が年少者の辯護人となり、未婚の六氏が却て老人の代表者となり、ビールとリキール酒とを酌みつゝ、討論二時間に餘り、やがて夜も十二時近くになりたれば一同寢に就いた。沙漠中の一夜である、然し予には英國人諸君子の心からの歡待に依り家に在るが如くに安眠した。

街舖大理淨無泥。綠蓋紅幢萬戶齊。繡傘如花人似玉。珈琲香裏入巴西。(Brazil 漢人呼做巴西)。
 與郎和唱定風波。眉樣遙山秋瘦多。織女看來應妬死。幾回雙槳渡銀河。(渡Rio de La Plata譯銀河)
 十年重也渡銀河。吹送天風神女歌。生怕南球春爛爛。輕紗覆面哲人多。(再渡銀河亞爾然丁固執白哲主義)。
 如許大觀天下無。萬峯稽首似披圖。振衣安諦斯山頂。老鶴盤空低自語。(Andes 絕頂)。
 行過險棧一番涼。谿水潺湲向故鄉。今日無端憶唐句。馬頭初見大東洋。(經印度洋南極洋大西洋初望太平洋)。
 劈空遙翠二三四。早識躡躡從是始。攀到萬三千尺高。逶迤鐵道入知利。(自亞爾然丁超安諦斯)。
 逶迤鐵道入知利。一抹紅霞覆洞天。仙女何來笑迎客。桃花人面執婢妍。(Los Andes)。

七 中部墨西哥。

布哇に代るべき日本人移住地は玖馬(第七一一頁)で、又北米加州に代るべき日本人移住地は伯刺西爾の南三州及びブラグアイ(第一二一一一八頁)である。然るに茲に一つ顧慮せざる可らざることは、這般の地方が北米加州よりは餘りに隔遠なるを以て、足纏ヒのある日本人は米國加州又は太平洋岸を引揚げて伯刺西爾の南三州又はブラグアイに移轉することは容易ならず、所謂言ふべく行ひ難い一事である。然れば足纏ヒある人々の引揚地は之を南米の他に需めざる可らず、加州に隣接せる方面に需めざる可らず。加州に隣接するは即ち墨西哥で、加州の南は即ち北部墨西哥である、然らばと北部墨西哥に行つた。北部墨西哥に旅行中、第五回革命(ヂアス治世以後の)が勃發した、今次の汽車に乗り後れると復た日本に歸り得じとの情報を得、ノロノロせる馬車を驅り、鞭に任せてチワワ驛まで馳せ着けんとする途上、後よりハローノと呼ぶ者がある、見知らぬ一米人である、ヘルツェルと云ふ名刺を先づ出し、次で一個の重量ある封書を出し、君(志賀)が米國々境内に入つた時に何卒米國郵便函に投じて呉れよと手渡した見ると、米國セント・ルイス市の某鑛山大會社宛の信書である、墨西哥郵便局は米人の此種の郵便を發するか、然らざれば沒收する故である、予は其の依頼を承諾し、遽しく汽車に飛び乗つた。北部墨西哥の視察は此の如き際なりしが故に然なきだに不完全のものであつたが、然し大體に於て下の如き判斷を得た、曰く北部墨西哥は地味は良いが、水利の便が乏しい、隨て土地が唯だ廣漠として市場が少い、のみなら

中部墨西哥

八 緬甸

其の面積は恰も我が日本(朝鮮を合したる)と同じく、人口は一千四百萬に上り、米を産する一個年四千五百萬石、加之チーク材の本場として世界に知られ、森林の面積無慮二萬五千方里(日本内地の大)、更に又東部亞細亞第一の石油國として近年頗る擡頭し來つたのが緬甸である。其の住民とし云へば吾々日本人と同一種なるを以て、自から日本を憧憬し居り、上流婦女子の優麗なるは我が京都美人の概がある、而も日本人の在留する者未だ五百に滿たず……支那人は十三萬……我が日本郵船會社、大阪商船會社の汽船は定期航路を開通せるを以て、日緬兩地の關係は今後愈々益々密接にせざる可らず。

緬甸は世界の佛教國である、幼童はキアウンガ(修道院)に入り、黄衣を着けて佛弟子となり、三年間はホンガイ(僧侶)に學ばざる可らず、かくて因循となり保守的となり、突進猛學の青年的意氣を一切消耗した、而して其國は亡びた。蘭貢より六十一哩、平田の間の道路を自動車にて疾驅し、ムグの臥如來に參つた、長三十一間、世界第一の佛像と稱ふ、花の如き緬甸美人が參り來り、白魚の如き拿の指を合して伏し拜んだ、商女不知亡國恨の感を催ふした。緬甸より印度に入り、佛蹟と云はる、佛蹟には大槓參つた、菩提樹は到る處に茂つて居る、釋迦は此樹の下に跏趺して正覺を成したと云ふ。然れば世界の佛教徒は佛陀伽耶に行き、釋迦の跏趺したるてふ金剛座を伏し拜み、座上の菩提樹を仰ぎ拜み、其の二三葉を拾ひ、珍重がりて歸國するのである。然し這般の葉を珍重がりて歸國するも、其の國々、否荷くも佛なるものを信仰する國々は、我が日本を除きては、悉く西洋人に亡ぼされたのであつたのである。

日本の佛教家は云ふ、彼等は小乗教を奉ずる、故に亡びた、吾々は大乘教を奉ずる、亡びざる所因である。予は大乘も小乗も知らぬ、然し何故に日本の亡びず、否益々發展する所因を聊か知つて居る、島國海國に在つて日本人は萬千年来魚介の肉を食ひ、其の含有する燐酸に依て「遺つける」と云ふ意氣を發揮し得ると、且つ西洋より科學を輸入したのが其の主因なりと信ずる、殺生戒だの精進だの御念佛だのに依るものに非ずと堅く信ずる、「遺つける」と云ふ意氣と科學を理解すると、是が西洋人の世界に雄張する所因で、又日本の發展する所因である。

然るに緬甸に來つて見よ、印度に來つて見よ。緬甸は世界稀有の米産國で、又椰子の産地である、然し殺生戒を是れ守るの餘、國人は稻に生ずる蝗を殺さぬ、ウソカの虫すら拂はぬ、又椰子に生ずる害虫を驅除せぬ、而して此國の米と椰子、即ち緬甸の生命は退化するのみである。緬甸にても印度にても南京虫を殺さぬ、殺さぬ様に着物をフワリと土に向つて拂ふのみである、かくて世界に隠れ無き這般地方の傳染病は南京虫より媒介せらるゝことが多い。婆羅門教徒と回教徒との合同に依る印度の獨立運動(英吉利より獨立せんとする運動)は中々盛んである。然るに予の巡遊中、回教徒は婆羅門教徒が豚肉……回教徒は豚を不淨視し、宗祖マホメット以來食用せぬ……を喰ふ間は、一致が出来ぬと云ひ、婆羅門教徒は回教徒が牛……婆羅門教徒は牛を神聖視し、其の尻を舐ぶる婆羅門を往々街上看かせる……を殺す間は連合す可らずと、相互に鎗を削つて争ひ、相互に其の主張を英文もて新聞紙上に寄書し、その英文の書き廻しは實に巧みなものである、然し如何に英文だけは巧みでも、憐れなる哉彼等の聰明は宗教の爲めに蔽はれて了つた。かくて緬甸に於ても、特に又印度に於ても、獨立運動は中々盛んではあるが、其の成功は未だくで、少くとも二代ぐらゐの後の事であると思ふ、其の宗教は緬甸人印度人をして意氣無からしめたのである。

善女善男成隊回。伽藍處處散花堆。五三六里中天路。象背春風賦夢來(天然途上)。
 是は天然の路上、象に騎リノソリノと五六哩も行く、折柄の春風、象の背に懸けたる鈴はチリンと鳴り、得も云はれぬ心地となりてウトウトと睡みたる際に得たる途中の實際實境である。

天姿麗乳憶難陀。清瘦手梅悉達多。三五由旬春水滑。隨潮盪槩下恒河(由旬。古天竺里法。見三子)。
 是は悉達多太子が苦行六年疲れ果てたる際、牧女難陀なる者乳糜を薦めた、美少年の太子、美少婦の牧女、「春水滑」とは際ドイことである。然し後四十九日太子は成佛して釋迦如來となり禁欲の人と成り濟されたるには、流石の牧女も失望したるならぬと、予も同情(?)の餘、其の故蹟を探りたる後二日、恒河を小舟にて下つた際に得たる惡詩である。

ガイマン

(否)、チャム、キマ(これは何程ですか)、シノ、ハザ(これは何ですか……此の一語さへ知つて居れば如何なる物でも同はれる故に言語不通の土地には必用缺く可らざる用語)の五語を僅かに習ひ得て茫々たる亞刺比亞を獨り旅するの
かと思ふと心細かつた。然し折角此處まで来ては中止す可らず、頼山陽が肥後の境上より入國至難の薩摩に前まんと
して關所の役人に「ワイドンが」と怒鳴つけられ、一時は南進を思ひ止らんとしたるが、眞惜にも詩を作つて前み入り
たる當年を想ひ起し、其中の四句を記憶のまゝ「學能可三中止」勢興騎虎均。踏難音已分。何爲自遠巡」と朗吟しつゝ
ガイマン國に入つたのが大正十三年二月二十八日午前である。

二月二十八日と云へば、予の青年時代を暮したる札幌邊にては未だ雪が街上に三尺も積つて居る。然し此處は「世
界第一の熱き處」と稱へられ、極暑は日中華氏一百八十九度、夜中一百七度上ることありと記録されて居る程あつ
て、今日も土地柄相當に熱いことは熱い。古來人跡の未だ多く及ばざる方面に初めて到りたる者は兎角に吹くもので
あるが、波斯の有名なる探検家アブデル・ラザクはマスカットに入り「熱い、人間の骨の中の髓までも焼け、鞘の内
の劍は鋒けて蠟の如く、短刀の柄を彩る寶玉は焦て石炭の如くなる、此處では狩獵は眞に容易である、平地には羚羊
が日に炙られて燻肉となり此處にも彼處にもコロコロと轉つて居る故である」と、吹くにも吹いて居る。然し話半分、
否此の記事の十分一としても暑氣は酷烈なるべしと想像した。米國のトーマス・フレンチ師は發憤して此地に布教せ
んと思ひ起ち、マスカットに来るや僅かに三個月五日間で死んだ、師は當時年輪六十六、予より四歳の上の老爺であつ
たから、肉神の耐へ得ずして未死の英魂を此の癘煙瘴霧の間に埋めたるも詮方なしとする。然し師に代りて來りたる
ジョージ・ストーン師は二十六歳の壯齡であつたが、一日外出して日射病に罹り、其日の午後には「ハヤ」とされて、是れ
亦た空しく英魂を此處に埋めた。然れば予も亞刺比亞旅行の第一日として當初は幾分の怖氣がさして居つた故に、甲
谷陀市にて懇く新調したる防暑服を着け、又同市にて購ひたる防暑帽に頭を圍め、優に天然ハイカラと爲り濟まして
マスカットの市街へと乗り込んだ。

二 國都マスカット。

マスカットの所在と云へば、何んと形容すれば可なるか、予の目撃したる世界各地に於て此に似寄つ

ガイマン

た處とは無い。鏡の面よりも平かなる深甚の海水より大巖石の絶壁は空を抉りて列び立ち、一草一樹
の之に生ずるもの無く、「奇警」など云ふ軟弱の描寫にては盡くせぬ、「峭拔」もダメ、「峻極」もダメ、「峻
嶒」でも及ばぬ、流石の自稱漢學者、第八流詩人も適切なる形容詞の無いのに窮した、九泉喚び起す吾が
和田垣博士の魂、君何んと一字で形容するかへと問へば、例の莞爾として「Forbidden カネと答へらるゝ
音容が髣髴する、如何にも人の入り來ることを遮り禁するが如き概である。此の人を遮り禁するが如き
大巖岩の絶壁の上には、堡壘と哨樓とが相連り、砲門は我を下瞰し……堡壘は四百年の星霜を経たる舊
々式のものではあるが……壁下の市街には、銃を肩にし銃丸をバンドに帯び、銀鞘弓形の短刀を佩ぎた
る人々が相踵いで跣足にて徘徊して居る。街衢は狭いと云つても狭く、王宮の前の大通とても幅八九尺
に過ぎぬ、最も狭いものは幅三尺にも満たぬ、此の最も狭い處で件の武装(?)せる而も「瘳猛」、「殺人
的」と各紀行書に記載せられたる人々と擦れ／＼となつて歩き行くと、初の程は好い心持はせなかつた。

マスカットはガイマン王國の首府で、固より亞刺比亞の市街である、然し住民の多數はバルチスタン人である。バ
ルチスタン人と云へば、予は生來見たことも無く、實は先日來同國の南海岸を經由して初めて接したのであるが、印
度人なごり骨格の良い者もあり、又存外に聰明なる點も認められる。現にガイマン國の首府に於ても富豪又商人は大抵
バルチスタン人である。日本人……此處は同じ亞細亞洲ではあるが、此處にては亞細亞の自稱盟主たる又一等國(?)
たる日本人様の御國なる「日本」其物を知つて居るものとしては極々少い……を初めて見たりとして、往來の人々は何れも
物珍らしげに此の志賀先生を打ち眺める。其内に十五六歳許りの少年、日本の中學校程度の英語を操る者が現はれ來
り、案内すべしと云ふ、美少年では無いが小可愛子で、矢張バルチスタン人である、年齢はと問ふと、知らぬと答ふ、

オーマン

利口な様でも土人は矢張土人である。鼓と大鼓とを打ち雑ぜたる音が聞ゆる、歌の聲が聞ゆる、何かと案内のバルチスタン少年に問ふと、婚禮の行列なりと答ふ。急いで追ひつくと、男女凡そ三十人、多くは女で、前列の二男子が鼓槌のもの、二男子が大鼓やうのものを敲き、次に一女子が香を焚き、次に一男三女子が各々頭上に大皿を戴き、これに次で女の群衆が調子を合はせ歌ひつゝ、城壁の外に向て練り行くのである。予が來ると、行列は一齊に予に向て眼を注いだ。予は左の方なる石の上に登つて『君が代』を歌つた。一同は聲を揚げて笑つた。然し婿サンも花嫁サンらしき人も見えぬ故に、バルチスタン少年に問ふと、行列中の一男三女の頭上に戴ける大皿には若干の菓子と一白ルビー(日本約七十圓)づゝの金子が盛つてあるので、合計四百ルビー、今から仲人の家に行つて之を花嫁の許へ持参せしむるので、婿サンや花嫁が未だ出る幕では無いのだと答へた。

三 オーマン王室。

亞刺比亞の列國を以て沙漠の處々に散在する出來星の如き國家なりと思ふは非である。オーマン王室の草創は百八十三年前で、マスカットに奠都してより殆ど百五十年、今より百年前には波斯灣の彼方及び灣内の諸島より、遠く東阿弗利加のザンジバルまでをも所領して居り、今日にてもバルチスタンのグワヅル港はオーマン國の所領である。今王セイード・チムル・ビン・ファイサル(ファイサルの子なる帖木兒君と云ふ義)、即ち先帝ファイサルの長子にして、大正二年十月五日即位、王室の收入約八十萬圓。

王宮は海岸の波うち際^ハに立てる三層樓である。宮門に行くと、衛兵は誰何した、予は日本語の名刺を出した、衛兵は携へて内に入つた。程も無く靴を穿てる人が出で來り、片言の英語にて來意を問ふた。此人はバルチスタン人で、マスカット市内有名富豪で、王宮の御出入商人であつた。予は萬里の日本より此のオーマン國に來り、折角國都にも來りたるが故に、一度國王殿下に拜謁し、オーマンと日本と親交せざる可らざることを言上し、且つ日本國民をして

オーマン

殿下の風采を想望せしめたとと思ふと答へた。二三分たつと、此人は再び來り、國王陛下に貴下(志賀)の意志を言上したるに、陛下には嘉納し給へりと傳へた。衛兵は三層樓に予を案内した。内を見ると、人々は皆跣足である、前のバルチスタン人の御出入商人も靴を脱ぎベツチャンコと膝を屈して床に座つて居る。元來亞刺比亞人の慣習として長者に接するに靴のまゝにてするは失禮となつて居る、依て予は靴の紐を解きかけた。すると例の御出入商人は急ぎ起ち來り、靴のまゝでも可なりと云つた、然し予は靴を脱いで内に入つた。

内に入ると、海を見下す露臺の此方、奥まつた處に、普通の亞刺比亞人よりは色の最と白く、鼻の下に揃へる鬚を蓄へ、晝に描ける諸葛孔明の如き年齢四十ばかりの好丈夫が頭の上より純白雪の如きカシツミル絹を被り、素足のまゝ悠然と西洋輸入のソファに腰かけて居る、低聲なる英語もて『ヒズ・マッシュ・スチー』即ち『陛下』なりと告ぐる者がある、實に好丈夫其人がオーマン國王であるを知つた。是より先予は英國政府がオーマン國王に對し對等國君主と同格に二十一發の禮砲を放つことを制定し、而も亦た『ヒズ・ハイネス』即ち『殿下』と尊稱することを制定したる事實を知り居たるを以て、殿下と呼ぶべきか陛下と呼ぶべきかと迷つて居つた、然し此際頓に悟る所があつた故に、『陛下』と呼ぶこととした。予は起立して敬禮すると、王には氣持好き微笑を面に湛へつゝ、手眞似してソファに座せよと云はる。予は座した。王曰く、能くも此處まで來て呉れられた、アラビスタン(亞刺比亞人の國)も日本と同じ亞細亞の内在るにあらずや、歐羅巴は歐羅巴人の爲す所に任ず、亞細亞は亞細亞に所在する御互が任ぜざる可らず、何故に日本人は疾くアラビスタンに來らざるや、アラビスタンに來りて商賣し、工業を興し、依て以て彼此の親交を圖り、依て以て我がアラビスタンを改善しアラビスタンを復興するを得ば、即ち御互に大を成す所以にあらずやと。予答へて曰く、陛下の言々正に是れ外臣が陛下及び陛下の人民に對して一日本人として請はんとする所のものである、御意の存する所、外臣詳かに之を我が國人に傳ふることに努むべしと。王曰く、足下若し此國に於て見聞する所を日本に於て發表することあれば、其の紀事を我に贈れ、又アラビスタンの歴史を著述する際あれば我に報ぜよ、寫眞圖畫の類を足下に送るべしと。予曰く、外臣突如と陛下の國に來り、親しく謁を賜ひたる一事すら實に望外の賜である、況んや優渥の御

オーマン

語を賜はる、感激何ぞ堪へん、而も行旅の間、何等本邦の土宜を携へぬ、唯一つ扇子あるのみである、敢て之を陛下に獻せんとす、陛下幸に嘉納せられ給ふべきかと。王曰く、我が領土は熱し、扇は涼を納るゝの具、我レ喜んで足下の贈を受けんと、依て予は甲谷陀行の際、我が日本郵船會社阿波丸船長より贈られたる日本製の絹扇一個を王に轉贈した。かくて予は王に請ふに、記念の爲めに親署を賜はらんことを以てした。すると王には好しと自から起ち親署を金にて擦したる最も厚き白紙を取りて奥殿に入り、やがて携へ來られ、文中に足下の姓をも書き入れたり、最後にあるは我名チムルなりと親しく指もて示教せられた。

此書の所有者ヤパン(日本)人シヤガ(志賀)は洋曆一千九百二十四年二月二十八日此處を訪問せり。(親署の直譯)
一千三百四十二年(回教紀元)ラジャグ月(七月) マスカット チムル(帖木兒)

予は王に別を告げた。王曰く、何處なりとも見物したき處あれば行かれよ、案内者を附すべしと。予曰く、重々優渥の御語を賜はり益々感激に堪へぬ、此の上は唯だ御苑を拜觀するを得ば幸甚なりと。王曰く、我が庭園とな、こは先考王の遺愛のものである、我が代となつては然までに手入もせず、人に示す程のものでも無いが、足下にして宜しければ何時にても行き觀られよとて、二人の衛兵に案内を命ぜられた。御苑は極めて小さいものではあるが、四面の大巖岩と沙漠との間に此處のみには綠樹茂り噴水も四進せることとて、予は頓に爽快を覺えたれば、大漠を眺めつ

渡レ恒超石又過康。行脚去來天一方。抵掌平生長廣舌。偏揮大漠十番長(唐書恒河(Ganges)石國(Jashkent))
オーマンは世界第一の極熱地と稱ふ、而も思ひきや予の如き北海道の寒地に青年時代を暮せし者とても然まで感ぜざるのみか、汗は其儘に蒸發し去るを以て下着はメタつかず、頭の髪はサラ／＼として却て日本の夏よりも爽かに感じた……二月三月の交に旅行したる故もあらんが……西洋人の此の方面を旅行せし記事又は著書に據れば *glare, glare, glare* (閃光とか炫光とか譯すべきか、ピカ／＼と眼を射る光線)の語を屢ば用ひ、予の如き老人がウカ／＼と外出すれば、日光に射られて眼でも潰れるかと思はしむる底の形容である。然れば印度にて防光用の色眼鏡を購ひ之を携帯したるが、さて六十餘年來未だ曾て眼鏡なるものを用ひたること無き予が、如何に防光用とは云へ、いよ／＼之を己が雙眼の上に懸けざる可らざるかと思へば、それこそ正直正銘の老人組に編入さるべき關門かなと、此の關門文ケは容

易に入る可らずと一日一日と懸けずに經過し、遂に亞刺比亞の旅行中一回だにも用ひなかつた、さりとて眼も潰れず黄縁を分明し得たことは左の惡詩にても判る。

大宛天馬拂鞭來。綠眼胡姬笑倩杯。生怕鬱金香一炷。誰知酪乳撥新酪(唐書大宛。今之中央亞細亞)。

四 亞刺比亞人の性質。

亞刺比亞人の性質は『獐猛』で『殺人的』(Murderous)であると各紀行書に記載せられて居る、然れば予は當初は此の如きものであると思ひ込んで居つた。然し氣候の然までに炎熱ならざることを先づ知り、次で初めて謁見したる君王の殊に都雅なるを知り、次で何處に到るとても一人の英語を解する者ありて、先に南米のパラグアイ國に行きたる際よりも氣樂なることを知りたる予には、亞刺比亞人なる者は果して然までに『獐猛』、『殺人的』なりやと心に浮び始めた。

旅行者が見知らぬ國に入りたる際は、神經は過敏ならざるを得ぬ、隨て微なる點にも氣が着く、『殺人的々々々』と記載せられたる書類を読み慣れ居たる予にして、若しも亞刺比亞人が此の如き行動に出でんとすれば、直ちに神經に感すべき筈である。然るを何等の感なかりしのみか、予が是等の文章は惡拙ではあるが亞刺比亞で綴つたもので、『己を殺すか知らん』とのみ思ひ居つては、如何な大膽なる人にても克く書けるものではない、況んや膽、豆よりも小なる予に於てをや。然れば亞刺比亞人が『獐猛』で『殺人的』ならざることは予が是等の文章を書き綴りたることを以ても反證すべきである。總じて旅行者の記事に對しては二三割方は割引せらるべし……さうかと申して予の是等の記事に對し三割も引かれては抗議を提出せざるを得ないが……。

亞刺比亞

亞刺比亞

五 亞刺比亞の宗教。

亞刺比亞は回教々祖マホメットの發祥地で、其の住民と云ふ住民はゴリ／＼の回教徒である。さて回教も他の宗教の如く幾派にも別れて居るが、大別してスンニ(土耳其を盟主と仰ぐ)、シア(波斯を盟主と仰ぐ)の兩派とする。兩派互に相排擠し、隨て自己の派に入る者を最も喜ぶ風がある。

五人一行の亞刺比亞人と波斯灣を數日間同航した、何れもスンニ派の人々である、毎日日出前に一回、午後二回、日没の際に一回、夜一回と都合五回カーバ(メッカに於ける宗廟)に向ひて祈禱するを例とした。予は一同の祈禱するをボカンとして見て居るのも聊か禮を缺くと思ひ、日没の際丈ケは仲間入りし、スンニ派の式に倣ひ、胸の下に左手を横へ其上に右手を重ねてカーバに向ひ禮拜するを例とした。一同は最も喜んだ。四日目である、一人が云ふには、吾々亞刺比亞人の慣例としてはカフネーヤとて布もて始終頭に纏ふことを例とする、君(志賀)にも祈禱の際丈ケは何卒布もて頭を纏つて呉れられたしと云つた。依て予は革囊より日本の手拭を取り出し、松竹梅の模様のついたのを其まゝ頼被りし、少し滑稽には感じたが、眞面目な顔で五日目の夕の祈禱會に現はれると、彼等は大に喜んだ。其の次に喜んだことは下の事實で判る。此の夕の祈禱會が終ると、彼等中の長老が棗椰子ノ實七個を予に呉れた、棗椰子ノ實は世界に於ける凡百の果物中最も甘く最も天然糖に富んで居るものである、然れば歐米人殊に米國にては婦人子供が最も嗜むのである。予は數年間の糖尿病が漸く癒えんとする折柄、最近五年間絶對的に砂糖のものを攝らず、然し此際なればとて一個を喰べると、長老は喜んで一同と會食せよと云ふ、大皿に雜穀の蒸したるを盛り、鶏肉、魚肉、野菜くさ／＼の物を一齊に件の大皿に投じ、穀物に掻き雜ぜ、一同右の手の指に撮みて喰べるのである、これには如何なる予も洒落どころか眞に閉口した、然し奮發して二指三指……二箸三箸にあらす……口に入れると、一同は新にサザク(友人)を得たりと喜んだ。想へば想ふほど亞刺比亞人は『殺人的』どころか、小兒の如くに可愛ものである。亞刺比亞に於ける最も未開の人種たるマデッインは、外國人に對し最も敵愾心を抱き居るものであることは、物の書に記載せられて居る。然し苟も一たび彼等の軒の下に來りたる者に對しては、如何なる仇敵と雖も殺さず、食を與

オーストリア

へ待遇を盡くして返へすことを以て、彼等の道德とすると云ふことも物の書に記載せられて居る。是はチカリスの河口近くまで同行せし亞刺比亞人ヤチーン氏(地中海岸ペイルトの米人建立の専門學校出身、英、佛、土耳其等六國語に通ず)の夜話であるが、同氏の知人に故あつて一マデッインの子を殺したものがあつた、殺された子の父は仇の誰なるを探つて居つた。素と游牧の人種としてマデッインは數ば遷徒する。仇なる其人は一タマデッインの天幕に入り宿泊を乞ふた、天幕の主人は其乞を容れた、宿泊中の物語にて主人には當夜の客其人こそ我子の仇なることを悟つた。さて翌朝に至り、客の謝し去らんとするや、主人には一頭の駿馬を客に饒し、且つ曰く友よ否我子の仇よ、疾く此馬に騎りて去れ、汝は一たび我が天幕の内に入りたる者である、故に汝を殺さぬ、然し再び來りたる節は幕内に入れず外に在りて汝を打ち殺し、我が子の仇を報すべしと。かくて客は饒せられたる駒に一鞭して去り、今に生存せりと云ふ。亞刺比亞人は世界の游侠子である、彼等と交はるべき呼吸さへ會得すれば、世界に於て此くらゐ痛快なる人民とては無いのである。正に是れ日本人と意氣相投合せる底のものである、日本の青年壯年は續々と此の方面に行かん哉。

(前略)バルチスタン、波斯、亞刺比亞に獨り旅しつゝあるなご申せば老生がシ、ホ／＼と成り果て氣の毒千萬なることならんと御同情下さるやも知れず候へ共、ドーして／＼ソナ不景氣なる次第には無之、頼山陽先生は西游の節九州の酒が甜たるくて飲めぬとて途中偶々伊丹(攝州)の酒を獲られたる時は鬼の首でも取つた様に喜ばれたる事は其詩作中に往々相見え候へ共、老生は如何に亞刺比亞三界に漂泊せりとて日本の灘の生一本は未だ六瓶丈ケ残りなを蔵し居り、右の内二瓶はエウフラト河を溯りメヒロン城の故墟に上りたる際、二瓶は來る三月十九日即ち陰曆十五夜の明月をチカリス河畔に賞づる際、二瓶は沙漠を横斷して地中海に出得たる刹那心私に自祝自慶せんとする際に酌まんとする豫定にて、當年の山陽先生の境涯よりは一入痛快なりと自惚れ居り候(下略)。(途中の書信)。

日本大正十二年。正當釋尊滅後二千四百載。過去未來再所無。千載一遇兼一倍。東海法孫志重昂。渴仰此時到西方。萬里尋覓菩提樹。樹下跏趺座三金剛。難奈煩騰百八至。未成正覺悟無常。昂也從是遠巡錫。行脚將入大食國(Mesopotamia)。誓願經三佛德無邊。九譯庶幾究西域。仰望靈鷲最高峰。廓然光明長百尺(天竺行脚行)。

世界的川中島。世界的關ヶ原。

世界的川中島。 世界的關ヶ原。

【日本に最も知られざる方面、而も日本人の最も知らざる可らざる處】。

世界に於ける日本人六十餘萬而も印度の西境より土耳其の君府に到る直線二千五百哩の間には一人も見ず、而して此處に『世界的川中島』がある、『世界的關ヶ原』がある、コハ又歐羅巴に在らずして亞細亞に在る。凡そ此の世界に於て日本人として最も知らざる可らざる方面なるに拘らず、是は日本人の最も知らざる方面とは無い、ア、。



一 歴史の痛快なる否皮肉なる繰返シ。

『歴史は繰返すものなり』と、然り繰返すことも多けれども、亦た繰返へさぬことも多い。然しながら『歴史は繰返すものなり』との事實を示すべしとあれば、予が最も近き過去に於て經過し、現在に於て滞在し、又最も近き將來に於て觀察すべき方面ほど、人類六千年の歴史に於て『繰返シ』の最も痛快、否寧ろ皮肉なる處とては他にあるまじと思ふ。想へ耶蘇基督の四十二代の遠祖アブラハム其人の故郷なりと聖典に見ゆる處こそは、最近五個月前より東洋(殊に印度)より西洋(殊に英佛兩國)に行くべき最短最捷なる旅程の衝路となり、現に是が爲めに去る十一日夜(大正十三年三月)、折柄の明月を此處に賞で、携へ來りたる櫻正宗を満酌し、大呼『亞父』一偲三杯、前六千年無此酒と放吟するや、會々居合はしたる二英人(一ウエールス人航空中尉、一愛蘭人航空大尉)、一羅馬人、一シリア人には、未だ日本酒なるものを味ひたること無しと云ひたるにぞ、之を侷めたるに、四人曰く、杯を擧げて日本皇帝陛下の萬歳を唱へんと、即ち愛蘭人の發聲にて五人(予を合して)和唱し、『世界最古の國カルデアの故趾に於て日本酒の杯を擧げ、三國陛下の萬歳を唱へたり云々』と各々姓名及び生國を自著し、これを日本灘なる櫻正宗醸造元山邑太左衛門氏(予は未知の人)に宛送附したのである。苟んぞ知らんや、此の方面はカルデア亡び、バビロニア亡び、爾來殆ど二千五百年、最近數年前までは『瘴猛』、『殺人的』なるベドイーン亞比刺亞人の劫掠する儘に任じてあつたが、今や東洋西洋交通の衝路となり、容易に日本酒を携へ來り、東西兩洋の人々と杯を交はして歡笑すべき行樂地……世界に於ける最新の……となつたことを。

世界的川中島。世界的關ヶ原(此一篇はパダグード滞在中に起草、日本に送りたるもの)

世界的川中島、世界的關ヶ原、此一篇はバグダード滞在中に起草、日本に送りたるもの。

カルデアの故址に興りたるは前バビロニア帝國(約二千二百年前亡ぶ)、後バビロニア帝國(同二千五百年前亡ぶ)であるが、其の滅亡の後約二千五百年、バビロニア帝國の君王の活寫……伯林倫敦の博物館に陳列せるバビロニア古錢に鑄つけたる肖像に據り……とも云ふべきファイサル其人が、最近二年半の前英人の擁立に依てバビロニアの故土に君臨し來り、これをイラク王國と稱へ、而もファイサルは是より先佛國がシリアの王位より放逐したる其人なるを以て、歐洲大戦役中には漆膠も管ならざりし英佛兩國の膠は見る／＼溶けて漆も日々に剝げ、愈々正體を露はして希土戰役に佛國は土耳其を内援し、越に希臘軍の全敗となり、土耳其の復興となり、英國ロイド・ジョージ内閣の顛覆となり、餘勢滔々、佛軍のルーリ谿谷進撃となつたのである。ア、見よや／＼二千五百年前に亡び二千五百年後に復興し、夫の『亞刺比亞一千一夜話』の故都バグダードに在つて、煙の如き棗椰子の緑の蔭に夢の如く君臨するファイサル其人の朝廷こそ、正に是れ最近の歐洲外交、即ち最近の世界外交の一大伏魔殿となり居ることを。

三千二百年前、前バビロニア帝國を亡ぼしたるはアッシリアである。當時のアッシリア帝國の國都は吾に聞くニネヴェであるが、此のニネヴェ所在こそ、實に最近代期の帝國主義、即ち歐米列強の石油々田争奪の大戦場で、誰人も知れる如く英、佛、米、土耳其の四國が死物狂となつて競争し居れるモスル油田は此處に在るのである。其西に接壤する地方、即ち夫のモーセスが上帝より十戒を授けられたるてふ處、夫の耶蘇基督が初めて洗禮を受けたるこふ處は、世界大戦役の後、英佛兩國が虚々實々の間に相争奪せんとする處で、其の第二の巴爾幹たるは知る人ぞ知る。想へかし／＼カルデア、バビロニア、アッシリ

アは、世界人類の搖籃であるが、今や之に止らず、實に世界人類の次期時代に於ける最重最大の問題をば解すべき一大孵化場であることを、世界の歴史に於て抑も此の如き『繰返』の痛快否皮肉なるものありや。此の世界人類の次期時代に於ける最重最大の孵化場は、東に在るはイラク國、西に在るはケラク國、及び其の接壤の方面である。曰くイラク國、曰くケラク國、同じく吾人と共に亞細亞の内に在るのであるが、敢て問ふ日本の中に其の國情を知る者幾人ありや、否其の名稱すら知らざる者或は多かるべしと思ふ。それも其咎である、日本人にして克くイラク國に入りたる者は予の寡聞にして誤なしとすれば未だ十指を屈する程だにも無い、即ち職務柄疾く來らざる可らざる底の陸軍より參謀本部の一將校だに來りたりや否や之を知らず、外務省よりは波斯に派遣せられたる官吏一行六人が三個月前に此國を通過したると、三井物産會社孟買支店は、世界大戦役中に擴張し得たる日本朝日ビールの販路を維持將た擴張の爲め一個年餘前に一店員をバグダード市まで派出したると……それかあらぬかイラクにては日本國なるものを知るよりもアシャイ・ビール(朝日ビール)の事をアサヒと呼ぶ者殆ど一人も無く、アシャイ／＼と云ふ)を知つて居る……、其他或は一人か三人に過ぎずして、而も東西兩洋間の最短最捷なる此の衝路を取つたる日本人としては未だ曾て一人も無く、又ケラク國に入りたる日本人とても未だ無いのである。予が獨り笑ガリするは謹慎すべきことであるが、憚らずに云へば、既に一個月前よりナイルン護衛附自動車會社に沙漠横斷の事を申込み、其の承諾を得たるを以て、未來の事を云へば鬼が笑ふかは知らぬが、前陳の衝路を通過すべき最初の日本人將た又ケラク國都に入るべき最初の日本人は或は予なるべき

世界的川中島。世界的關ヶ原(此一篇はバグダード滞在中に起草、日本に送りたるもの)

世界的川中島。世界的關ヶ原(此一篇はバダグード滞在中に起草、日本に送りたるもの)

かとも思ふ。事情此の如くなるが故にイラク國の事情もケラク國の事情も日本に傳はざるは亦た已むことを得ざるとするも、而も自稱にもせよ亞細亞の盟主を以て任ずる日本に於て、同じく亞細亞の内に在りて將來の世界外交上の最重最大の關係あるべき方面の名稱すら知る者少しとあつては座ろに心細サの至極である、況んや人類の次期時代を裁決すべき關ヶ原、即ち西、白人間に反抗せんとする東、回教列國との衝突、即ち東西兩大人類の運命を裁決すべき最大運動は、此の方面を中心とすべきことを悟れば、此の方面に關する知識は一日だに之を忽せにす可らずと思ふ。是れ予が今回此の方面に遊びたる所因にして、又自から力を量らず僭越ながらも見聞する所を有りの儘に發表し、聊か以て故國諸君子が御參考の萬一に供せんとする所因である、呉れくも獨り笑ガリする者にあらざることには御慰察を願ふ。

二 世界的川中島。

大正十一年十一月三十日、南米のアンデス山を越ゆるや、谿間々々の積める雪を掻き拂つて土を掘くり、マツチを擦り新聞紙の反古に火を點けて掘りたる土の上に燃しに燃し、やがて附近より水らしきものを小瓶に入れて行く者をば幾人とも無く見た、何かと問ふと、石油を搜索するのであると答へた。海抜一萬餘尺、雪のアンデスの谿間々々に石油を搜索せんとするとは、西洋人の努力も然ることながら、此の世界は全く石油是れ力たるの時代となつたことを明かに訓へたのである。要するに將來の世界は一言にて盡くる、曰く油の多き國家は光り榮へ、油の無き國家は自から消滅すと、宣べなり西洋人がヒステリーの發作したるが如くアンデス山一萬餘尺の高度までに石油を搜索せんとすることを、是を實際に

目撃したる利那こそ、予が今回のメソポタミア行を感起したるものである。

アンデス山を下り、智利よりの歸船中、閑に任せて新聞雜誌を閲讀し、土耳其の復興、回教徒の矜恃心の高潮を知り、米國に立寄るや、ローザンヌ國際會議がモスル油田(メソポタミア)の爭奪に就き紛糾を極むべきことを聞き、一日も速かにメソポタミア其他亞刺比亞系各國に遊び、實際を目撃して力及ばずながらも日本の社會に左の重大なる二事を普く知告すべきかと感起したのである、即ち

(一)世界的關ヶ原の日に近づきたる事。

(二)『鋼鐵は黄金なり』、『鋼鐵王』など云ふ時代は昔々大昔の一夢と化し、『石油は黄金なり』てふ時代は來り、否如何に黄金を費すとも、日本は宜しく石油政策を確立すべき事。

メソポタミア(Mesopotamia)は即ちイラク王國所在地で、希臘語 Mesos は『中』、Potamos は『河』、はは洲、即ち『川中島』で、古來名高きチギリス、エウフラト双兒河の中に在るを以て此く稱へられたのである。太古のカルデア、前バビロニア、アッシリア、後バビロニアの四帝國が此處に興廢したり杯てふ陳々腐々の事は予は最早之を説くを欲せぬ、最近世となつては、所謂バダグード鐵道の敷地として英獨兩國の角逐場となり(即ち最近の世界大戦役の「源因」、夫のみすゞ刈るてふ信濃の厚筑摩双兒河の中なる川中島に信玄謙信二雄が角逐したると比べ、規模の壯大なる抑も幾百千倍ぞや、況んや最々近世となつては英、佛、米、土耳其四雄國の石油角逐場となるに至ては、甲越二軍が猫額大の四郡にちくり合ひたる杯と比べんとするも及ぶべきにあらず、知れや歐米四雄國の石油々田爭奪の川中島を。

世界的川中島。世界的關ヶ原(此一篇はバダグード滞在中に起草、日本に送りたるもの)

世界的川中島。世界的關ヶ原(此一篇はバダグード滞在中に起草、日本に送りたるもの)

メソポタミアは古來石油の産地で、窪地に石油の溜つて居り、住民の汲んで炊事に供して居るものもあり、又年中瓦斯の噴出して消えない處もあり、夫の拜火教の起原も之に由來すと傳へらる、又太古のバビロン城の煉瓦製造のセメントに用ひたるチャンもエウフラト河沿岸に産するものを以てしたのである。かくて全體に涉り石油々田は廣大なるべきであるが、然し將來の世界を撼動するが如き大油田は寧ろメソポタミアより東南の地帯に蓄藏せられ、即ちメソポタミアの東境より南の方波斯灣のバンデル・アッバス及び灣内のカシム島に到る大範圍で、若しも這般地方の油田にして十二分の開發を遂げたりとすれば、世界第一の石油國たる米國に拮抗し得らるべしとは専門家の所説である、而して此の方面の内なる波斯にては、多年間の苦々敷經驗に懲り果て、英露兩國に讓與し又は英國の資本を以て開發することを欲せず、是れ米國シンクレヤヤ會社が最々近に漁夫の利を獲たる所因である。

予はバンデル・アッバスに行き、カシム島を過ぎり、アバダンに英國波斯石油會社の製油工場を觀た、アバダンはシャトル・エル・アラブ河の口より上ること約三十哩にある。チグリス河(犀川)とエウフラト河(筑摩川)と合流してシャトル・エル・アラブ即ち『亞刺比亞河』(信濃川)となり波斯灣(日本海)に注ぐのであるが、別にカルン河は南流し來りてシャトル・エル・アラブに注ぐ、カルン河上流の高地にマイダン・イ・ナフテン即ち『石油ノ廣場』と云ふがある、面積僅かに五方里の間より目下石油一個年約三百五十萬噸(二千四百萬石。北樺太の石油蓄藏總額の約半分、即ち北樺太蓄油總額は此處産額の二個年分!)を産出し、一百五十哩の鐵管にてアバダンまで流送し來り、製油するのである。アバダンは直ちに亞刺比亞河

に沿ひ、蒸溜釜一百六十八、使用人約一萬、一日の能力約五千噸、而も尙ほ且つ原油一日産額の半分しか製造する能はざるを以て、英國油槽會社(英國波斯石油會社の一分身)の汽船は原油(及び製品)を英國に輸送し、本國にて製造するのである、而も吃水三十五呎までの汽船は工場の側に着き得るを以て、油槽船は高く汽笛を空に嘯きつゝ相踵いで河水を往來する處頗る雄觀である。更に亞刺比亞河を上ること十二哩、カルン河の合流點に到れば英波石油會社事業本部がある、此處はモハメラと呼び、モハメラは半獨立國で、英國政府は國主には禮砲七砲を放つことを制定して居る、隨て予が乗り居れる汽船が國主の宮殿の前を過ぐる利那に禮砲一發を放つと、陸よりも一發を答禮した。モハメラ國主は大富豪にして、宮殿の外に新に麗はしき後宮を建て、一百人の麗はしき少女を内に蓄へ、朝より色に漁るを以て、英國より侍醫を招聘し、此の侍醫は高額なる俸給の外に邸宅、賄費を支給せられて居るが、人口二萬しか無き小々國の君主にして克く此の如くなるは、英波石油會社に負ふ所少からざることを聞き、ア、何處に行くも油臭い哉、最近代の世界は『銅臭』など云ふお安いものにあらず、『油臭』となつたのである。

三 世界的關ヶ原。

メソポタミアは文字の通り『川中島』で、其の所在に於ける歐米四雄國の石油々田競争の劇烈なるは、正しく川中島の戰である。然し劇烈は劇烈であるが、要するに局部戰で、大局より世界の運命を裁決すべき關ヶ原ではない、敢て問ふ、世界的關ヶ原とは何ぞ、曰く東西の衝突である、西即ち白人國と東即ち所謂有色人種との興廢である。

世界的川中島。世界的關ヶ原(此一篇はバダグード滞在中に起草、日本に送りたるもの)

世界的川中島。世界的關ヶ原(此一篇はバグダード滞在中に起草、日本に送りたるもの)

波斯灣内のパルレーン島より亞刺比亞河口近くまで同行したる一亞刺比亞人がある(其人の商業上の關係より姓名を秘す)、地中海々岸ペイルトなる米國宣教師建立の専門學校を卒業し、自國語の外に英、佛、土耳其、波斯、ヒンドスタンの五個國語を操り、英語は英人よりも流暢に操る、年齢二十八、基督教宣教師の學校出身にして基督教に歸依せず、常に國風の服装を着け、回教の珠數を捻じ、一見志士の風格がある、世界大戦役中には英國の探偵なりと誣ひられて土耳其軍に捕はれ、一旦死刑に宣告せられ、後無辜を以て釋され、又土耳其官憲より放逐せられ、經歷より云へば土耳其に對して怨ある人である。予が一日此人に對し貴君の英語は、聖板に水を流すが如し」と云ふや、氏には其意を解せざるより、日本の諺の意味を説明すると、氏は笑つて了解せりと答へつゝ、然らば君(志賀)には「人が希望が無くなる」と舌まで長くなりて猫が獅子に噛みつく様になる」と云ふ我が亞刺比亞の諺を解するかと問ふた。予は日本にて舌の長いとは君だの僕だの如き長舌と申す人を指して云ふのであると答ふると、氏にはソハ全くの意味違ひなり、人が手も足も出ぬまでの窮境に陥れば、モ一死物狂となり、舌までも長くなり、猫でさへ獅子を噛む様になると云ふ意味である、土耳其を見給へ、國都は取られる、歐羅巴の領土は取られる、スミルナは希臘に取られる、シリアは佛蘭西に取られる、パレスティン及びメソポタミアは英吉利に取られる、全く手も足も出ぬまでの窮境に陥つた絶望の極、獅子に噛みつく勢も突進し奮迅し、遂に復興した、而して一たび復興するや、百般の奮弊を一齊に掃蕩し、其の意氣は眞に起敬すべきものがある云々と、漸く志士の面目を露はし來つた。予には好い糸口を得たと思つた故に、東方諸國一帯に横溢せる氣運に就て氏に問ふた。すると氏には、極西なる大西洋岸のモロッコにては、數次奮起して西班牙軍を破り、トリポリにても時々伊太利人に對して兵を起し、埃及は既に英國より離れて獨立し、シリア人は如何にしても佛國より獨立せんとし、其の氣勢は遂に抑ふべからず、土耳其は雄々しくも復興し、イラクにては其の國王フアイサルの後影には英人ありとて「英人に依ての王」を逐ひ、亞刺比亞人の共和國を建立せんと熱望し居り、波斯は最近に英國の將校を一切解雇し、又英人編成の施條銃隊を解除した、又印度に於けるカンナー氏の「非協同運動」(英國との)が日々氣勢を揚げつゝあるは、流石の英國も今や始末におへぬ、若し夫れ阿富汗の覺醒に至ては、世界の驚異として誰人も知る所なれば之を贅せぬ、東方の氣運の横溢すること正に此の如くであるが、茲に至て改めて日本

世界的川中島。世界的關ヶ原(此一篇はバグダード滞在中に起草、日本に送りたるもの)

人たる貴君(志賀)に問はんとする一事がある、ソハ歐羅巴人にして今日の如き我儘勝手の振舞を以て吾人を待たば、吾人は到底これに堪へ得ぬ、滿腔の不平不満は早晩勃發すべきである、是に於てか所謂東西の衝突なるものとなる、此秋に際して日本の去就抑も如何、東に在るの故を以て吾々東方に興すべきか、將た又何からの故を以て西を援くべきか、要は東するか西するか、敢て貴意を問ふと。

此の質問の利那予は正しく感起した、是は予が眼前に在る某氏一人の予に對する質問にあらずして、實に歐羅巴人以外なる各人種が日本に對する彼等の懷疑で、又日本に對する彼等の聽かんとする大質問であることを。然れば眇たる予一個人ではあるが、氏の此種の質問には容易には回答すべからずと、徐ろに云つて曰く、然ればなり、東西の衝突の來るべきは予も亦た聊か之を感知して居る、然し是は予が生前には來るまじと信ず、何となれば予が生命の前程は幾何も無い故である、然し予が死後には必らず來るべきものである、此時に當り日本にして東に興みせんとするか、正しく日本國家の存在を賭せざる可らず、然ればとて西を援けんか、日本は所謂有色人種全體、即ち世界の住民の三分の二(十億)の同情を失はん、東すべきか西すべきか、一念茲に到ると予は時に深夜睡られぬことがある、否睡られぬ夜が多いのである、君よ請ふ予の爲めに復た此の問題に觸るゝこと勿れ、君も亦た日本人に爲つたと思つて予の爲めに此の問題を解釋せられよと。

翌朝某氏には予を見て曰く、昨日君(志賀)には日本人に爲つたと思つて余(氏)に解釋して呉れよと云はれた、依て寢に就くや、考へに考へた、成程一念茲に到ると睡られぬ時があると云はれたるは尤も千萬である、余も睡られなかつた、是は必らずしも日本の爲めのみを思つた故では無い、吾人所謂東方を思つた故である、然し余は遂に日本人たる君に云ふべきもの丈々は決定した、敢て云ふ、日本は東に興する勿れ、東には事を成すべき軍器無きを如何、軍器を獲ることありとするも財力無きを如何、財力を獲ることありとするも理學無きを如何、吾人が軍器、財力、理學の三つのものを獲るまでは、日本は東に興する勿れと涙ぐんで云つた。予は是に於てか氏が眞面目の士たることを愈々悟り、氏に向つて云つた、日本にても三百餘年前に關ヶ原の戦と云ふがあつて、日本國中の各諸侯は東か西か何れにか興せざる可らざる利那來り、中には父と弟は西に興し、兄は東に行つた者もある(眞田幸昌、信之、幸村の故事)、當時

世界的川中島。世界的關ヶ原(此一篇はバダグード滞在中に起草、日本に送りたるもの)

の苦衷慘澹は今となりて自己に比べつゝ察して居る、次期時代には日本其物が必らず此の如き破目に陥るべしと思ふ、然れば日本にて遠慮ある者は續々と印度、パルチスタン、阿富汗、波斯、メソポタミア、亞刺比亞、シリア、パレスタイン、北阿弗利加の方面に來り、平生より貴君の如き人々と接觸し居り、スハ關ヶ原と聞いて周章狼狽せざらんことを希望すると云つた。尙ほ予には今の秋我が日本の外交は西に與みせず東の同情を失はず、唯だ是れ正義を守るにあるのみ、予は道學先生となつて之を云ふにあらざるが、支那の古聖の訓へたる通り仁者無敵、是れ日本の外交方針とせざる可らずと云ふと、氏には全然同意なりと喝破した。輕んずる勿れ、亞刺比亞人なごがと、流石にマホメットの如き大聖を出したる人種である、眞の教育を受けたる者に至ては、某氏の如く能く大局に通曉する人士も存するのである。然は云へ、白人閣即ち白人の跋扈に對する所謂有色人種の反抗的氣運は潜轉默移しつゝある、今の如き白人の我儘勝手にして向後も尙ほ持續すべきものとすれば、次代か又は次々代には所謂有色人種の不平不満は必らず勃發すべく、其の大意は最近の露國大革命よりも更に一倍の劇烈なるものあらん、而して其の舞臺は印度以西に在るべきを以て、日本に在る志ある士は一日も速かに此の方面に來り遊び、世界的關ヶ原の日までに十二分の豫備知識を蓄へ置かれんことを是れ祈る。若し夫れ日本に於ける所謂支那浪人と稱ふる一流者の如き動もすれば輒ちオチョウカイの事を爲し敢て以て得々意とする、此の如きは全く大局を誤るの徒である、印度以西の事、復たオチョウカイを要せず、誠に是れ熟慮斷行を要する底のもの、某氏との會談後、深く悟る所あつた故に、バダグードの客舎、チグリス河の水聲を聽きつゝ此の一篇を起して故國に送ることとした、大正十三年三月十八日夜十二時、シリア沙漠横斷發程の兩日前。

試脱日東曠鼻輝。擬究二天井一覽三河源。閑人千載誰如我。大漢夜深逢二女番。(擬究二天井一覽三河源者。張塞之事。在三于一千七百載之前。吾老矣。豈覺何哉。)硬語盤空欲飽情。著論堪吐氣縱橫。文章放膽書生事。大漠風雲載筆行。

四 日本貿易の新なる販路として。

予が今日まで通過せし方面、即ち南バルチスタン、オーマン國、南波斯、コウエート國、モハマラ國より此のイラク國に到るまで、在來日本と商業上、直接の取引無かつた處である、然れば其道の人士にして精細に調査せられなば、意外の販路を發見せらるゝやも知れず。歐洲とか米國とか云ふは世界の大通である、東京なり大阪なりの大通は既に多年間の御得意が定つて居るが故に、努力に努力したりとて容易には新なる御得意を見出され得ぬ、然るに郊外の新開地例へば予の居住する代々木方面などは御得意が定まつて居らぬ故に、市内に在る機敏なる店は主力を此種の方面に傾注し、却て意外なる獲物を見出しつゝあるのである。予は商賣上に就ては何等の知識を有たぬ、然れば生なかの事を發表して人を誤らす様の事あつては相濟まずと考ふるより、復た何等の事を云はずと雖も、前陳の理由に依り日本の實業家は一人も多く此の方面に來視せられんことを望む。殊に此の方面は最近五個月以來(大正十二年十月以降)、東洋方面特に印度より英佛兩國に行くべき最短最捷なる旅程の衝路となりたるに於てをや。

三月一日(大正十三年)予は南波斯のパンデル・アッバスを歩いて居つた……學者振る様であるが、此處は夫のマルコ・ポーロの歸途の上陸點で、約三百年前までは當面の Hornus 島と地續キであつたことを此處の人が指點して教へて呉れた故、然らば宋書元書の忽魯謨斯又は忽里摸子に相違あるまじと思つたが、旅中にて參考書が無ければ、此處より京都帝國大學の小川理學博士に書送して教を乞ふた……一封の書を手にせる人が予を見て英語にて云つた、これは去る一月四日附日本大阪輸出商團體より當地の商業會議所宛の書面であるが、當地には未だ商業會議所の設ケ無く、封筒には受信人無き節は大阪市公會堂宛返送を乞ふとタイプしてあるが、余(其人)の店主が商業組合長である故、郵便

日本貿易の新なる販路として(此一篇はバダグード滞在中に起草、日本に送りたるもの)

日本の脂肪工業は將來如何すべきや(此一篇はバグダード滞在中に起草、日本に送りたるもの)

局長の許可を得て只今開封した、大阪商人よりの註文の問合であつた、然し日本人たる君に申し上げ置くが、日本が在來の如き粗製濫造品を送附しては、來月より獨逸人はハンブルヒより直接の汽船航路を開通する筈なれば、日本商人が如何に當地方に販路を擴めんと焦慮とても獨逸品に壓倒せらるゝは必然の數である云々と。これを聞きたる予には日本の製造品に對する非難は世界に隈無く渡り、ア、波斯南部のコンナ處に來ても亦た聞くのかと、此人の言は天これを言はしむるものなりと思つた故、大阪商業會議所宛にて此事を書き送つた。かくて予は日本の商業家が此の所在に新たなる販路を見出さるゝことを希望すると同時に、亦た前陳なる天の言をも申し上げて置く。

五 日本の脂肪工業は將來如何にすべきや。

日本の實業社會、否經世の士の反顧を煩はしたきは「日本の脂肪工業は將來如何すべきや」との重大問題である。現に予の幼孫(女兒)は一は十一歳、一は十歳で、隣近所の御友達と善く遊ぶ御褒美に予又け予の老妻が菓子を與ふるに、幼孫も御友達も女兒であつてすら餅菓子などには手を出さず、カステラ類に直ぐ指を染むるのである。予は思つた、吾々老人連は日本の青年の思想は全く我々と違つて來たと云ふが、頭腦が違つて來たなどと思ふは未だ淺見で、頭どころか口まで違つて來た……頭腦の思想に對し口想とでも云ふべきか……然らばとてカステラ其他一切の西洋菓子なるものを調製するに必要缺く可らざる植物脂肪は抑も何處より得たりと思ふや、一部の菓手に落花生より製造したる油を用ふるの外、日本の内には一滴一溜だに出來ぬのである、一切輸入品である、輸入も可なれ、印度其他熱帶地方より原料を歐洲に輸入し、英國等にて之を脂肪に精製して輸出し、日本の如き全く之を英國に仰いで居るのである、而も日本人の口想は愈々益々其方に奔り行くに當り、日本にては永久に脂肪を外國に仰がざる可

らずとあつては由々敷經濟上の問題である、予は言を改めて問はんとす、青年の思想の變化固より可なり、幼童の口想の變化大に可なり、而も之に充つべき多大……愈々益々増加すべき……の脂肪は何處に求めんとするのであるかと、是は誠に實業上の問題にあらずして經世上の問題である。是れ日本に於ける志ある學者將た實業家が印度其他此の方面に來遊して脂肪原料の研究に一身を委ね、行く／＼は如何にしても日本に脂肪工業を啓發せんことを祈願する所因である。

六 日本の製藥の原料に就て。

次は日本に於ける製藥の原料の問題である、敢て問ふ珊瑚溼の如き大重要な藥品にして其の完全なる植物見本(Artemisia Cina, Berg.)を備付けたる處は日本の何處に在りや……京都帝國醫科、福岡帝國醫科大學に在るやは知らざれども少くとも東京には無い……而して是はキルギス方面に蔓生する野生の蓬である。又甘草は藥品として日本には原料として極少く殆ど無いと云つても好いが……蒙古より輸入……予が滞在する此のイラクは石油としては次期時代の大大覇者たるべきも、現在としては、主要なる輸出物は甘草ノ根と棗椰子である。予は藥品に就て何等の知識を有たぬ、然し藥學將た藥用植物學專攻の士にして此の方面に來遊せられなば、必ずや獲る所のものあるべしと思ふ。

七 衣食住の新資料の搜索。

更に云はんとするは、予が豫てより最も主張し且つ最近の十年間聊か實行しつゝある氣化法(Accelination)、即ち日本人の食衣料を「増」「加」することである。是は全地球上に於て日本ほど氣化事業に日本の製藥の原料に就て(此一篇はバグダード滞在中に起草、日本に送りたるもの)

衣食住の新資料の搜索(此一篇はバグダード滞在中に起草、日本に送りたるもの)

適應する國柄としては無く、即ち日本人の衣食住問題、否少くとも食糧問題は之に依て其の一部分は解決せらるべしと確信する故である。然れば農業に、畜産に、林業に、水産に、夫れ々々専門の人士にして氣化法こそ日本人の衣食住問題を解決する積極的の一方法なることを自覺し、此の自覺を提げて地球上の各地を搜索せられなば、日本人の衣食住の資料殊に食料を新に増加せしむること必ずしも難事に非ずと信ず、是れ今回の旅行中、スマトラ島デリー州の「あづきさ」げ豆」初め各種の種子を郷里岡崎市役所宛に送附し附近に移植せんことを請ひたる所因である。去る十三日(三月)チグリス河にて英國の一陸軍中佐が一尾四十三英斤(日本五貫強)と云ふ世にも大なる鯉を網にて捕りたる時、如何にしてか此の如き巨大なる鯉の種類を日本に移植したしと思つた。要するに夫れ々々の専門家が疾く此の地方に來りて有用動植物の種子苗子を蒐集し、以て日本人の衣食住問題を解決する方法に着手せられんことを望むや切である(チグリス河の大鯉を旅館にて毎日々々午食と晩食とに供せられ、頃日は飽氣が來た程である)。

八 學問上の研究。

如何なる地方を問はず一たび異りたる處に行けば夫れ々々岩、植物、動物の異りたるものあるは固よりである、然れば此の地方に來れば日本と異りたる岩、植物、動物の存在するは固よりで、隨て地質學、植物學、動物學、生物學の學徒にして日本より來れば夫れ々々嶄新なる資料を得べき事も固よりである。然ればかゝる判り切つたことは申さぬが、然し人類學の研究としては恐らく世界に比類無き個所と思ふ。予は此一篇を書き綴る間に少し厭氣が生ずると、すぐ牛町先なるチグリス河の橋の側に立つて往來の人を眺めるの

である。鷹の様に尖れる鼻を被衣の如き頭巾の下より露はし、此國は己レの物だぞと云ふ傲然たる氣位にてノソリノソリと來るは亞刺比亞人の男子である、眞黒の衣を頭の上より被ぶり、兩眼の邊だけ少し露はし、頭上に大なる素焼の水瓶を載せ、跣足にて「タタリ」と歩み來るは其の女子である、亞刺比亞人よりは細作りで、顔色も稍く白く、汚き西洋服を着け來るはカルデア人にあらずればアッシリア人である、頭髮を梳らず、容貌は樗樗、脊中に日本のチャンチャンの如きものを被り、多くは一人歩きせず三四人連にて往來するはクルド人(クルサスタン人)である、畫に書ける唐子の様な頭をなし、荒布にて鉢巻し、何クソと云ふ氣構にて來るはベテイン人である、紅の土耳其帽を被り前代流行の巴里服を着け、如何なる者も英、佛、土耳其、亞刺比亞の四語を操るは猶太人の男子である、黒き布にて顔を蔽ひながら花々しき色彩の装したるは其の女子である、骨格剛壯、身の丈いや高く、漆黒の鬚蓬々とし頭上に巨大なる白布のターバンを巻きたるは印度より來りたるシーク人で、シーク人の如く外見こそ剛壯ならざれ、幅廣き小刀を佩き、一癖ありさうに見ゆるは同じく印度より來れるゲルカ人である、亞刺比亞人に似て皮膚はヨリ白く、稍く柔和に見ゆるは波斯人、恥かしからぬ西洋服を着け活力の生々せるはパーシー人の男子、ハイカラ然として西洋婦人と見紛ふばかりなるは其の女子、快活なる英國駐在兵、不規律で而も莊重を裝へるイラクの土人兵、東阿弗利加より來りたる黒坊、露西亞より避難し來りたる斬髮師、嬌艶なる埃及の舞女、はては獨り橋側に長く佇立んで居ると、亞刺比亞人の美少年の姣童が「今何時ですか」と細聲に囁々と物言ひかけて引張に來る、何んと申す不可思議の世界、人類學の研究など云はずとも、見物する丈ケにても面白い。

九 支那と「西域」との関係研究。

次は歴史の研究、特に支那と「西域」との関係、將た又元史を中心として此の地方を研究せられたるなれば、蓋し世界を撼動するに足るべき作物あらんと思ふ。此のイラクは即ち清儒の義拉克で、漢書、魏書の條支國たるべきことは先輩の既決の考證である、……唐書等の大食國即ち「タヒラ」が此のイラクを云

學問上の研究(此一篇はバグダード滞在中に起草、日本に送りたるもの)

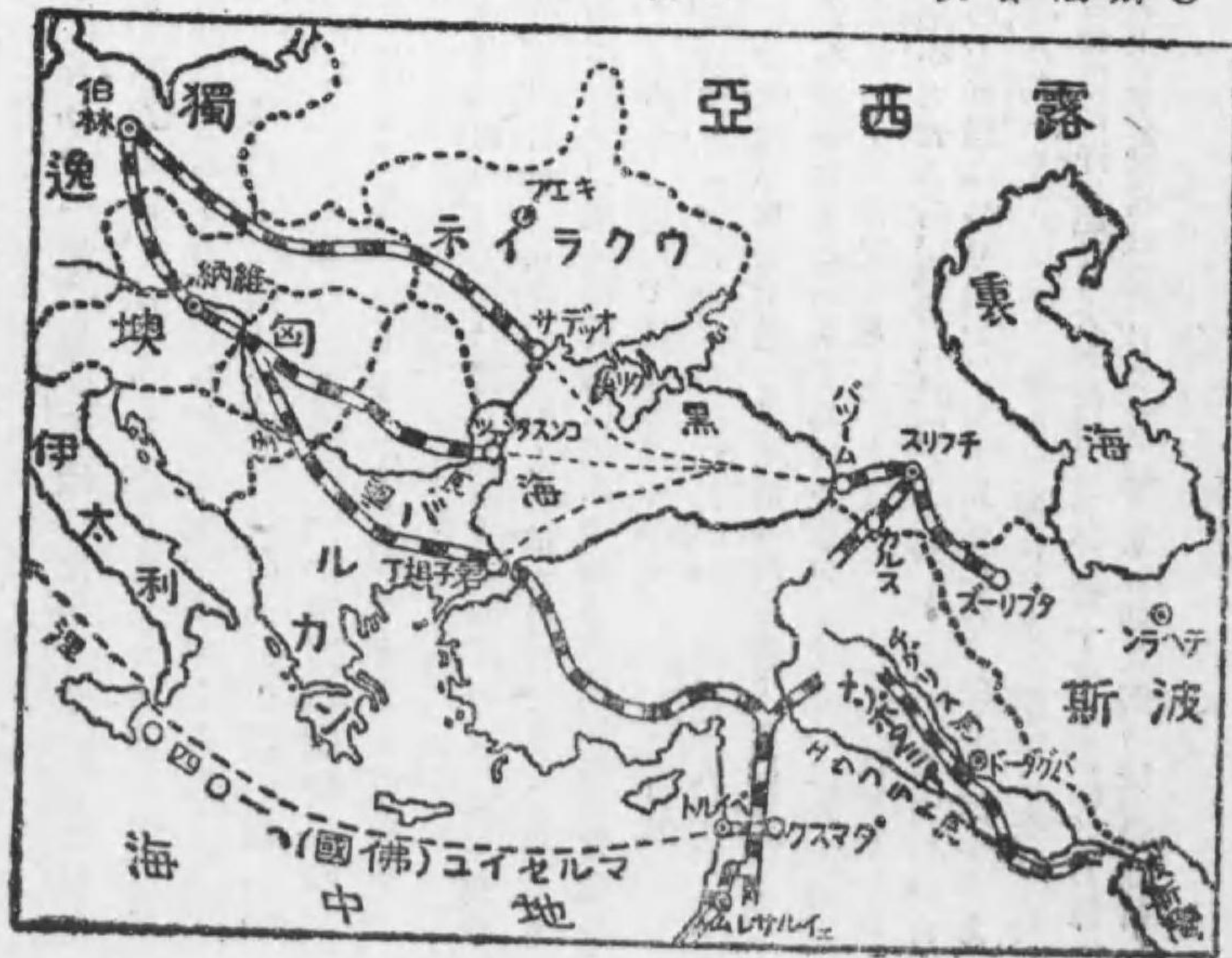
支那と『西域』との關係研究(此一篇はバグダード滞在中に起草、日本に送りたるもの)

ふものなりと云ふ説にも予は同意……而して後漢書に『城在山上(sic)。周四十里。臨西海。海水曲環。其南及東北三面路絶。惟西北一隅通陸路』と云へるが、一千八百年前の地形は此の如くなるべしと思ふべき節もある、而して此の『城』と云ふは即ち此のバグダード市即ちイラク國都で、『其南及東北三面路絶』とあるは沙漠の中に在る故である、即ち此の西方の沙漠をば今日午後發程 予は横斷の行に上るのである。バグダードは新唐書(?)の縛達城にして、元の西使記の報達國である、かの成吉思汗の孫旭烈兀(日本に來襲したる元寇の忽必烈の兄)の爲めに陥れられ、流石壯麗を極めたる『亞刺比亞夜話』の朝廷も茲に敢無く亡びたのであるが、回教文明五百年間の中心として元史には八哈塔、元朝秘史には巴黑塔又は巴黑塔揚と記し、其他の諸書に或は白達或は八吉打の名を以て知られて居る、いづれもバグダードの支那音である。『西域』將た元に關する亞刺比亞人、波斯人の著書又は記録類は實に多い、汗牛充棟と云つても誇大で無い、然るに之を讀破し得る日本人の無いと云ふは大なる遺憾である……京都帝國大學に二人はあるかも知られども……何故に大なる遺憾と云ふや、日本の學者は支那書を理解し又支那の文書を搜索し蒐集するには、西洋の學者よりは最も順便なる境遇に在る、然るに亞刺比亞文、波斯文が讀めぬ故に、『西域』の研究殊に元史の研究に就ては西洋學者の後塵を拜せねばならぬ故である。日本の學者にして切めて五年間も此處に止り、亞刺比亞文、波斯文を習ひ、其間にイラク政府圖書館所藏の古文書を漁り、且つ支那の文書を参照すれば、優に世界に獨歩するに足るべき作物を成し得べしと思ふ、日本の學者よ、請ふ發憤して千載不朽の大漢となれ(大正十三年三月二十日天明、バグダードに於て)。

大正十四年三月十四日、イラク政府は全國(バスラ州を除く)の石油探掘權を(一)ローヤル・ダッチ及シェル會社(二)英國波斯石油會社(三)米國の七會社(スタンダードを含む)(四)佛國の戰會社より形成せる四會社團に附與した、資本金十億磅(時貨一百二十億圓)、試みに一圓札にて一秒時に一枚づゝ勸定すれば、飲まず食はず不眠不休にて三百八十年を要する大大金額である。かくて『鋼鐵王』の時代は去り、『石油王』たるローヤル・ダッチ及シェル會社々長デターゲンク氏の時代となつた。

ヘンリ・ウイイルヘルム・オーガスト・デターゲンクは一八六六年(慶應二年)和蘭國都ハーグに生る。和蘭商會社の彼南支店長より身を起し、彼南に在勤中、蘭領印度の石油探掘に着眼し、ローヤル・ダッチ石油會社を興し、次で英國のシェル通運會社と合同し、現代期の世界的驚異たるローヤル・ダッチ及シェル會社々長となり、英國皇帝よりはサーの稱號を授けられ、健康で金持で智慧者で三徳三備の人と仰がれ、かの鋼鐵王シッラップ、カーネギーの如き過去時代と代はるべき人である。予は彼南に上陸するや、先づ和蘭商會社に到り、内に入りて此處こそ最々新的世界的英雄デターゲンク其人の身を起し、處、此の一小室こそ世界的驚異たるダッチ會社の搖籃なる哉と思ひ、思ひ思に耽ける程黄金を謳歌したる時代は去り、新なる詩人は石油を謳歌せざる可らざることを悟つた。

世界的川中島。世界的關ヶ原



以上の如くイラク國の石油採掘權は歐米四會社團の手に入り、一先づ協定が成つたが、未決なるはイラクと接壤する波斯の油田の問題である。波斯の油田の豊富なるは、イラクに隣近せるマイダン・イ・ナフテンの一地方僅々五万里より採掘してアバダンなる製油に輸送する高のみにても一個年三百五十萬噸（英波石油會社）に上るを見ても測り知るべきである。夫の日露協定に依り北樺太の石油採掘權が我が手に入りたりとて鬼の首でも獲た様に云ひ囃すも、含油總高は八百萬噸で、波斯の一小地方の採掘高の二年三個月に過ぎぬとは憐レ千萬である、之を見ても日本の石油政策は必死となりて顧慮せざる可らず。

波斯は今より二千四五十年前早くも領土が亞細亞、歐羅巴、阿弗利加の三大洲に誇りたる古帝國である。其後幾多の變遷を経、今世に到り其の國土が北は露西亞、南は英吉利（印度系）の間に介立し、而も石油の豊富なること知らるゝや、英露兩國は波斯油田の獲得に腐心し、兩國競つて賄賂政策を行ひ、兩國の黄金は湯水の如くに使はれ、宮廷を腐らし、大臣を腐らし、議會を腐らし、折柄皇帝は未だうら若く、歐洲に遊んで巴里邊の娘子より「シアー様」^{シャール様}と持て囃され、是れ亦た金を湯水の如くに使ひ、波斯の事復た收拾す可らざる秋に現はれたのがリサ汗其人である。リサ汗は露國士官の訓練したる波斯哥薩克騎兵の一卒であつた、祖國の形勢果勇よりも危きを座視するに忍びず、慨然として身を挺で、波斯百年の大患は英露兩勢力の侵入で、之を驅逐するにあらずんば止む可らずと心に期した、陸相よりして首相兼陸相兼内相兼大元帥となり、國人も亦た現カシアル帝室を廢し、リサ汗を戴かざれば國脈の保全す可らざることを悟り、大正十三年三月、予が南波斯の田舎廻をなせる時、識者は此説を主張して居たが、何れの世にても此種の運動に反對するのは坊主であるが、果して坊主連の大反對に依り愚かにも中止された。然し十四年十月末、皇帝は廢立せられ、十二月十六日、リサ汗は皇帝（事實上獨裁的の）となつた、其の主張は日本を學ぶに在り。石腦之油腴^{リサ汗}於^{リサ汗}肉。虎狼前後迭飽餐。誰哉一喝驅逐去、大食豪華里沙汗。起身大馬長鎗卒。存體十有七創瘡。乃揮^{リサ汗}十年所磨劍。叱咤玉殿伐^{リサ汗}綺紈。黃袍天子絕跡走。笑受諸將上^{リサ汗}玄冠。白虹貫^{リサ汗}日非^{リサ汗}異瑞。宗社却見磐石安。漠北射^{リサ汗}鳴好下物。一杯欲^{リサ汗}壽獨裁官。

一一 沙漠の横斷【東西兩洋最新の最捷路】。

題して『沙漠の横斷』と云ふ、自から淺恥^{あははづか}シサに堪へぬ、然し此の沙漠は現に亞刺比亞人の隊商は『沙漠の舟』てふ駱駝に頼り四十五日間にて横斷しつゝある。たま／＼湧き出づる水を辿り進るを以て、行程二百五十里（日本里程）、多る驕陽の下、煎る熱沙の上、一日平均五里半、即ち四十五日間を要すべきは當然である。熱沙無人の境を四十五日間とは餘りに長しとて、急ぎの人々は馬、騾馬……駱駝をも雜ふるが……を疾驅し、隊を組みめて二十一日間にて横斷するのである。大正十一年中、米國パウエル陸軍少佐の一行四人（西洋人）が騎馬にて亞刺比亞人の駱駝隊商に隨伴し、數十日間にて此の沙漠を横斷せし紀事は其の奇警を以て今の讀書社會に稱へられて居る、英國皇立地學協會の如き斯道の世界的權威に於てすら、亞刺比亞將たシリア沙漠の横斷に關する講演は、今も昔も珍重せられて居る。さるを予が僅々二十六時間にて横斷し得、其間日本酒の小宴を開き、これに二時間費したるものを差引けば二十四時間、正に一晝夜である、僅か一晝夜の沙漠旅行、『横斷』と題するは淺恥^{あははづか}シサに堪へぬと云ふは是にある。

世界第一の大沙漠なるサハラを横斷するには、其幅の狭き處……アルジェリアの南境より大西洋系のチンプクツまで……に於てすら駱駝隊商は九十日間を要する、然るに大正十二年一月、佛蘭西人の自動車は二十一日間に横斷し得たりとの電報は世界の驚異となつたのである、然るを翌十三年一月、同じ佛人は自動車もて七日間に横斷し、今や沙漠横斷の旅客運搬業を開始せんとする計畫中なりと聞いた。

沙漠の横断

シリア、亞刺比亞の沙漠即ち予の『横断』せしものは、前年初めて自動車にて試みたる者ありしが、途中にて方向を失ひ、憐レ踪跡不明となつた。其後新西蘭人ナイルン兄弟は此間に自動車の行くべきことを確信し、且つ此間に自動車の旅客運搬業を経営すれば、東洋特に印度方面よりして西洋特に英佛兩國に行くべき最短最捷の衝路たるべきことを悟り、此くて此の營業の有利たるべきことに思ひ付き、大正十二年十月十八日より『ナイルン護衛附自動車沙漠横断』の名乗を揚げて世界に現はれたのである。

此のナイルン護衛附自動車の沙漠横断も、開業當時は途中に於て、或は水草の在る處に泊り、或は夜中露營などして五十三四時間を要したるが、予の『横断』の頃には恰も五個月の經驗を得たることゝて晝夜間斷無く運轉することゝなり、かくて駱駝隊商が四十五日間の行程を優に一晝夜にて行り遂げたるには、我ながら一時は驚いた。然し是はナイルン兄弟の慧眼及び大膽と、米國式自動車の規模の雄大なることに因れりと思へば、『人』なる者が自然を決勝的に征服する時期も早く近づいて來たことを感じた。

『ナイルン護衛附自動車沙漠横断』はイラク(メソポタミア)國都バグダード市よりシリアのダマスク市經由、ベルイト港(地中海々岸)までの行程である。先づバグダードより歴史に音高きチグリス河を渡り、夫の『亞刺比亞夜話』の作者ゾベード女王の廟を彼處に見て疾驅するや、早くも北部亞刺比亞細キの大沙漠に入るのである。然し此邊には未だ步行する旅客、商品を擔ふ行商、馬を驅り來る人、駱駝に乗れる隊商、紅や白の旗を立て、靈場廻りをする巡禮の群やらで、中々賑かである。程無くしてエウフラト河を渡る、河の附近には又もや草樹が繁り、殊に棗椰樹の亭々たる林が見ゆる。然し又沙漠に入り、それより二百里(日本里程)は全くの無水無樹で、太陽が沙の地平線の上に最後の光明を燃ゆるばかりに放ち黄紅く下に没し去る處などは、日本に見得られぬ景象である。殊に陰曆十六夜の月は、一片の雲だに無き乾き切つたる中天に高く牙え渡り、水晶よりも彌清く、皎々として無限の平沙を照らし雪よりも白き沙の上を自動車は蓋地に一直線に突進し、一時間約五十哩の速力も疾驅するなど、正に人間の大快心事である。

此の良夜を如何せんとの感興が湧いた、同車中、予は中央に乗り、右にダブルジョー氏(バーシー人)、左に英國の一海軍將校、前に亞刺比亞人の案内者と運轉手監督(蘇格蘭人)及びシリア人の運轉手二名が乗り、合計七人乗つて居る。此のダブルジョー氏は二十日前、予が南波斯のバンデル・ア・パス港にて面會の際、西洋より舶來のビールや菓子など供し呉れた好々爺である、其人と一千里も隔てたる處で再會したのである、予は日本酒を持つて居るが一杯差上げると問ふた、ド氏は此齡になつても未だ日本酒と云ふものを味はつたことは無い、此の沙漠の旅も初めてだが、日本酒も初めてだ、一つ御馳走になるべしと答へた。そこで大沙漠の眞中、水晶よりも白き月下に日本酒の小宴が開かれた、バグダードより携へ來りたる鶏肉の焼いたの、牛肉、茄子、罐詰、パン、菓子、蜜柑、其他くさん、の肴が沙の上に列べらるゝ、車掌監督は鼻がかれる蘇格蘭音の英語にてア、白葡萄酒とシェリーとを雜ぜた様な味がする、コンナウまい酒の出來る國なれば日本萬歳を唱へるぞと管を巻き初める、年若き英國將校は支那の蠟酒を想ひ出すと云ひ、ド氏の禿頭は酒と月の光にてピカ／＼と光り出す、痛快淋漓、予は覺えず開闢以來無き此酒と放吟し、宴終るや、自動車は又もや月下を間斷なく一直線に疾驅した。翌日(大正十三年三月二十一日)天明、小銃を肩にし駱駝に跨れる一ペドゥイン人が我車を目懸けて來た、すると亞刺比亞人の案内者……顔役としてナイルン會社の雇ひ居れる者……は顔を車外に出し、一言二言叫ぶと、件のペドゥインはスゴ／＼として去つた。

午前十一時頃、一頭のカセル(沙漠に産する羚羊)が沙を蹴つて奔り行つた。ミレーシ(迷景)が現はれた、迷景は去る十一日にも幾回となく見た、然し今日のは規模が雄大で、大なる湖と湖中に樹木の繁れる細長き島が現はれた、恰も琵琶湖と竹生島……竹生島よりは更に大きくて細長きもの……を眺めたるが如くである、惡詩を得た、

太陽流影日半晴。惟見珠樓縹緲生。俯仰乾坤誰管束。無邊大漠放歌行(レビタ)。陸上之蜃氣樓也。

午後三時半、馬の鬃と鞍とをケバ／＼敷飾り立てたる兩騎が我が車を目懸けて飛んで來た、銃を肩にせる者である、我が車に迫り來つた、スハと予の隣の英國將校はピストルを手にした、我が車に在る亞刺比亞人の顔役と二三語を交はして去つた、後にて聞けば沙漠を護衛する警察兵であつた。四時、遙かにレバノン連山の雪を眺めた、俄かに草樹が現はれ來り、車は李、杏、桃、櫻桃、巴旦杏の花と崩え出づ月桂樹の若葉との間を疾驅し、ダマスク市に着いた。

沙漠の横断

沙漠の横斷

ダマスクはシリア(佛蘭西委任統治領)最大の都會で、人口約十七萬、耶蘇基督一千年の前より其名を知られ、殊に回教一千二百年間の一中心として名所舊蹟は市の内外に散在する。三方の連山よりは雪消ケの水流れ來り、合してナール・バラダール(「寒流」の義)となり、市街を貫き、涓々として絲なす青柳の間を縫ひ去る處、恰も春の最中たることを告げ知らず似、今しも横斷したる沙漠の荒寥をば十年も前に經過したやの感あらしめた。ダマスクに滞在三日、それよりハイファに出で、地中海の煙波を望んだ、即ち亞細亞大陸を横斷し得たのである。亞細亞の山も是が見納か、神酒即ちカルメル山の葡萄酒(ハイファより五里、基督以前より「神の山」と稱へ、ソロモン王の頌歌にも見え、今に山僧は世界有名葡萄酒を醸造す)を酌みつゝ、左の惡詩を書して遙かに日本なる白鳥文學博士に寄せた。漢書、魏書、唐書の拂林又は拂菻に就ては歐洲學者間に多様の議論あるが、白鳥博士がシリアなりと斷定せられた故である。

目送亞洲將了青。阻風今夜暫淹停。何時同酌拂林酒。一味春寒話地經。

世界大戦役の後、日本より西洋に行くには、印度洋及び蘇士運河を經由し、然り而して地中海に入り、歐洲に上陸するのであつた。否西比利亞鐵道に依らずとすれば、矢張印度洋及び蘇士運河經由の外は無、否印度方面より西洋に行くには是より外に途は無いと思つて居る。然し此の印度洋及び蘇士運河經由と云ふは、實に迂の極、遠の極で、弓よりも曲つて居る、然れば弦の如き途を取るを智者となす、弦の如き途とは即ち波斯灣經由、亞刺比亞沙漠横斷、地中海に出で、それより歐洲に行くのである、即ち日本より孟買(印度)まで汽船約三十日、船賃約四百圓▲孟買よりバスマ(波斯灣よりチナグリス、エウフラト河合流せるを溯り)まで汽船六日半、船賃約二百五十圓▲バスマよりバグダードまで汽車一日、車賃約五十圓▲バグダードより倫敦まで自動車(沙漠横斷)汽船汽車(マルセイユ上陸)十日、船車賃約八百五十圓。計四十六日、一千五百五十圓。世界的川中島、世界的關ヶ原、即ち日本人の最も知らざる可らざる方面を經過して西洋に行くのである、況んや行程の間の多趣なること單調なる印度洋を航行するなどと比較すべきものにあらざるをや。

一一一 回教の國土(最新の歐洲外交紛科の泉源)

一 歐洲外交の温床は巴爾幹より亞刺比亞へ移動(第二の巴爾幹、否最新の巴爾幹)

巴爾幹が歐洲外交否世界外交の温床なりと云つたのは、世界大戦役の前の事情で、今や歐洲外交紛科の泉源は亞刺比亞に移動した。十數年前、世界大戦役の前まで、即ち世界歴史より看下すれば昔々大昔の頃に何故に巴爾幹が外交の伏魔殿なりしやと云へば、ソハ巴爾幹列小國の四周には世界の四大軍國、即ち露西亞、奧匈帝國、獨逸、土耳其の四大帝國が虎視耽々として隙を狙ひ居り、列小國の間に離合集散あるや、待つて居つたと云はぬバカリに干涉し、關係し、かくては伊太利より英吉利、佛蘭西までも利害及び勢力の均衡上これに仲間入せざるを得なかつた故、事態が愈々重大となり、果ては世界的問題とまで發達するを常とした故である。然るに大戦役の結果、露、獨、土の四大帝國即ち四大軍國が恰も申合せしたるが如く揃ひも揃ひて滅びだる以上、即ち鞍間山の僧正坊なり月山羽黒湯殿山の大天狗の滅びたる以上は、如何に巴爾幹の内に在つて蠢動したりとて問題が擴大すべき公算は無くなり、巴爾幹の葛藤は烏天狗の蹴合に過ぎなくなつた、隨て巴爾幹問題など云ふことは、最早學者、歴史家の研究範圍となり、活きたる外交としては第二流三流否五流に落ち、列強紛科の温床は亞刺比亞系に移動し、亞刺比亞系小列國が最も新しき巴爾幹となつた。然れば歐米列強にては、亞刺比亞系の問題を研究することが新流行となつた、然るに日本は同じ亞細亞洲の内に在りながら亞刺比亞の事などはと全く風馬牛視し、

回教の國土(最新の巴爾幹)

回教の國土(亞刺比亞系列小國の建立)

何處に風が吹いて居るやと思ひ居り、相も變らず巴爾幹の變動……四大天狗の滅びたる今日となつては烏天狗の蹴合に過ぎざる……を大事がるなどは大小本末の別を辨へざるも甚しと云はねばならぬ。

二 英佛乖離の搖籃(最近の歐州外交に於ける) 亞刺比亞系列小國の建立。

世界大戦役の間、土耳其は英吉利に對する義理を棄て、獨逸方に奔つた。土耳其皇帝は回教々主である、然れば英國は、感情としては土耳其に對する面當の爲め、實際問題としては其の領土印度に於ける七千萬の回教徒の動搖を防がん爲めに、土耳其皇帝に代つて回教教主たるべき者を物色した、白羽の矢に中つたのがメッカ(回教々祖の宗廟所在地)の首長にして教祖マホメットの直系と稱へられたるフーセイ人其人であつた。かくてフーセイ人は英人に擁立せられてヘジャス國王となり、自から『亞刺比亞國王』と號した。大沙漠中の一沃地、百萬にも足らぬ人口もて、英國の虎の威を籍り、ヘジャス王國なるもの、委員はヴェルサイユ平和會議にも世界の一國の代表者として英國將た日本と同一の權能を有つて出席した。

ヘジャスの北に接するは西がパレスタインで、東がケラクで、其又北に接するのがシリアである。大戦役中、英國は其の同志たる猶太人に對してパレスタインに『猶太人の國家』を建立すべきことを公認し、……パレスタインの内なるイスラエルは猶太人の故土でもあるが故に……而して戦後此處を英國の委任統治となした。然るにパレスタインの人口の約九割は亞刺比亞人、八割は回教徒で、猶太人は如何に世界の各地より復歸を奨励するとも未だ一割強に過ぎぬ、然らば亞刺比亞人にはパレスタインは吾々の國である、猶太人が今更ら復歸し來りて我物顔するは癢に障るとして非猶太的感情は所在に充滿ちて居る。

そこで英國には一方に於ては亞刺比亞人の感情を和らげ、他方に於てはパレスタイン、シリア方面一帯に自己の勢力を扶植せんものと、豫てより擁立し居れるヘジャス國王の第二王子をイラク國王に立て、第三子をシリア國王に立てた、是れ大正九年四月の事である。かくて端なく佛蘭西との衝突が發した。

佛蘭西は久しくシリア地方に布教して居り、シリアにては外國語と云へば佛蘭西語である位である。又中古よりマルセイユ港(佛國地中海々岸)と交通貿易の關係も少からず、且つ一八六〇年(萬延元年)此の地方の回教徒暴動の時、基督教徒保護の爲めに出兵したる事實もある。然れば世界大戦役の後、佛國にはシリアこそ我が藥囊物たるべしと必期して居つた。然るを英國が自己の勢力を扶植せん爲めに其の玩具たるヘジャス國王の第三子をシリア王に立つるとは何事ぞやと、兵を擧げて之を攻め、シリア國王フアイサルは花の都ダマスクにて即位式を擧げたる後、憐れ九月にしてシリアより逐ひ出された。

是に於て英人は一は佛國に對する面當と、一はフアイサル其人に對する義理とに依り、此人をイラク國に伴ひ來り、是より先イラク國王アブデッラーは同じ父より出でたる實の兄なれば、目を潰つてイラク國王の位を愛弟に譲つたのである。然し一たび國王とまで擁立し、而も兄たる者を其儘にして置く譯にも行かざれば、英人にはパレスタインの東、即ちヨルダン河の東にケラク(新名トランスヨルダニア、即ち『ヨルダン河の彼岸』と云ふ義)を作り、兄アブデッラーを其の國王に當合つたのである。

かくてヘジャス國王フーセイン(大正十三年七十一歳)の第二子アブデッラーは大正十年四月ケラク國都アンマンに於て、第三子フアイサルは同八月イラク國都バグダードに於て各々即位式を擧げ、茲にヘジャ

ス、ケラク、イラクの三王國、即ち「親子の亞刺比亞系三國」が出来、何れも英國の擁立せしものである。かくてヘジャス國王の兩王子は各々其の國土と王位とを獲たるが、兩王子共に佛蘭西人より逐はれたる者なれば、佛國に對して一矢酬いざる可らずと心中に期して居る。然ればケラク、イラク兩國王はシリア即ち佛領に於て事あれかしと望み居れる折柄、シリア人も亦た佛國の統治に服せず、陽に陰に佛國の統治を顛覆せんことを謀り、政治上の犯罪は絶えぬのである、而も其の策源地は概ねケラクに在る。

ケラクは沙漠と山とに圍まれ其の内に國を成すを以て、佛人に對し政治上の犯罪ある者は逃れ來り易く、一たび逃れ來れる者は容易には逮捕せられざるのみか、國王も亦た之を包容し、力めて政府の官吏に採用し、以て衣食の途に就かしむのである。さなきだに隠レ場としては倔強なるが上に、山翠に水清く、風光明媚宛がら歐洲に於ける瑞西スイスの如くして、政治犯罪者の隠レ場としても亦た瑞西の觀がある。此國の首府アンマンのみに來らんと欲すれば、汽車の便あれども、予は沿道の山水と政治犯罪者の隠レ場と稱ふるサルト地方を探らん爲め、東より死海アッド・シーを廻りジヨルダン河を渡り、それより山を越え谿を辿りて此國に入つたのであるが、實にもシリアより亡命せる文士、詩客、政治家、法律家、新聞記者、軍人、慷慨の徒は、男と云はず女と云はず此の亞刺比亞の瑞西に群を成し、北シリアの天を望んで風雲を窺つて居る。三月二十八日(大正十三年)、ケラク國王が予に賜はりたる午餐の席上に於ても、首相の左に座したる兩招客、一はレバノンの親王、一は新聞社長、共にシリアより亡命し來りたる者で、予に向ひて「我々共はシリアに歸られぬ者であります」と撫然として語つた。

是に於て佛國はシリアに於て、南にはヘジャス、ケラク、イラクの親子國に對して警戒し、西にはスミルナ地方に希臘の勢力の來り迫るものあるをば警戒せざる可らず。ヘジャスもケラクもイラクも希臘も、皆な英國の飼犬である、而してヘジャスもケラクもイラクも希臘も、土耳其に對しては皆な深甚なる仇敵である、佛國たるもの豈に秘かに土耳其に結ばざるを得んや。茲に土耳其國民軍統領ケマル・パシアの漸く優勢となり、スミルナより希臘軍を逐はんとするや、佛國は早くも機微を察し、頗にダルダネルス方面より撤兵して故意に英國を棄て希臘を棄て……ダルダネルスは英佛協同管理となり英佛兩軍共に駐在して居つたのを……以て先づケマル・パシアに對し大なる精神的援助を與へ、次で軍器彈藥を土耳其方に供給し、引いて希臘軍の全敗となり、英國ロイド・ジョージ内閣の顛覆となり、土耳其の復興となり、ローザンヌ會議となり、セーヴル條約の破毀となり、世界大戰役の間漆膠も管ならざりし英佛兩國の間柄は全く乖離し來り、佛軍のルール谿谷進撃となつたのである。知るべし歐洲最近の外交的紛糾の温床は亞刺比亞系小列國に移動し來り、此の方面こそ第二の巴爾幹、否最新の巴爾幹となつたことを。

謂ふ勿れ沙漠の間何の研究かあらんやと、何の調査かあらんやと、其の地質の痛奇なる其の自然界の非凡なる全く豫想の外に在る、況んや單に外交問題としても如上の研究すべく調査すべきもの多々あるに於てをや、何ぞ況んや此處の沙漠を横斷する自動車營業は開始せられ、依て以て東西兩洋間の交通を革命せんとするものあるに於てをや。更に又シリア人の獨立運動、パレスティンに於ける亞刺比亞猶太兩人種の軋轢等、歐洲外交の禍機は全く此處に包藏せらる、亞刺比亞系の研究は急務中の急務である。

回教の國土(シリア人の獨立運動)

三 シリア人の獨立運動。

今のシリアなるものは大概古のフェニキアの故土である、フェニキア人の冒險、航海、海外貿易は三千餘年後の今日より見ても驚嘆に堪へざるものである。今のシリア人も多く其の血統を享け、多感で、自恃的で、又進取的である。世界大戦役の後、ヴェルサイユ平和會議は、所謂民族自決の精神を執り、亞細亞に於ける幾多の亡國をして其の獨立を回復せしめたるを看取し、シリア(戦前土耳其領となり居れり)の如きは、三千五百年來の光輝ある歴史もあれば、固より獨立し得らるべきものとのみ思ひ込んで居つた。然るに何ぞ料らん、南隣のヘジャスの如き百萬足らずの亞刺比亞人ですら尙ほ且つ獨立して一國を成さしめたるに拘らず、三百萬餘もある我がシリア人を獨立せしめざるとは頗る依怙の次第である、若し獨立するを得ずして何國かの委任統治に屈從せざる可らずとあれば米國を欲する、米國にして海外に委任統治することを欲せずとあれば英國を欲すると、是がシリア人の素懐であり又輿論であつたのである。

かくてシリア人民の請願書を調査したるに、米國の委任統治を希望する者は總數の六割強で、其他の國々は一も一割半だに上つたものは無かつた、米國にして之を容れざる時は英國を欲すとの請願書は九割強で、如何なる條件を以てするとも佛國の委任統治に反對すと強硬に請願したる者は六割強に上つた。然るにヴェルサイユ會議に於ける政治家達は、外交上の關係のみを知りて歴史地理に無知なりし結果、恰も豆腐でも切るが如く……西洋には豆腐無ければブッチングを切るとでも云ふべきか……容易に此處を佛蘭西に與へたのである、シリア人たる者豈に不平ならざるを得んや、否憤つた、怨んだ、遂に號び出

した。是に於てか佛國の委任統治を顛覆せんとする示威運動となり、陰謀となり、勃發とたらんとした。佛國官憲は這般の不平の徒を一網に打盡した、シリアに於ける佛國政府の監獄は國事犯者を以て充塞せられた……大正十四年ダマスカの陥落せんとせし動亂あり……而して難の我身に來るべきことを覺つた者共は相率ゐて南隣のケラク即ち亞刺比亞の瑞西に亡命した。今日となりては流石の佛國官憲もシリア人に對する始末に手を焼きたるの餘、頗に寛大主義を執り人心を和らぐることには是れ力め居れるを以て、ダマスカ邊には、外國旅客の氣に着く程までにはシリア人の不平も横溢し居らなく見へた。然し一たびマッチを點ければポッと燃え出するは火を見るより明かである。更に一入の勢もて燃え出さんとするは

四 パレスティンに於ける亞刺比亞猶太人種の軋轢。

である。亞刺比亞人は曾ては歐羅巴の總掛りとなつて攻め來りし七回の十字軍をば撃退したるてふ意氣も存することゝ亦た眞平の獨立國たらんことを欲し、隨て英人に依て擁立せられ英人に是れ頼りて今日の位置を守り此くて英人の願使に是れ甘んずる夫のヘジャス、ケラク、イラクの三國あることを欲せず、『英國的ならざる亞刺比亞』を期圖する折柄、茲に又英國の後援に依て猶太人がパレスティンに國を建てんとするあるを看取しては、寢ても起きても憤悶に堪へぬ實際實境となつたのである。亞刺比亞人より云はしむれば、成程パレスティンの一部たりしイスラエルは猶太人の故土である、然し是は二千年前の事で、猶太人は之を棄て、外國に奔つたので、吾々は此處に來り、此處を我が子々孫々までの墳墓の地と定めたのである、然るを二千年後の今日に至り、猶太人が英國の政治的後援と歐米に散在する猶

回教の國土(シリア人の獨立運動。パレスティンに於る兩人種の軋轢)

回教の國土(パレスタインに於る兩人種の軋轢)

太人富豪の寄附とに依て此處に新に國を建てんとするは何事ぞ、自分が好んで棄て去つた土地に他人が来て開拓し、時間もあろうに二千年の後に戻り来て此處は己レの物だと云ふ、誰か此の如き不條理を聽き入るゝ者あらんやと、是が猶太人のパレスタイン建國に對する亞刺比亞人一般の感情である。

イエルサレムより猶太人の一青年を道案内兼通譯となし、ケラク國まで同伴し、又所在の猶太人移住地を巡り、殊にリジョン・レ・ジオンに猶太人經營の葡萄酒醸造場を參觀したるが、流石に巴里のロツツィルド男爵家(倫敦なるは英語にてロツツィルド男爵と呼ぶ、共に一門の猶太人出身、世界の富豪)の出資丈ケありて南米亞爾然丁のメンドーサに於ける世界第一の葡萄酒醸造場と伯仲すべきものと驚嘆した。

それより地中海々岸に出でテル・アヴヱに來るや、こはヘブライ語即ち猶太語にて『秋の園』と意味する如くパレスタインに於ける最も瀟洒なる海水浴場であるが、新開地のことゝて日本に在る地圖には固より、予が常用とする倫敦ホームスウォース版の最新地圖にも載つて居らぬ、然るに世界大戦役の末頃よりして世界各國より移住し來りたる猶太人の成したるもので、人口早く既に三萬、悉く猶太人で、高等専門學校も既に建設せられ、全體の景象は米國新英、蘭の海岸にある小都會を眼前に見る様である。予は印度以來の旅行の骨休メにと此處のモスコヴィツ夫人の家庭に寄寓し、日夕春禽の聲を聞きつゝ大好物たる張船山集(清初の詩人)を閲みし、さて食卓に就けば、主人のモスコヴィツ夫人は羅馬尼より移住せし猶太人で、客は英、佛、澳、露、波蘭よりの猶太人で、予の室を始末して呉れる下婢は獨逸よりの猶太人であつた。予は道案内兼通譯として同伴し來りたる例の猶太人青年と此の市街を散歩中、彼に向ひ云つた、

盛んなものだ、君の同胞は僅に五六年の間にコンナ見るさへ美しい町を能くも作つたものだ、全く沙漠の内に在るオアシス(沃地)だ、然し亞刺比亞人となつて考へたなれば、君の同胞に對し嫉ましくて怨めしくて耐るまいと。すると猶太人青年は云つた、如何にも其の通りである、四日前此處にて亞刺比亞人の一群が猶太人二名を殺した、そこで猶太人も怒つて、亞刺比亞人四名を殺したと。ア、此の如き内情である、亞刺比亞人の猶太人に對する心理状態は測り知らるゝのである。

大正六年十一月二日、時の英國外務大臣バルフォア卿はパレスタインに猶太人の「國家」建立の事を公認した。同十四年三月下旬、卿はイエルサレム市に於ける猶太人大學の開校式に臨場の爲め出張さるゝや、市内の亞刺比亞人は固より、基督教徒も一齊に吊旗を各自の店頭に掲げて店を閉ぢ、各新聞紙は黒框附にて吊意を表した。開校式だけは無事に済み、さて英領を去り、佛領シリアに入りダマスカ市に滞在するや、亞刺比亞人の大群衆は其のホテルを襲ひ、死傷一百五十、再度の來襲の際には佛國軍隊は爆裂彈を投下して僅に撃退せしめた。バルフォア卿は豫定の行程を變更し、身を以て汽船スフィンクス號に遁れ、ホーの態にて英國に歸られた、是は大正十四年四月中旬の出來事である。

かくて亞刺比亞人一般の心理情態は『英吉利的ならざる亞刺比亞』を期圖することに一致する。之を期圖するには其の中心人物無かる可らず、亞刺比亞全島の中央、大沙漠の間に國を立て、馬、駱駝三十萬騎を一呼して召集し得る年壯氣銳のネチド國王イブン・サウド其人である。

ネチドは建國以來、其の君主は代々膽略あつて、一時は西は土耳其、南は埃及、東は波斯までをも震懾せしめたこともある、今日にても亞刺比亞半島の中央よりして東は波斯灣の一部分まで所領して居る、而して此のネチドが常に強大を致し、四方より畏視せらるは國王が又ワハビ教の教主たるが故である。

回教の國土(パレスタインに於る兩人種の軋轢。ネチド國)

回教の國土(ネヂド國。ワハビ教)

ワハビは回教の一派ではあるが、恰も夫の清教徒(基督教の)の如く神ながらの道を信じ、神と我との間に人の在るを容さず、飲酒、喫煙、遊戯、高利貸、裝飾を嚴禁し、各自の財産に一割の税を課して貧民の救済に充て、寺院の賽錢(さいせん)すら之を禁じ、信心堅固にして斷食の制期間には自己の唾すら吞まざる者ありと云ふ。此徒は以爲らく、眞理の爲めに身を殺すは即ち神に奉ずる最善の勤行なりと、然れば國王即ち教主の召集に應じて戰場に臨むや、死を視ること歸へるが如きものがある、是れ即ちネヂド國の強大を致し四方より畏視せらるゝ所以である。ワハビは教主の名ワハブより起り、ワハブは回教曆を日本曆に換算すると元祿八年の出生である、元祿七年は恰も我が古神道家吉川惟足(吉川惟足)の歿した年である、ワハビは信仰に於ても人物に於ても惟足に頗る似たる所がある故、惟足が亞刺比亞に再生したるやの感がある。さて今のネヂド國王即ちワハビ教主イブン・サウドは以爲らく、ヘジス國王とは何だ、メッカ(回教宗廟地)の宗廟を守り、教主マホメットの直系なることを笠に被て、年々宗廟に參詣する各國幾十萬の信者より御賽錢を捲き上げ、多額の聖都入場料を取り、同地方に乏しき飲料水の値を高くして不當の利得を占め、爲めに莫大ともなき富を致したるのみか、常に英國の虎の威を假りて自から「亞刺比亞王」とまで尊號するこそ小癩(こしか)千萬なれ、イデ物見せて呉れんと兵を進めてヘジスを攻めた、時に大正十二年。ヘジス國王フーセインは國都メッカより遁れて國都の門口たるジッダ港に奔り、豫てより待受け居たる汽船に搭じて蒙塵せんとした。急を聞きて英國の飛行機隊はヘジスに來援し、爆弾をネヂド軍目かけて落下せしめたる折柄、ネヂド國王サウドと多年親交ある一英國將校は遠くバグダードより沙漠を馳せ

來り、爰にネヂド國王は一個月五千磅宛、別に毎歲新年に二萬磅、合計一個年八萬磅(日本時價約一百万圓)を英國政府より受くることとなり、かくて僅に和を結び、ネヂド軍はメッカに入らずして引揚げた。サウド王は其の臣下に向て曰く、フン八萬磅か、異教徒よりの貢物だ、お蔭でベルイトの米國宣教師建立の大學校に醫科を習はしむべく我國の青年をも留學せしめ得べきである、意氣昂々然。

かくてネヂド國王サウドは英國より年に八萬磅受領はするものゝ、多年の仇敵たるヘジス國王、其の一子はケラク國王、其の一子はイラク國王となり、「英國的亞刺比亞」がネヂドの國土を包圍するに平かならず、是に於てか私かに佛蘭西に欸を通じ、佛蘭西も亦さるもので、ネヂドの如き強大なる國が味方となれば英國に與(よ)し易しと考へ、茲にネヂド佛蘭西の連衡は成り、亞刺比亞人一般はさてこそネヂド國王イブン・サウド其人に依り我が亞刺比亞は獨立し得べしと大なる期待を以て風雲を望みつゝある。

大正十三年三月土耳其廢帝が亦た回教々主たることを廢立さるゝや、ヘジス國王フーセインは其の兩子たるケラク國王イラク國王の擁立に依りカリフ即ち「回教々主」と成り濟ました、年壯氣銳のネヂド國王サウドは以爲らく、しらくさい奴(め)、八百長でカリフになりがたナと、予がパレスタインに滯在中に其の擧兵の準備あることを聞いたが、果して七月兵を進めてヘジスに攻め入り、ヘジス王室は國外に蒙塵し、ネヂド王イブン・サウドはヘジス國都メッカに入り、十五年一月ヘジス國王兼ネヂド蘇丹の位に即いた、即ち亞刺比亞に於る英國系勢力の遞減を示した。謂ふ勿れ亞刺比亞は沙漠のみ、沙漠の間に何の外交かあらんやと、現に沙漠の間の出來事は英佛兩國の乖離を由來し、延いて歐洲中原の外交問題を惹起しつゝあるにあらずや。知るべし歐洲最近の外交問題は亞刺比亞こそ其の温床にして、正に是れ第二の巴爾幹、否最々新の巴爾幹となりつゝあることを。

回教の國土(ネヂド國。英佛兩勢力の消長)

回教の國土(ケラク國王の謁見)

五 ケラク國王の謁見。

ネチド國王イブン・サウドの英姿颯爽たるは前云ふ如きである、其の仇敵の一人たるケラク國王アブデラー即ちヘジャス退王フリーセインの第二子は如何なる人物なるか、正に是れ好個の對比である。

大正十三年三月二十八日、山を越え巖を辿りてケラク國々都アンマンに入り、先づ王宮の前に立つた、世にも見事なる栗毛の亞刺比亞馬に跨れる黒装の四騎兵が宮門の前に列んで居る、若干の兵士も整列して居る、予は國王が何處ぞにか行幸せらるべき折柄と推察した。然し取敢へず右に日本字左に西洋字にて印刷せる名刺を取出し、國王殿下にと拜謁を請ふた、身の丈六尺餘とも覺ゆる背の最も高く帯に弓形の短劍を佩き顔と云へば墨よりも黒き色せる一侍従が嚴かに名刺を受取つた。待つ間程も無く、侍従は樓上に案内した。内に入ると、年齢十四五歳で、吾々日本人と同じくらの皮膚の色をなせる一少年が迎へ出でた、國王の御小姓と思つた、後にて王太子(世嗣)であることを知つた。

宮殿の奥まで前むと、年齢四十を越え、日本人よりは色の白く、宛ら惠比斯と大黒天とを合はしたる如き福々しげの人が起ちて右手を出して握手を求めた、誰あろう是れ回教々祖マホメットの直系『亞刺比亞國王』フリーセインの第二王子即ちケラク國王アブデラー殿下ならんとは。予は恭々しく握手したる後、王が『座せよ』と予にて二三回も示されたる儘に、王の直ぐ前のソファに座した。仰ぎ見ると、白地に金もて彩れる絹布を頭の上より被ふりて兩の頬より肩の上まで垂れ、黒色無地の絹にて縫ひたる日本の被衣様のものを着け、帯には金銀を縷めたる亞刺比亞特有の弓形短劍を佩いで居らる。側に立てる一親王にドクトルを呼び来れと命ぜられた。ドクトルは来た、陸軍々醫中佐で、ヘルイト(シリア)の米國宣教師建立大學の醫科出身なりさて、米國英語をば米人と紛ふまでに巧みに操る、即ち國王には通譯すべき爲めに召されたのである。是より先、予は英語を使用する猶太人の一青年を道案内兼通譯の爲めにと遠く此國まで同伴し來りたるが、此の軍醫中佐の米語は流暢なるが故に専ら此人の通譯を待つこととした。

予は曰く我が日本は亞細亞の極東に在り、殿下の御領土は亞細亞の極西に在る、東西兩極とは云へ亞細亞の内にあるが故に兩極相待ちて電氣の效用あるが如く、吾人兩極に在る者も亦相待たざる可らずと愚考したる儘、突如と推察した、然るに殿下より親しく拜謁を賜はりたるは眞に老生一代の面目なりと。王曰く能くも日本の如き大國より貴下の如き人が我邦に來り我を訪問せられた、當國には古跡甚だ多し、右等の發掘、保存、發掘物の整理に就ては我が亞刺比亞人は遺憾ながら未だ能力の不充分なれば、アルバニア人の學者を招聘した、今右の博物學者を呼び來らしむべし尙貴下(志賀)にして苟くも探究したしと思ふ處あれば案内者を下命すべきを以て、何事に限らず遠慮なく申されよと。やがて王には軍醫中佐に對し何か云はれたが、中佐は予に向ひ今日午餐を共にすべしとの特旨である、而して今日は恰も金曜日(回教の禮拜日)なれば殿下は只今より國立寺院の祈禱式に臨幸し給ふ折柄である、式の終るまで此處にて待たれよと云つた。依て予は中佐に請ひて祈禱式を拜觀することとし、中佐及び同伴の猶太人青年と同車して寺院に向つた。沿道は行幸を拜觀せんと人々は群をなして幅狭き街の兩側に立ち列び、立錫の地なき有様である。寺院に入ると、整列せる兵隊が奏樂に連れて一齊に最敬禮をなし、且つ國王萬歳の歌を唱へ始めた。中佐は吾々一行を殿下と誤つたのであると笑つて云つた。間もなく殿下の車は警衛の四騎を先達として到着した。予が起つて御出迎したるを認められ、王には右手を頭上に舉げて挨拶せられた。

祈禱式終つて歸殿せらるゝや、午餐會は庭上に張れる天幕の内にて開かれた。王先づ中央の正面に着席せられ、王の右に王太子座し、王の左に王子座し、王の正面に首相ハッサム・パシア(土耳其君府出生の人であるが又回々教祖マホメットの血統の人なりと)座し、首相の右即ち王の左正面に予が座し、予の右にアルバニア人の博物學者座し、首相の左にレバノンの一親王座し、其他は王族二、侍従武官長、軍醫中佐、新聞社長、予の同伴せし猶太人青年の十三人が列んだ。献立は七種で、酒は回教にては嚴禁するを以て一切無かつた。食卓上にて王はくさくさの質問を發せられた、大地震の善後如何、大山元帥は如何(其の葬去を知り給はざりし爲め)、東郷元帥は如何、日本の社會問題如何、ホルシヴィズムは日本に宣傳し來りたるや如何、日本文字は如何、其他種々であつた。予は一々奉答すると、右隣のアルバニア人の學者が最と精細に通譯した。予に對して前に座せる王子は八歳で、予の顔を不思議そうに見詰

回教の國土(ケラク國王の謁見)

回教の國土(ケラケ國王の謁見)

らる、王は外國人と云ふ者は見たことが無い故であると云はれた。聞けば王の領土中には一人の西洋人も在留せず流石の西洋人宣教師も國民が回教を固守するが故に手の着け様なく、いづれも引揚げ去つたことである。

午餐會の後、王始め一同は庭前にて涼を納れて居つた。すると六歳ばかりの小兒が樹の間より王を目覚めてチョコチョコと馳せ來つた、王は手招きされた、衣服は埃と泥とに汚れ、鼻を垂らし、足の裏には牛の糞がついて居る。王は「お前は何處の子だ」と問はれた、すると「子は牛番の子だ」と答へた。「ソーか、名は」。「ムハメット」。「何國か」。「亞刺比亞」と、子はポケットより埃及銀貨(五十錢)一個を出して與へた。子は大に喜んだ、そこで王は「ソレを何うするの」と子に問はれた、「ポケットを買つてお前にも遣るヨ」と答へた。侍臣達は噴き出して笑つた。「イヤ折角買つたお金だからソレはおかあ様にお見せなさい、ポケットは買はなくても良い、これを上げよう」とて、王は侍従に命じ佛蘭西製のビスケット二袋を子に與へ、又王太子に金を遣れと命ぜられた、王太子は土耳其金貨(十圓)一個を與へた。すると其子は金貨など云ふものは見たこともなく、銅貨なりと思ひ、子の與へたる銀貨の方が大なるより比べ見ては銀貨の方が大事にして居た。折柄父なる牛番は其子の行方を探シに來り、此態を見て吃驚仰天し「ナンダ勿體もない、こなたは國王様だぞ」と呼びて子を引張つて行かうとした、すると王は「マー好いではないか、此次に來る時は顔と足を良く洗つて遣れ」と云ひ給ふと、牛番は平伏して感泣した。予は此の實際を面に見て、ア、亞刺比亞人など云ふ者は野蠻で、酋長は唯是れ尊大を極め、臣下は唯是れ戰々兢兢として其前に怖れ跪く者なりとのみ思ひ居たるに、何ぞ料らん古の訓話にでもあるが如き明王を眼前に認め、野蠻どころか、我こそ却て大に學ぶべき所があることを感發し、予はケラケ國に來りたるものが各種の研究の外に更に得る所があつたことを悟つたのである。

さて予は國王殿下に對し、かへすの厚待を感謝し、且つ御別を告げ、記念の爲めに御親署を乞ふと、一尺大の肖像寫眞に亞刺比亞文字もて「日本人志賀に贈る アアテッラー」と親署して賜つた。王は予の寫眞を望ませられた、依て予はイエルサレムより日本服(黒紋付羽織袴)の寫眞二枚に添へ、英文の書面を奉送した、書面の宛に「吉刺克國王亞伯德拉殿下」と漢字に振假名したるは、殿下が是より先日本字と漢字との區別を問はれた故である。ナント國王殿下と天外の一旅客、石ノ上にもあるが如き節古の交情ではあるまいか、爛熟せる文明世界にては逆も見られまじ。

六 見込無き亞細亞聯盟(日本が首倡すれば日本の自殺)。

亞刺比亞の旅行は開心であつた、予は有ゆる人々より歡待せられた、是は日本人である故である、日本人を兄分と仰望する気分が上下に通じて横溢して居る故である。然れば吾々日本人は義理としても亞細亞啓發の任に當らざる可らず、眞心籠めて亞細亞振興の事に盡さざる可からず、然は云へ、世の所謂亞細亞聯盟なるものは見込が無い、否今の時日本が之を首倡するには反對である、絶對的に反對である、要するに今の時亞細亞聯盟だの大亞細亞主義など云ふことを首倡するは大局の明無き徒である。

米國の所謂排日に對抗せん爲め大亞細亞主義とか亞細亞聯盟など云ふが頻りに流行し居れるが、元來日本は支那を除けば何の亞細亞國と聯盟せんと云ふのであるか。支那を除けば、武器は無く、財力は無く、科學は無く、而して外國人とさへ見れば、手を舉げバクシーン、バクシーンと唱へて金錢を乞ふのである。這般の國々の道徳は、聖者なるものは働かぬ者である、働かざる者が高尚であると云ふので、此の根本的觀念は宗教より由來、施與に依て衣食することを社會の定義となして居る。然れば一言にて盡くせば悉く乞食國である。目下日本にて亞細亞聯盟を主張する人士の多くは、數年前まで軍國的高壓手段を背景として支那人をいぢめ、又は支那をいぢめんことを主張せし連中である。這般の連中達がスハ米國の排日と見て、昨日までの言動にケロリとして支那と聯盟せんなどは現金も程こそあれ、否御目度サの極である。然し支那との聯盟なれば可である、然りながら他の亞細亞諸國の聯盟を呼號するに至ては、マカリ間違へば日本の社稷の存亡に關するまでの破目に陥りはせぬかと、一念茲に至ると寢

回教の國土(見込無き亞細亞聯盟。日本が首倡すれば日本の自殺)

回教の國土(見込無き亞細亞聯盟。日本が首倡すれば日本の自殺)

でも覺めても居られぬ感がする。濠洲の前首相ヒューズ氏(世界大戰役後ヴェルサイユ會議の際、日本の提議に首として反對せし人)は日本に對して米濠連衡を宣傳して居つた。さて此際日本が米國の排日に對し一旦の憤怒に驅られ、大亞細主義だの亞細亞聯盟など、呼號すれば、米國を驅りて加奈陀及び濠洲、新西蘭と連衡せしめ、かくて日本の海軍は太平洋の東と北と南との三方より夾撃せらるゝのみか、縱し戰爭が起らずとするとも、世界大戰役後は英吉利本國は植民地の意嚮を窺ふことに是れ腐心するを以て、シンガポールの要塞を益々規模雄大となさしめ、かくて日本は乞食との聯盟の爲めに世界に於ける兩大アングロ・サクソン民族を向フに廻はして干戈を交ふるの已む無きに至らしめんとするに至ては、正しく日本に自殺を觀念せしむると同様である。殊に此の戰爭は海軍と飛行機とに依て裁決せらるゝのであるが、之を行行にはガソリン油即ち石油を以てせざれば一寸の動キもつかぬ。さて日本には天然の石油は大缺乏して居る、然し石油を獲る方法はイクラもある、但し其の方法の出來ざる間に亞細亞聯盟など、呼號せられては出來る事も出來ぬ様になる。要するに日本は亞細亞啓發の運動には盡すべし、否亞細亞啓發は日本の義理である任務である、然し米國の排日に對しての亞細亞聯盟は大に非である。予は亞刺比亞よりの歸途、歐洲經由、米國旅行中に亞細亞聯盟の日本に喧囂せらるゝを知り、

六國相謂秦可伐。機突心私期。蘇張。北天中天驅象去。西漢大漢。二王。奈何豪傑乏。科學。難當秦之富而強。況還食少缺。意氣。博浪擊椎無。張良。吁嗟六國不可與。海島空刺一田橫。我今欲歸。見嫂。且聽徒唱短歌行。短歌行。將歸國。書于舍路(Baiti)旗亭。

と賦し、歸朝するや、之を東洋的豪傑(予の最も反對する)の面々に配附した。

一 人種平等問題(是が日本民族發展の根本)。

一 色白きが故に此地球を我物とするは咄々怪事。

此の地球は太陽系の一天體で、太陽を廻る一個の行星で、而して人なるものが之を其の住所となしたのである。然れば此の地球は君の物でもあり、僕の物でもあり、支那人の物でもあり、日本人の物でもあり、佛蘭西人の物でもあり、亞米利加人の物でもある、即ち世界各國、各人種、各民族の所有物否共有物で、甲一人とか乙一國とか丙一人種とかの專有物にあらざるは判り切つたことである。然るに色の白き一人種、云はゞ白人坊と云ふ一人種が「此の地球は我が所有物なり、汝黒ン坊や赤ン坊や黄ン坊は外に出て行つてしまへ」と威張り切つたるなれば、諸君子には我儘勝手も茲に至つて極れりと呼ばるゝならん。然しながら白人坊は事實に於て此の如き我儘勝手を振舞つて居るのである、咄々怪事である。

元來此の白坊即ち白色人種なる者が黒坊(阿弗利加人、東印度人)、赤坊(馬來人種、亞米利加インヂアン)黄坊(日本人、支那人)を此の地球より疏外する所因は何處に在りや、是は自分等は汝有色人種輩と違ひて色が白いと云ふ自負心よりして出るのである。色が白いと云ふのは何である、太陽の光線の薄く、熱の弱く、而して水蒸氣の少い處に生れ且つ人と爲りたる者は色が白くなり、遞加し遞加して遂に白色人種と成つたのは當然である。曾て英吉利の最南端リサード・ヘッド(「蜥蜴ノ頭」と呼ぶ處に遊んだ、土地の人々は「オンリー、スポット、イン、イングラランド」(「英吉利に於ける唯一の所」と誇つた、其故を

人種平等問題。色白きが故に此地球を我物とするは咄々怪事

人種平等問題。色白きが故に此地球を我物とするは咄々怪事

問ふた、全英吉利の内にて北緯五十度の南に在るは唯だ此の「蜥蜴ノ頭」あるのみと答へた。依て何度なりやと問へば、四十九度四十八分と。ナンダ僅か十二分、まこと申譯文ケ五十度以南に在るので在る。此の如く歐羅巴人なる者は、英吉利人にても、白耳義人にても、和蘭人にても、獨逸人にても、露西亞人にても、スカンチナウ、ア三國人にても、大概は五十度以北、即ち太陽の光線の薄く、熱の弱く、而して水蒸氣の少き處に生れ且つ人と爲りたれば、色が白くなつたので、否色の白くなるのが當然である、是れ天地自然の然らしむる所で、白坊が白坊になりたりとて何も自負することも威張るべきことも無い筈である。西洋人は然なきだに光線の薄く熱の弱く而して水蒸氣の少い處に生れ且つ人と爲りるたが上に、平常より北方人即ち瑞典人の製作せし衣服……日本人の所謂洋服又「服」……即ち身體を堅く締めつけて皮膚を露はさぬ底の衣服を着用するを以て、一たび太陽の光線及熱と水とに曝されると、所謂日に焼けることは吾々日本人又は他の所謂有色人よりも一入激しいのである。曾て汽船パーシア號にて太平洋を航行中(米國行)、眞夏のことゝて、一等船客は甲板上に新に設けられたる海水游泳場にて泳いだ、泳いで日向ボッコし、日向ボッコしては水に飛び入り、水より飛び上つては日向ボッコし、打ち戯ること九日間、すると西洋人の皮膚の色と予の色と全く同じとなつた。日本人は元來西洋人よりも太陽の光線及熱の強く且つ水蒸氣の多い風土に生れ且つ人と爲つたが上に、平常よりフワリ／＼する空氣の流通の良い衣服を着て居るが故に、西洋人の如く太陽の光線及熱の弱く且つ水蒸氣の少い風土に生れ且つ人と爲りたるが上に、平常より身體に堅く締めつける瑞典創作の衣服を着け居る者と比較すると、日に焼ける度が

日本人は遅く、西洋人の方は早くて激しい故である。其時予は水より飛び上り、素裸のまま立ちて裸なる西洋人の面々……多くは米人……に向ひて “What is race problem in America? Why color question in America? A little water and a little heat of sun made all of us same is it not? All turned colored in only nine days. What is race problem in America? Why color question in America?” (亞米利加に於ける人種問題とは何か、有色人種排斥とは何んですか、僅かバカリの水と僅かバカリの太陽の熱とは我々一同を皆同じにしたではありませんか、僅か九日間にて一同有色人種となりました、亞米利加に於ける人種問題とは何か、有色人種排斥とは何ですか)と大聲にて笑ひつ云ふと、西洋人一同もアイ、アングースタンド／＼(解つた／＼)と叫びて大聲に笑つた。

以上の如き自然の道理にて世界に於ける最も白き男女は歐羅巴北部なるスカンチナウ、ア三國……瑞典、那威、丁抹……に居る、即ち太陽の光線及熱の弱い水蒸氣の少い方面の住民である。次が獨逸人、佛蘭西人、英吉利人で、歐羅巴にて色附きたるは南部なる西班牙人、葡萄牙人で、日本人と同じ色の者もある、予の如き前年米國ナイアガラ瀑布にて寫眞屋が西班牙語もて記念に撮影しては如何と呼びかけられ又加奈陀のセント・ローレンス河邊の一村落にても墨西哥人なりと誤られたこともある。要するに北より南へ／＼と順々に光線、熱、水蒸氣が増せば増すほど皮膚の色が増して來たのである。西班牙人、葡萄牙人の次が日本人で、日本人の次が日本より南のフィリッピン人で、フィリッピン人の次がフィリッピンより南

人種平等問題。色白きが故に此地球を我物とするは咄々怪事

人種平等問題。色白きが故に此地球を我物とするは咄々怪事

の印度人で、印度より南の阿弗利加に行くに印度人よりも黒い黒坊が住んで居り、殊に太陽の光線と熱とが猛烈で又蒸發氣が猛烈で降雨量の多大なる阿弗利加の中央方面に行くと、烏よりも黒い人間が住んで居る。知るべし色の濃淡は太陽の光線及熱の強弱と水蒸氣の多少とに是れ因るものなることを。

然れば色白きが故に我は優等人種なり、自分等以外の者は劣等人種なり、彼等は自分等に奉仕する爲めに此の世界に存在する者なり、要するに“European only” (“歐羅巴人に限る”)なりと西洋人の自負し居れるは、全く自然界の道理を解せざるに座するのである。然れば此個の西洋人の自負心即ち白人闘を打破せずんば眞の『世界改造』は大成せられないので、所謂『民族發展』も此の打破が第一手段である。

英國雜誌『聯邦帝國』に濠洲メルボルン市の醫學博士ホルナブルック氏の“The White Australia Fanatic” (“氣の狂へる白色濠洲主義”)と云ふ論文がある、其の要旨は、有色人種の力を待たざれば白人は熱帯に住むことは出来ぬ、否存在することすら出来ぬ、有色人の力を仰がずして白人なるもの如何にして熱帯を經營することを得んや、白人の健康殊に女子の健康は熱帯には堪へ得られぬ、要するに有色人なくしては全濠洲の發展は到底期す可らず、『白色濠洲主義』などは氣の狂へる言なり云々と、醫學と白人の家庭及び經濟との見地よりして縷々立論して居る。是は大正十一年八月、予が阿弗利加へ行く途上、シンガポールにて得たる同雜誌にて讀んだのであるが、さて九月南阿弗利加に着くと、『氣の狂へる白色主義』を此處に見出し、白ン坊の實に——我儘勝手なる振舞に打驚いたのである、即ち南阿弗利加にては頂天立地“European only”と、歐羅巴人即ち白ン坊以外の者は『人』として見ないのである。

南阿弗利加聯邦にては Location (特別區域) と云ふを各市邑に設けて黒人及び東印度人、支那人は此の區域外には住居せしめず。南阿聯邦本部にても日本全帝國の正二倍の面積あり、之に委任統治領及び勢力範圍を合すれば茫々漠々たる大面積である、然るに日本人の在留及び商業を許可せられ居る者とは僅に四人に過ぎぬ。さて南阿の貿易は其の輸出は英本國を除きては日本が第一に位し、次が日本の三に對する米國の二、白耳義の一弱……これも白耳義が南阿に隣接せる阿弗利加の中央にコンゴの大領土を所有する關係よりして……で、其他の歐洲各國への輸出を一括するとも日本の三分の一に及ばぬ。此の如き大顧客たる日本に對し日本人四名の外には在留も商賣も許可せられずとは咄々咄々怪事である。

然るに南阿に在留する極少數の日本人とても優待否『人並』に待遇せられて居るなれば宜しい、否西洋人より穢多扱……日本維新前の……にせられて居ることは、ジョハネスバーク市にて世界大戰役後の祝捷大會に日本も聯合國側なりとて邦人三名の入場するや、場内にて西洋人共は『有色人の日本人奴』とて三人を袋叩きにし、三人は血まで濺ぎ、這々の體にて逃げ返へりたる一事實にても判る。又南阿を旅行したる日本人の中に『有色人の荷物』なりとて鐵道驛の有ゆる赤帽に放つたらかされて顧みられざりしより、日本に歸つて自から鐵道驛の赤帽となり、西洋人が荷物を運ばしむる際其の國籍を問ひ、若し南阿人と答へたれば其の荷物を抛つてやらんとまで憤慨したる者もある。神戸市の一商人にして日本に歸らんとして汽船に上るや、南阿の天地に向ひ咄々と呼びて鹽を振り播きつ自己が所有する丈ケの南阿の銀貨を一切海に投げ捨てると、尻を後に向けて呪ひ去りたるてふ一場の滑稽と云へば滑稽、然し南阿の現情

人種平等問題。南阿に於ける日本人

有色人種排斥の本案本元。『ナタル法』の製造元

事(伯刺西爾サン・バウロ)及び副領事が市内電車の下層に座を占むると、車掌には『此の有色人メ』とて總領事の後首引揃みて下車せしめたる先例がある。然れば若しソナナことをしたるなれば一ツ喧嘩してやらんと思つた故である。市内より近郊まで幾回も往復した、下層に座を占めて居つたが何事も無かつた。やがて黄昏頃となりたれば、夕餉すべしと電車より降り、ツト一ホテルに入り食卓に就くと、女主人來りて予に出て行つて呉れよと云ふ、予には苟くもホテルたるものが其の來客に去れと求むる理由やあると問ふた、女主人は其の亭主を伴ひ來り、夫婦兩人にて他の顧客もあれば出て行つて呉れよと交るゝ懇願した。依て予は此のホテルは出たが、さて他のホテルも之と同様に所謂有色人たる予の來來を拒絶すべく、爰に困つたことには予は大正九年秋以來劇烈なる糖尿病に罹り二十二貫目の大兵も憐し十七貫とまで墮落し、東京駿河臺杏雲堂病院の佐々博士(日本一の斯病醫家)より澱粉質と砂糖分を食用することを禁止せられ、今回の旅行にも東京黄雲堂製のサッカリン錠(砂糖代用)を身に離さず携帯する程なれば、パンなり菓子なりを市中に購ひて晚餐に代ふる能はざることである。依て然るべき飲食店もがなと市中を此處彼處歩みあるき Mrs. Whitelock's Dainty Tea(白鬢夫人の美しい茶)と掲板せる一屋を伺ふと、名詮自稱白鬢の寡婦らしき一老女が其の一子一女と淋氣に夕餉し居りたれば、予は "Dainty tea, dainty supper, Madam, please" (ドーゾおいしいお茶とおいしい夕飯を)と洒落氣味にて呼びつゝ、入りたるに、老女はイエッサと答へ、かくて漸く夕餉にありついた。

三 ベンチ迄も人種別。

夕餉の後、鐵道驛に行きトランスヴァール行の汽車を待合はしたるに未だ二時間はごもあり、待合室も休憩所も飲食店も便所も、さてはベンチに至るまで人種別をなし、又パーには有色人には一切酒類を賣らざる制限なれば侍ち遠はしくして耐へられぬ。かの時の暇潰しには詩にても推敲せんものさ、『歐羅巴人に限る』と大書せる待合室に入り、ボクットより詩韻本を取出し、過日來船中及び旅行中に浮かんたる次の惡詩を推敲した、

一碧水天呼「快哉」。將軍橋上望宏恢。黑風颯忽奔于北。白雨定從三南極(將軍橋 Maruhashi)。當日阿散霜滿頭。濃春却覺冷於秋。生憎喜望峰邊月。重照南阿舊酒樓(九月十月。南半球季節盛春)。

倒影龍堆地作文。一行駝鳥望中分。張眉大漠連西北。月對三平沙不看雪(龍堆 Sand Dunes)。

四 「有色人、汝何者ぞ」。

ザルクスタはトランスヴァールの境内に入り最初の鐵道驛で、海拔五、四二九尺、ダーバン港より北上する鐵道の最高點である。天は此處に明け、折柄春の最中とて桃、李、櫻桃、藤、躑躅咲き亂れ、山は朝霞に包まれて紫に染まり紫の缺くる處、ワッカーストルム、そ夫のライダー・ハッカード(英國文豪)の小説『ジエッス』の女主人公が移住せし邊かなと、予は詩思に驅られて汽車を降り芳草を敷きて餘念なく四方の景色を眺め居ると、後方より突然と引張る者があつた、相當の服装をなせる白人である、予は無禮漢なりと沈黙して居つた、彼は再び引張る、予はノー、コンサーン、ツ、ユー、サー(貴君に何等の關係なし)と故更丁重なる語氣にて云つた。すると彼曰く余は移民局官吏なり、汝は何者ぞや、移民取調所まで來れと云ふ、依て取調所まで同行した、旅券を示すべしと云ふ、予は日本外務省の旅券に横濱在留英國領事の裏書したるものを示した。すると彼は此の如き旅券にては内地を旅行す可らずと云ふ、是より先ダーバンにて我が九州帝國大學工學部長西川工學博士一行三人が日本外務省の旅券にオフィシャル(官命)と特記せるものを出し示したるに、移民取調官吏は日本の官命がナンダと叫びて三人の旅券を投げ返へし内地旅行を竣拒したりとの事實がある、然るに予は南阿聯邦政府内務大臣より此人は日本の一平民なるが特別に助力すべしと記せる紹介書を所持し居たるを以て、やがて之を示したるに、件の官吏は頓に態度を改め、イヤス、サーと連呼したるにぞ、ヤカラ更に一ツ示すべしと聯邦政府鐵道副總裁より此人は英國皇立地學協會名譽員なり、能ふ丈ケの慰樂を與ふべしと各鐵道驛宛の訓令的介绍を示した、すると官吏は先の語氣を全く一變し最と丁重にサンキッ、サーと紹介書を返へした、依て予も英國紳士流にサンキッ、サーと挨拶して去つた。

五 日本人を宿泊せしむる唯一のホテル。

ジョハネスバークは人口三十萬、南阿聯邦第一の都會で、世界第一の黄金産地で、又世界一二の物價の高い所である。有色人種排斥の本案本元。トランスヴァール

有色人種排斥の本案本元。トランスヴァール

ると稱へらる。さて此の世界に於て物價の最と高きシヨハネスパークに於て第一等のホテルなるカールトンこそトランスヴァール全國二萬方里(日本の本州、四國、九州よりも大)の内に於て日本を宿泊せしむる唯一の旅館で、日本人に酒類を賣る唯一の所で、又ホテル附屬の斬髮所が日本人を斬髮して呉れる唯一の所で、要するに有色人排斥の茫々たる大國の内に在りて日本人の寄るべき唯一のオアシスである。沙漠の内に在るオアシスを「沃地」と譯せられたるが、幾百萬年の久しき太陽と風とに曝されたる沙が湧き出づる泉に涵養せられては、草木は彌が上にも彌々善く繁茂し、蒼黒き色さへ呈し、果物殊に瓜類の味の美はしきこと他に比ぶべきにあらず、「沃地」ところか「沃沃沃沃沃地」であり、四圍茫茫赤裸々の沙漠と對比して皮肉と思へるばかりであるが、さて此のカールトンホテルは支配人は生粋の佛蘭西人なり、牛肉料理は巴里風なり、魚料理は英國式なり、備設、バー、土耳其風呂、針風呂の一切は歐米大都會の旅館よりも却て優れるものあるに、そのカールトンが有色人排斥のトランスヴァール國內に在りて日本人の寄るべき唯一のオアシスと云へば「沃沃沃沃沃地」で、亦た頼る皮肉の觀がある、是れ實に一馬鹿亞米利加人様、二馬鹿日本人様、否近頃は歐洲にて一馬鹿日本人様、二馬鹿日本人様、三馬鹿亞米利加人様と呼傲さるゝことゝなつたが、全く一馬鹿二馬鹿の御座である。「一馬鹿二馬鹿様」とは歐洲にて日本の旅客を指して呼ぶことであり、是は大戦役中に日本の旅客が汽車のホイイなり鐵道驛の赤帽なりホテルの給仕人なり昇降機の小童なりに最も寛大にチップを與へたるが故に此く呼ばれたのであるが、惡瀬ごころか、一利巧二利巧様なりよと予は南阿に來りて太悟徹底する所があつたのである。濠洲貿易の開拓者たる神戸市の兼松商店は亦たトランスヴァール貿易の開拓者であるが、當初南阿第一の都會シヨハネスパークに根據を据んとしたるに、此市は所謂有色人排斥の最も激烈なる所で、市内の昇降機は白人のみの使用に供して有色人には之を利用せしめず、さては郵便局にて郵券を得るにも白人は上層、有色人は下層のベースメントと區別する實際實境を體驗し、これはナンでもチップを白人よりも二倍三倍と與ふるに若かず、元來チップなどは少額の金である、これこそチーベスト、エンド、ベスト、最廉最良の方法)なれど、此市に派出せられたる兼松店員には利巧なる思附をした。そこで兼松店員は此市第一等のホテルなるカールトンに入りチップを撒き散らした。さて世界大戦役となり、日本品の南阿への輸出は一ヶ年五十萬圓より五十餘倍して二千六百萬圓となり、又十五萬圓より四百餘

有色人種排斥の本案本元。トランスヴァール

倍して六千萬圓の羊毛とワットル樹皮(單寧即ち柔皮製造用)等を日本に輸入せざる可らざることゝなつた。そこで日本の三井物産會社、三菱商會社、高島屋、ミカド商會、其他の人々は續々と入り來り、いづれもカールトンホテルに宿泊し、寛大なるチップを與へた、かくて此のホテルのみがトランスヴァール全國中にて日本人を宿泊せしめ、日本人を斬髮する唯一のオアシスとなり、否日本人と見ると隔にも置かぬ待遇をする「沃沃沃沃沃地」となつたのである。吾々今頃トランスヴァールを旅行する日本人がカールトンの如き第一流のホテルにて彌が上にも優待せらるゝは、這般先輩の餘蔭なりと眞に感謝すべきものがある。然し這般の先輩は今や悉く引揚げて去り、殘るは兼松商店の竹内氏、ミカド商會の小澤氏、次の便船にて日本に歸らんとする中井氏(兼松商店)にて、此の三氏には、六十の老人よくもコンナ所まで來てくれたられたかと、小澤氏の如きは「日本語にて話する」とが出来るのはコンナ嬉しいこととありませんと感極りて頭を垂れたる時は、予は限り無き同情の感に打たれた。予は此所に日本人としては三氏が四圍有色人排斥の間に孤軍健闘せらるゝことを感謝し、亦た個人としては滞在中に何くれとなく歡待せられたることを深く感謝する。さて予は一馬鹿二馬鹿様然としてカールトンに入ると、ホイイよりドアー・ホイイに至るまで「イニッサー」の呼び續けで、又物價はケーブ官憲に依り世界第一と公表せられながら一泊、食附二十二志半……當時我が十一圓、東京出發の三日、奈良市の奈良ホテルに宿泊したるが風呂附室料七圓、食事別なるを以てカールトンの方が廉なり、日本の宿料の世界稀有なること知るべし……で、清らかな風呂に一浴したる後、食堂に入れば、給仕人は透かす來りて案内し、歐洲北海の鯨と蘇格蘭の鮭とのオールド・グールに舌打すれば、前日來各所にて受けたる不快事も夢の如く掻き消えた。さて餐後、二層樓の屋内庭園に入れば、季節花の眞盛りとて紅白黄紫咲き亂れ、所謂「黄金都」の佳麗は綺羅を競ふ邊、スパークリング・三鞭酒を酌みつ音楽を聴く、「Te Seine」(清音)である、セインは巴里の若葉青葉の下を流るゝ水である、これを巴里にあらで十二年振に南阿弗利加に聴くは何たる縁であるうぞ、折柄の春雨、得も云へぬ風情なれば、畫端書に惡詩を認めて國分青屋先生の叱正を請はんと、バーのホイイに投函を命じたるに、イニッサー、十二年前一曲琴。不堪重也聽清音。東風九月南阿夕。寄與春寒共淺斟(予初游于南阿。在二十年前)。輕衫却不怕風塵。十月南阿柳色新。勸君更盡三鞭酒。西出陽關逢三故人。

有色人種排斥の本案本元(排日問題の祖流)

六 排日問題の祖流。

凡そ人種問題に就ては南阿ほど世界に於て六ヶ敷又込入りたる所とてはない。黒坊にカッファー、ゾール、セスト、カラング(以上パンツール民族)、ホッテントット、ブッシュマン等の全く容貌言語を相違せるものがある。所謂有色人の内にも小賣商、市街地所有、甘蔗及び茶の栽培にては白人の上に出づる東印度人がある。又白人は和蘭人英吉利人と二大別し、和蘭人は元來喜望峯、ナタル、オレンジ共和國、トランスヴァール共和國を建立したる者として動もすれば輒ち英國より離れて獨立を回復せんとし、英吉利も亦た這般地方の征服者として鼻意氣荒く、かくて南阿聯邦全體に涉り七歳以下の兒童一〇〇中に和蘭語を使用する者四八・六一、英語二七・七二、蘭英兩語二三・六七の割合で、地方小學校の兒童は蘭語六九・九二、英語一〇・七六、蘭英兩語一九・三二の割合である、被治者たる和蘭人種が治者たる英人と拮抗して下らざること知るべきである。然りとて蘭英兩種、其他猶太人までを合はすとも白人の數は未だ一百六十萬、而も黒人は六百萬に上らんとするを以て、彼等も亦た代表者を英本國政府に派遣し、白人に對する苦情を訴へて止まず。是に於てか白人も亦た自己防禦の策に出で、ジ・ハネスバークに於ける大正十一年一月七日より三月七日に至る七十日間の大暴動となり、暴動は革命となり、革命は交戦となり、革命の徒は航空砲を以て政府軍の飛行機二個までも打落したるてふ世界初めての絶大ストライキを誘起したのである。戦死者は聯邦政府秘して發表せざるを以て之を知るに由なきも、予は此の戦場を巡探の際、自動車車掌(猶太人)には此處が革命軍の大本營の在りし處なり、彼處は政府軍が砲壘を築きて機關砲を發した

る處なりと指點するまゝ、革命軍の死者五百人にも及びたるならんと問ふと、車掌は仲々どうして五百人など云ふ少數ではないと答へた。以上の如き實にノ、複雑極はまれる人種問題の存するあつて、これが所謂有色人排斥問題となり、所謂ナタル法となり、而して濠洲之を習ひ、加奈陀之を學び、米國之を祖述し、遂に日本人排斥に波及したのである。然れば苟くも米國、加奈陀、濠洲に於ける日本人排斥問題を考究せんとするには先づ其の祖流を究めざる可らず、濠洲、加奈陀、米國は末流である、末流を淨めんとするには先づ以て汚物を下し來る祖流を淨めずんば萬事休矣、而して祖流は實に南阿に在るのである。

七 人種平等問題の考究には南阿が第一。

日本民族の根本的大問題は人種平等問題に在る、更に又白色人種以外なる世界の各人種各民族を無差別ならしめ平等ならしめ、依て以て世界に蟠屈する白人閥を打破すること日本民族の終世的事業となさざる可らず、而も此の人類六千年來の大事業をば吾人現代の日本人が果して成就したりとせば、咄々古往今來豈に復た此の如きの大痛快の事かあらんや、否其の人類に對する大功德は眞の意味に於て劃世的である。然るに其の豫備行動として人種平等問題を考究し以て之を解釋するには、主として南阿に於ける人種問題を考究し且つ解釋せざる可らず、南阿の人種問題を眼中に措かずして而して人種平等問題を解決せんとするは抑も木に縁りて魚を求むると同一である、是れ最も吾人の留意せざる可らざる所。

八 國際的眼光を南轉すべし。

歐洲大戦役の前までは日本將た世界の國際的關係の中心は英國であつた。戦後に於ても英國は一中心

有色人種排斥の本案本元(人種平等問題の考究には南阿が第一)

有色人種排斥の本家本元(國際的眼光を南轉すべし)

たるには相違ない、然し中心は米國に移動した、加之英國は今日となつては一單位に非ずして、加奈陀、濠洲、新西蘭、南阿と云ふ四個單位を合はしたる五個單位となり、誰も知れる如くヴェルサイユ平和會議に於ても是等の英國植民地は本國と同様の資格、否本國と同一單位にて列席した。爾來是等の植民地は愈々各自の單位を發揮し、英本國も亦益々之に重キを置く様となり大戰後に起りたり希土交戦の際、英帝國出兵の件に就ても時の英國首相ロイド・ジョージ氏には時の南阿聯邦首相スマッツ將軍の意見を徴し、其の回答を待つて去就を決したる程である……當時スマッツ將軍は予と會見の數日前に阿弗利加内陸の通信不通の地方より首府ブレトリアに歸り、かくて回答をロイド・ジョージ氏に致し、ロイド・ジョージ氏は之を待ち、尋で首相を辭任した……然れば今日英本國のみを單位として國際的關係の中心と見做すが如きは全くの時代後レで、英吉利なるものは五個單位として觀察せざる可らず。然れば英本國さへ動かせば萬事足れりや矣と思ふは舊式の舊式で、かくては萬事休矣と云ふべきである、而してスマッツ將軍及び其の與黨……「南阿弗利加黨」と呼び、南阿聯邦の政略を二分して其一を有てる有力なるもの……は米國を最も能く理解し、國際問題に就ては米國の理解を待ちて嚮背を決せんとするもので、人種問題……其内に日本人待遇問題をも含む……の如きは米國と共鳴せんことを期するものである。然れば苟くも日本に於て大局に目を注ぐ士は、其の視線を南轉して南阿に向はしめ、南阿を國際的の一中心と見做すことに力めずんば、向後の對英外交、對米外交を談す可らずと思ふ。呉れんも日本に於ける志ある士は南阿の時事に精通せられんことを希望して措かず。

一五 南阿聯邦首府行(南阿聯邦首相との會見)。

南阿聯邦首府ブレトリア市は喜望峯を距る一千餘哩の内陸に在る、英人が和蘭人の建設したるトランスヴァール共和國及びオレンジ共和國を滅して「南阿弗利加聯邦」を創立するや、人種的嫉妬を和らげる爲め聯邦政廳(政府)を元トランスヴァール共和國都ブレトリアに定め、聯邦議會(上下兩院)をケーブ・タウン(英人の最も多き)に置いた、然れば南阿聯邦首相にはブレトリアにて政務を執つて居る。さて予は首相に會見せん爲めブレトリアに行かんとしたるが、元來日本人のブレトリアに入りたる者は極少數であるに、此の極少數者は所謂有色人排斥の爲めに不愉快なる目に會はされぬ者は無いと云つても良い。大阪商船會社ケーブ・タウン出張所の甲氏は汽車にてブレトリアに降りると、自動車も馬車も「歐羅巴人に限る」とて乗せて呉れず、漸くのこととて一自動車に乗つて行つた、すると別の運轉手が「貴様は何故有色人に乗せて行んだ」と喚き罵つて已まないで、甲氏を下車せしめ、氏は已むなく靴を抱へて市街を歩いた。ケーブ・タウン日本領事館の乙書記生も汽車にてブレトリア驛に降りると、「有色人の靴など持つものか」とて誰一人として應ずる者なく、然らば電車に乗らんとしたるが、同市では市の電車規則に依り歐洲人用と有色人用とに區別してあり、經費の關係上未だ有色人用を設けざるを以て、一切有色人に乗せしめない、是も甲氏の如く靴を抱へて市街を歩くの已むを得ざる目に會つた。日本の某省官吏の一行はジョハネスバーグよりブレトリア行の地方汽車に搭するや、有色人用即ち黒ン坊の客車に移れと云はれて、憤然として途中より下車したり云ふことである。神戸市の某商店員はジョハネスバーグとブレトリアとの半途に在る「ハーフ・ウェー・ハウス」即ち「半道屋」と云ふ休憩所にて酒を命じ、東印度人のボーイが酒盃を運んで來ると、傍に居た一西洋人が「何故有色人に酒を賣るか」とおセツカイにも叱り飛ばしたこともある。此く日本人が

南阿聯邦首相との會見

種々不快なる目に會ひたる事實を知り居られたと見え、ケープ・タウンの今井領事(予と米國華盛頓府ボトマック河の級釣の同好者)は、予のダーバンに着く前豫め書を寄せて、プレトリアに行くならば汽車に依らず自動車にてせらるべしと親切に教へられた。然らばと予はジョハネスバーグより遠く自動車を驅つてプレトリアに入り、南阿聯邦政廳の正門の玄關に横着にし、秘書官室に入り、萬年筆もて名刺に「カタル」と肩書し首相スマツツ將軍へと取次を乞ふた。戸を開くと、年齢五十ばかり、黒白相半ばせる頭髪の偉丈夫が徐るに起ちて予を迎へた、是ぞヴェルサイユ平和會議の際米國前大統領ウィルソン氏に向ひ秘かに Reparation(賠償)・Mandatory(委任統治)の二字を暗示したるてふ世界的大立物のスマツツ將軍其人である。「日本の近況如何」、これが予の座に就くや將軍の口より出でた第一語である。予は日本の社會は正しく年若き人に移つた、彼等は近代の思想を能く了解し、平和、共存、博愛を唱へ、偏狹なる愛國心乃至侵略主義は刻々に其力を失ひつゝあると答へた。將軍は、それは實に善き事である、シテ日本は陸軍を縮小したりと聞けるが果して事實なりやと問はれた、予は其の事實を答へた。すると將軍には支那は遂に治まり得るものなりやと問はれた。予は、支那にて政權を執れる老人連は自己あるを知つて國家在るを知らず、支那の禍は全く這般の老人連に在る、然るに年若き人々は日本の年若き人々と同じく、世界の大局に通じ、新しき思想に觸れ、能く國家と社會とを理解して居る、政權にして這般の人々に移らんか、支那は遂に治まるべしと答へた。それより予は南阿に於ける有色人の侮蔑的待遇の日本人に波及せることを繰説し、以て將軍の反省を促した。談終ると、將軍には自から起ちて露臺に案内し山河を指點して懇ろに説明せられ、やがて辭し去らんとするや、寫眞に姓名を署して渡された。

次でトランスヴァール亡國の英雄漢クルーゲルの故宅を訪ふた、簡素で平明で、宛如たる乃木式である、次で其の墓碑を弔ひ、其の記念公園に大銅像を仰ぎ見、記念にまでと石を拾ひて日本に携へ去つた。それより此處彼處と尋ねに尋ねて夫の英國文豪ライダー・ハッカドの小説「ジエス」の女主人公ジエスの故宅を探り當てた、附近の斬髮屋主人が教へて呉れた、此の斬髮屋主人に依ると女主人公の一人は今に生存し居れりと云ふ、年齢は何歳位かと問ひ返へすと、予の面貌を眺めつゝ、「貴君と同じ位なり」と答へた、然らば是はジエスにあらで必定其の妹のベツシーなるべしと思つた。「ジエス」は西洋の『小五金五郎』である、ジエスは姉で、妹のベツシーと相共にニール大尉と戀に落ち、而も

ジエスは亡き母の遺命と一人の妹への義理とに絡り、婚約を妹のベツシーに譲り、再び情郎ニールの顔を見まじと、避けてプレトリアに向け去つた。折柄トランスヴァールの獨立を謀る和蘭種の軍兵は英人をプレトリアに圍み、ジエスも亦た長圍の中に陥れりと聞くなり、ニール大尉は萬死を冒して圍を突き入り、ジエスを救ひ出した。ジエスの舊情は復た燃えて火を煽つたが亡き母と妹とに對して忍ぶ可らざるを忍ぶ處まこと讀む者をして熱殺して冷殺して汗せしむる。

「視察」と云へば歐米と思ひ、山と云へばアルプス(世界に於ける第十位の山脈)と云ひ、瀧と云へばナイアガラ(同第三位の瀧)と稱へ、風景と云へば瑞西(南智利より亞爾然丁への境上なる氷河、湖、山の風景は瑞西以上なりとは旅客の公評)と答へ、歐洲外交の伏魔殿と云へば巴爾幹(巴爾幹列國が歐洲外交の伏魔殿なりしは世界大戰役の前のことで、昔々大昔のこと、今は亞刺比亞系に移動)と呑込み、排日と云へば米國(南阿に於ける排亞細亞人の激烈なる米國など比較すべきにあらず、而も之が排日の祖流)と早合點す。此の如き實際にては國民外交は能く何の日か成就すべきぞ

シエスの故宅は鐵道驛の前より右に折れ左側十四軒目の角に蕙纒へるさ、やかな下宿屋が是であつた。時に九月の末のこと、芳草萋々、桃花亂開、折柄の花曇り、飛ぶ燕さへ色づいて見えければ、當時を思ひ詫び去るに忍びず、記念とまでに其處の不忘草を憐れ一本持ち歸りつゝ、倫敦辭婚心尙仲。避り郎還會亂離中。桃花九月南阿夕。想見嬌羞上頰紅。王孫消息轉纏綿。九月萋萋翠翠接天。別樣憐他不忘草。花開落花卅餘年。姉後妹前芳草肥。妙婿相伴女郎歸。冷紅妖翠春狼藉。憐殺背花貞燕飛。

南阿聯邦首府行

神靈金書可蘭教。爲殺死者眞報效。戎馬之間繼東南。日夕五度拜宗廟。殘雪高低點亂峰。險隘恰好安吾砲。俯視大漠一千里。驕陽炙沙沙欲燦。白奴畏險又畏熱。甘萬征人盡不肖。況還我領一千機關銃。八萬健兒皆獅豹。統此獅豹一大將誰。亞拉之子亞伯帝兒。呼嗟亞拉之子須憤發。再造世界在是時。君不見大漠千里飛可渡。南陷二翁都無一戍。

里布諾 亞拉Atlatl。亞刺比亞語神。

南阿聯邦首相に寄する書

一六 南阿聯邦首相スマッツ將軍に寄する書(原英文)。

(南大西洋 南緯二九度四五分 西經八度九分に於て)。

南阿弗利加聯邦首相ジェー・シー・スマッツ將軍閣下、過般紹介も無く豫約も無く、突如聯邦政廳に閣下を訪ふや、閣下恰も阿弗利加の内陸に三週間有餘の巡回を了へて歸廳せられ、政務の多端なること新聞紙の報道に依るも之を測り知り得、然るに直ちに引見せられ、日本及び支那の現狀を問はれ、且つ卑見に對して親しく教を賜はる、予の光榮何物か之に過ぎんや。當時閣下に約するに、南大西洋の航行中、閑時日あるを以て、其際予が言の足らざる所を書送すべきことを以てす、是れ茲に此書を致す所因なり、然りと雖も一日本人として外國の禮に嫻はず、外國の文に嫻はず、希くは閣下が洪大の度量を以て予が無禮と不文とを寛容せられんことを。

閣下、勤儉質實なる和蘭人の血を其の父母より享け、家系中に夫の慷慨義に就けるユグノー教徒(西曆一千六百年後期に羅馬舊教徒に抗拒したる佛蘭西の新教徒)の血を交へ、少壯の時、公明にして而もブラクチカルなる和蘭學徒の教育をステレンボッシュに受け、次で英國劍橋大學に其の學業を卒る、閣下が中正、義を好み、而も大局に通ずるは其故あるなり、而して英國皇帝陛下の忠良なる臣民としては、命を奉じて劍に仗り、最近の世界大戰役に阿弗利加の獨逸領を征服し、戦終るやヴェルサイユ平和會議に大使として列席し、日本人は當時閣下の言動の無偏頗なりしことを今に艶説して措かず、歐洲大陸にては閣下を以て國際聯盟の事實上の草案者なりと評判し、又在來の Indemnity(償金)、Cession(土地割讓)に代ふるに Reparation(賠償)、Mandatory(委任統治)なる公明にして而もブラクチカルなる二語を發意せら

れたりと宣傳し、又米國にては世界の政治家中に前大統領ウィルソン氏と意氣投合せる者は獨りスマッツあるのみと噂せらる、閣下の中正、義を好むの世界より認識せらるること此の如し、即ち此の如き士君子に對し頃日の所懐を述べんとするは已むことを得ざるものあるに出づ、閣下希くは予が赤裸々にして矯飾なき言辭を聽かれんことを。

予は十二年目にして再び南阿に來れり、前遊の時は“European only”(「歐羅巴人に限る」)など云ふ辭は何處にも認めざりき、然るに今回來るや、天地皆な“European only”なるに喫驚したり。予は偶然にも又幸にも喜望峰在留の日本領事とはポトマック河(米國華盛頓府の)の魚捕の同好者にして、領事は予の趣味を能く理解し居り、予が南阿著船の以前に予の爲めに十二分の手續を了し居たるを以て、予は直ちに上陸を許可せられ、旅行を許可せられ、又聯邦政府鐵道副總裁は予が英國皇立地學協會名譽員なることを聞知し特別の訓令を鐵道各驛に與へられたるを以て、予は一二瑣細の不快事……ピーターマリッツバール市のホテルにて食事することを拒絶せられしが如き……を除きては、氣樂に又愉快に旅行し得たり。然れども予と同船の日本人(二等船客)は「禁止移民」として十六磅の保證金を供託して僅かに假入國を許可せられ、又同船せる日本政府の官吏三名は手續を了せざりしを以て内地旅行を斷念したり。旅行すら禁止的なること此の如し、況んや日本人の在留することをや、土地を賃借することをや、商工業に従事することをや、茫漠たる南阿聯邦四十七萬餘方哩(朝鮮を合したる日本の正二倍)、其の委任統治三十萬餘方哩の面積の内に日本人の商業に従事することを許可せられ居るはケーブ・タウン市に三人、

南阿聯邦に相に寄する書

南阿聯邦首相に寄する書

シールズ市に一人、總計四人あるに過ぎず、此内三人は一千九百十年(明治四十二年)南阿聯邦建立以前に渡航せし者、他の一人は聯邦建立以後に渡航したるも、聯邦草創の際未だ亞細亞人移住禁止法の實施せられざりしを以て、官憲より看過せられ、云はゞ御上の御慈悲を以て僅かに從事することを得居るのみ。想ふに日本の英吉利と通商條約を締結してより茲に七十年ならずとす、而して其の領土中に日本人の商業を絶對的に禁止するとは今の世界豈に此の如きの咄々怪事あらんや。要するに“European only”は南阿の標語となり、歐羅巴人以外の者は「人」に非ず、人非人と看做すを如何と見る。

南阿所在歐羅巴人の日本人に對する所のもの以上の如し、而して日本が南阿に對せしもの果して如何。想へ最近の大戦役の間、獨逸巡洋艦エムデンの先づ跳梁し、次で其の假裝巡洋艦ヴォルフは西班牙よりの捕獲船イゴツメンディを率ゐて南阿の近海を劫掠し、英國兵隊輸送船チンダリッスは喜望峰の近海に獨逸の敷設水雷に觸れて轟沈し、折柄英國の軍艦と云ふ軍艦は歐洲方面に引揚げ去りて隻影を止めず、風聲鶴唳、夜の目も結ぶを得ざりし秋、子々依る無きの喜望峰領一千二百哩、ナタル三百六十哩の海岸線を克く防禦したるものは抑も何國の軍艦なりしぞ。シーシェル九十島の住民、モーリシアス三十八萬の生靈が日夕に獨逸軍艦の來襲に怖え怯ぢたる際、サイモンズ・タウン(喜望峰軍港)とポート・ルイス(英領モーリシアス首府)とマヘ(英國保護國シーシェル諸島の中心)との間を往來し、東西南北經緯度各々四十度に跨がる大洋面を克く防禦したる者は抑も何國の軍艦なりしぞ。是れ日本の對馬、新高兩艦なりしことは南阿一百六十萬の歐羅巴人諸君子の悉く記憶せらるゝ所ならん。予當時南阿に在らず、偶々岩石採掘

の爲め加奈陀のセント・ローレンス河畔に在り、時に加奈陀聯邦首相には「加奈陀人は現下日本人の庇陰を被り居れり」と其の議會に聲明す、セント・ローレンス附近の人々は其故を解せず、予爲めに説明して曰く加奈陀の太平洋岸五百五十哩、軍艦としてはレインボーあるのみ、舊式の木艦三千四百噸、要するに一個の古き艦に過ぎず、之を看破したる獨逸には貿易破壊艦ドレスデン、ニールンブルヒ、一時間二十八哩速力の二隻を疾驅し來り、鹽一個しかの用意無き加奈陀の太平洋岸を屠らんとせし刹那、之れを墨西哥下カリフォルニアの一灣に封じ込み、防禦無き加奈陀八百萬の諸君子をして今夕此夜枕を高くして能く眠らしめ得るものは、實に日本軍艦淺間、出雲の兩隻なり、貴國(加奈陀)の首相が議會に聲明せし日本の庇陰とは是れなるのみと。蓋し當時の加奈陀の事情は全く南阿の事情と吻合し、而して又濠洲の事情とも能く吻合す。知るべし大英帝國の内に鼎立する三大聯邦……加奈陀、濠洲、南阿……と日本とは此の如き隱密なる關係の存するものなることを。

然し日本のサムライの子として其の父母より教へられたる道德に従ひ、復た自己の行動を自己より吹聴せざるべし、即ち軍事上の事は茲に止め、財政上に就て云はんか、己む可らざるもの有るが故なり。世界大戦役の當初、各國が英蘭銀行より其の預金を引出したる際、一意専心以て英國財政上の信用を擁護せしは何れの國なりしぞ、露西亞の金貨六億圓を浦潮斯德より加奈陀を經由して倫敦に輸送し、而も最後の二億圓を積みて浦潮斯德を抜錨したる日、恰も露國の大革命は勃發し、此の六億圓の金貨こそ英國當時の兌換制度を累卵の危より濟ひ上げたるものなるが、加奈陀への輸送四回、専ら其任に當りた

南阿聯邦首相に寄する書

るは抑も何國の軍艦なりしぞ。米國が當時嚴正中立を守りて歐洲への財的援助を斷絶し、モルガン商會が預て英國に約束せし借款さへも履行せずと聲明せし秋、一億圓の公債を英國に提供したるは抑も何國なりしぞ、一億圓は大金額と云ふべからず、而も此秋に於ける一億圓の提供は其の十倍にも價せしとは今日に於ても英國當事者の言明する所なり。是れ皆な日本が英國多年の交誼に對して聊か報いたる所なり。然し予は繰返して言ふ、日本のサムライの子として其の父母より教へられたる道德に従ひ、此の如き事を日本人自身より吹聴するを好まず、然りと雖も南阿に於ける歐羅巴人の或る紳士は今日に至るも猶ほ當時に於けるが如く「Who paid for you?」「Whence did your pay come from?」(日本人の給金は何處より支拂はれたりや)と恰も『有色人』を備ひて當時南阿の防備に當らしめたるが如き觀念を脱せざるこそ、茲に予を驅りてサムライたるの重要な教訓を忘れしめ……サムライの子は他人に金錢上の助力を致したりと云ふ事を自己より吹聴するを最大の恥辱なりと教へらる……敢て以て世界大戦役の間に於て日本が南阿及び英國の爲めに聊か盡したる行動を述べたる所以なり。

予は遂にサムライたるの教訓を忘る可らず、茲に御互の仇敵たりし獨逸海軍元帥チルビッツ伯(獨逸軍閥の首腦として陸軍のルーデンドルフに對する海軍側の首腦)が戦敗後、其心の深奥より發したる悲壯にして沈痛なる述懐を借り來り、依て以て大戦役間に於ける日本の行動を述ぶることを止むべし、曰く『獨逸の失敗は米國の参戦に因る、然し日本にして局外中立に出でしなれば、英國は米國の参戦の前に於て早く既に獨逸に屈服したりしなり』と、當時に於ける御互の仇敵の言、平和の今日に當りて含味するも亦

た一個の興味ならんか。

是に至て日本人たる予には敢て難を閣下に求むる者にあらず、閣下及び南阿聯邦立法部一百七十五人の諸君子に求むるは極めて簡單明瞭なる一事なり、即ち日本人を『人』として待てと云ふことのみ。米國は日本人を排斥すとして世界に喧傳せらる、然れども苟くも日本外務大臣が署名し日本在留米國領事の裏書したる旅券を具備する日本人に對しては、米國は内地の旅行を許可す、然るに南阿にては許可せざるなり。又米國にては日本人を區別なく『禁止移民』とは認定せず、然るに南阿にては區別なく『禁止移民』と認定す。又米國にては日本人の商工業を公許す、然るに南阿にては一切禁止せり。又米國にては一たび在留を許可せられたる日本人は永久に在留することを許可せらる、然るに南阿にては十六磅の保證金を供託して六箇月乃至一箇年の假住居を特別に許可せられたる日本人……最も寛大なる取計を受けたる者……と雖も引續キ五箇年以上在留することを禁止せられ居るを以て、五年の後には日本に歸らざるを得ず、就中オレンジ州(元オレンジ共和國)にては二箇月以上居住することを禁止せられ居れり。

獨り如上の法律上のみに限らず、社交上に於ても、亦た南阿に於る歐羅巴人が日本人を『人』として待たざる事實は枚擧するに遑めらざるなり。然るに米國に於て予が體驗する所を云はんか、ルイジアナ州は外國人排斥を以て名を知られ、其のニューオーリアンス市にては市民黨を組み伊太利移民を襲殺せしむる歴史を有し、之を義擧として景仰せる大記念碑の市中に聳立するものあるは吾人旅行者の目撃する所なり。さて予はルイジアナの片田舎なる一寒驛より汽車に搭せり、會々一客車に一人の乗客も無きも

南阿聯邦首相に寄する書

南阿聯邦首相に寄する書

のあるを見て喜びて之に入りたり、然るに驛員は "That's not yours" (それは貴君の入るべき所では無い)と連呼して追ひ來れり、予には爰に初めて此の車内に "For Colored" (『有色人用』)の掲板の懸けあるを認め、之を去りて他の客車に入りたるに内に三名の白人乗客あることを認めぬ、南阿に於てブレトリア行の白人用汽車中に日本官吏の一行あるを認むるや、之を去らしめて『有色人用』の客車に轉乗せしめたる事實に對比すれば抑も如何ぞや。

予にして餘りに言ひ過ぎたりとすれば請ふ之を寛恕せられよ。日本人として需むる所は何にも法外なる事にあらず、極めて平易なる事のみ、即ち日本人にして苟くも文明の倫義に依りて言動する以上は、南阿の人々は平正なる常識と善良なる感情とを以て吾人を待たれ、南阿に於ける最も普通なる社交界、商工界より吾人を『有色人』として疎外せられざる一事のみ。

終に臨みて云ふ、閣下希くは予が無禮と不文とを寛容せられんことを。

結末は予が日本人を代表して云ひたる様にて僭越の嫌あれば、誤解を避くる爲め原文を寫す、但し予として云へば休道東西自異文。會心何必在云云。寫來方到天眞處。鳥跡蠻行元不分。

I heartily beg you to forgive or excuse me, if I have said too much.

We Japanese do not seek or want any extraordinary things, but quite plain and common, that is the exercise of decent commonsense and good feeling towards us had we acted in accord with the principle of civilization, and not to elbow us aside as "Coloured" in the most commonplace relations of social, commercial and industrial life of South Africa.

(一七) 日本國民生存の根柢。

日本に於ける乳兒の死亡率は一千人に對し一百五十乃至二百、時には二百五十、即ち生産兒の四分の一にも上る、是を英國佛國など一千人に五六十の死亡率に對しては比較するまでもない、専門家は云ふ、是は衛生設備の不完全、育兒法の不良より由來すと。然しながら母の乳即ち赤ン坊に對する最良の飲料にて育てることは日本は世界稀有で、子守歌の多種多數なることも世界稀有で、特に子供を愛する一點に至ては我等よりも優れりと歐米人の評し合へるのみならず、近年に至り衛生設備は益々進歩し、育兒法も愈々改良の途に向へるに拘らず、乳兒の死亡率は少しも減ぜず、寧ろ増加の傾向あるは、別に大なる原因無かる可らず。大原因とは何ぞや、衣食住、殊に食料の不十分不完全なるが故に先天的に脾弱ひやくじやくなり居り、露骨に云へば健全なる精液……兒を作る元……を作るべき鱗うなぎ(魚介より攝るの外は)を欠き、次に強靱なる骨を作るべき加里を欠き、次に精良なる肉を作るべき蛋白質に欠け居るを以て、日本の赤ン坊なる者は憐レ糞しひんとなつて此世に生れ落つるのである。初メよりして糞なり、苗の秀でずして枯る、者の多きは自然である、子を愛する一點は如何に歐米人に優れりとあつても、歐米人よりも肉神共に脾弱い國民の出づるのは偶然でない、凡そ日本に於て是程配慮すべき問題とはあらじと確信する。君の御馬前にて討死する者を無二の忠臣と稱ふ、此種の封建時代の思想は今に失せず、此種の人物を忠君愛國の士と稱へ居れるこそ、日本人をして予の稱ふ所に向はしめざる所因である、予の稱ふる所と

日本國民生存の根柢

は何ぞ、曰く完全なる衣食住の料を十分に同胞に與ふる事に努力する者、是れ之を眞の忠君愛國の士と稱ふと。然らば此の眞の意味の忠君愛國の功業を果すべき方法は如何、曰く内に於ては理化學に依り完全なる又廉價なる食品を發明する事、在來の食品の營養分を加倍せしむべき方法及び其の調理法を按出する事、氣化法に依り衣食住の原料を増加する事である、又遠くには國民の海外發展……在來『海外發展』と云へば海外に移住する事のみを指せるが、更に大切なるは貿易の新販路、汽船の新航路、水産業の新漁場の發見等……、遠洋漁業を振興せしめ、又近くには滿洲、蒙古、西比利亞の如き我と接壤する大陸地方こそ土地廣く廉く又新しく、地力の充實せるを以て、吾人は精力を此の方面の拓開に集中し、かくて此處を原料の大生産地となし、一方日本の教育を數學理化學に傾注し、大陸よりの原料を集約的に加工し、廉く早く製造し、之を世界人口の半數を有ち而も近隣に在る亞細亞に向て溢せしむるに在る、即ち接壤せる大陸を生産地、日本を加工地、亞細亞を市場とする三角法、即ち系統的方法が是である。

以上の方法に依るの外には日本人が依て以て生存し得べき途、健全なる子孫を儲け得べき途とは無いつと思ふ、即ち此の途の露拂までに聊か此の小冊子を著し、全國の公共團體に寄贈すべき所以である。

最近の調査に依れば日本國民一人の生計費は一月約三十五圓六十錢である、而して國民一人の収入は一ヶ年七十一圓に過ぎぬ、即ち一ヶ年十二月中、二月の生計費しか無い、残り十月は生活し得られぬ算當である。此の如き實際にて『克く忠に克く孝に』たらしめんとするも得べきものでない。

世界の各國は何れも夫れく天恵に富めるを以て日本と比較にならぬが、茲に同一なるは獨り希臘が

ある、即ち共に國土中、可住地は漸く二割で、共に古い國即ち地力の竭き果たる國柄で、然らばとて工業の原料の皆無なる、能く似て居る故である。然れば希臘滯在中の見聞を述べて此書を終らんとす。

希臘は大正二年三月、皇帝ゲオルギス第一世を暗殺し、皇太子コンスタンチネの帝位に即くや、同六年六月之を國外に逐ひ、同九年十二月、之を迎へて再び皇帝に戴き、同十一年九月再び國外に逐ひ、其の皇子がゲオルギス第二世として位に即くや、同十二年十二月之を國外に逐ひ、十三年四月共和國となつたのである。皇帝なり政體なり變化すること此の如きである、況んや内閣に於てなや。大正十三年の正月元旦こそ年の始なれば『マー』として一日交々は無事に過し、翌二日より政變が始まり、ゴナタス内閣は倒れ……是れとても三十八晝夜の壽命……ヴェネロスの内閣となり、正一ヶ月の後、二月初旬に交迭し、ソレからソレへと内閣の變はること宛がら猫の目の如く、殊に四月十三日國民投票に依り王國を廢止し共和國となつた際の實況を目撃し、希臘と云ふ古代の世界に燦然たりし國民が能くも此くまでに變つたものだと思つた……『雅典にて嘘をつかない者は一人も無い』と云ふ語すらある……然し希臘が何故に此の如くなつたと云ふと、山ダラケの地勢で、衣食の資料に缺乏し、ソップ殻の如き國土であるが故に、同國は自然的に行詰となり、國民全體が食へなくなつて、國民的不安に居る故である。太古には此の如き國土にても物資は豊富であつたが、古い國土なるが故に地力は竭きたる折柄、近世の大工業時代となつては頼て以て立つべき天然物は無いのである。然れば上から下まで嘘で固めざれば食へない、朝の友は夕の仇となる、職手爲雪覆手雨。紛々輕薄何須數と云ふが、輕薄ならざるを得ない。十三日夜、彌々共和政體が多難だと云ふことが判ると、勤王黨の頑強者として知られたる者は、翌日直ちに共和黨の首相と會見し握手したるを聞き、人も食へ無くなつては忠も孝も無いと思つた。ソップ殻の如き國の政治家は此の如くならざるを得ない、豈に希臘のみならんや、希臘のみならんや。

希臘獨立の戦役より正に一百年、當時若干の志士が義を草間に擧げて本國土耳其の虐政に抵抗すと聞くと、ハンナチ劍を把り身を義徒の群に投じたる英國の詩豪バイロンが一代の俠骨を此處に埋めたる一百年祥日は、大正十三年四月十六日の夕、皎々たる満月の下に國都雅典のアクロポリス高丘に一大音樂會を催し、嘲曉聲裡にバイロンの詩句を朗唱せんとて、其相應しき記念祭を開かんものとして、希臘朝野の人士の發起に依り、英國より代表者を招待し、件

日本國民生存の根柢(日本と希臘)

日本國民生存の根柢(日本と希臘)

の代表者としてアンル卿、サー・ロット氏及び夫人は雅典に到着し、希臘政府は國賓として待ち、予の宿泊せるブチー・パレー・ホテルの而も隣室に來り投ぜられ、食事も亦た予の常例とせるグラント・ブレターヌ・ホテルにてせらるゝとなつた。そこで予は思つた、こんな處に起臥してバカリ居つては、明日の大政變……王國を廢し共和制を取るてふ希臘建國以來の革命……に對する民情などが判る筈は無い。學生の意氣を知らんと欲すれば東京帝國大學側の一白舎が早稻田大學前の高田牧舎に限る、勞働社會の意氣を知らんと欲すれば神田橋側の公衆食堂に限る。イテ其の方面に向はんものと、ホテルを出ると、町の何れの隅々に至るまで『デモクラチアの叫び』、『デモクラチアの理想』、『デモクラチアの實行』など、大字中字小字、赤い紙、黄い紙、青い紙、白い紙、大形中形小形の紙、或は赤く印刷し、或は畫と云ふことにて、明日の國民的總投票に共和制を可とする者は白紙にネーと印刷せるものを投票し、否とする者(即ち王政の存續を欲する者)は黄色の紙にオヒー(否)と印刷せるものを投票すべき制定であるから、群衆がネーと連呼するは、即ち共和制を勢付るので、又デモクラチア、デモクラチアでふ數へ來れば十一種のボスターも、共和制の氣焔を煽らんとするものである。かくて希臘國都雅典の天地は、王政顛覆、共和制執行の空氣を以て充滿されて居る。一白舎が高田牧舎かと捜し歩く中に、中央郵便局の裏通に『デモステネス・マウロウ』と掲板せる小料理屋がある。マウロウは黒である、黒デモステネスとは面白い、如何な大雄辯家や内に在ると、掲板に引き付けられて入ると、亭主の黒デモステネスてふは歴史畫に見るデモステネスより着は低いが身體は頑丈な男である、予がデモステネス、オラツール(雄辯家デモステネス)と呼び懸けると、亭主は佛語にてメルシ(感謝す)と呼びて大に笑つた。二群の客も大に笑つた。客は各々明日の政變を相談しつゝあることは其内の單語にて判るが、然し單語しか解せざる予には大體の意味は全く判らぬ。そこで前に座し居たる五十前後の男に向ひ、單語にて明日よりは共和政治かと問ふと、其男は否々、そんなことが今から判るものと答ふ。依て君はネーかオヒーかと問ふと、オヒー(共和否認)であると答へた。明れば四月十三日日曜日である、午前九時、日本公使館の見田書記官が來り訪はれ、市内を案内すべしとのことである。先づ雅典の最高點リカベトス即ち江戸見坂の下なる第二十九號投票場に到ると、投票者は早く既に群を成して

集ひ、場の入口には陸軍大尉一名と下士二名とが一々出入の人を點驗して居る。階前に二十名バカリの青年が一隊に整列して各々『ネー』の徽章を付けて居る、苟くも青年たる者は皆な共和制を可とするものであると予に向つて語つた。聞けば青年と都會の住民は共和派で、老人と田舎漢とが王黨であるとのことである。第三十一號投票場に行くと、群衆を離れて小手川豊次郎君然たる一人が自分の着よりも高きステッキに仗り昂然として天を睨んで居る、其の風采が異様なるまゝ予は近づきて君はネーかオヒーかと問ふと、無論オヒーであると答へた。外務省の前なる一印刷所に黄色の大なる紙にオヒーと印刷したるものが二枚貼つてあるが、二枚共にビリビリに裂かれてあつた。かゝる間に海軍將校、水兵、陸兵は各々隊を成して投票に行く。陸兵と云ふ陸兵は悉くネーの徽章を付けて居る故に其の共和黨であることは判つて居るが、海軍は何黨なるや判らなかつた。後より聞くと、海軍工廠員の投票は可(共和黨)約三千、否(王黨)五百で、旗艦アヴエロフ乗組將卒は可七百五十、否五十で、驅逐艦ヴェーロス及びヘルカモス乗組將卒は一人も残らず可に投票したりと。宜べなり海軍大臣ハゲクリャコス氏は當夕第一に公演し、唯今までの結果に依れば希臘國民の七割五分は共和制に投票した、而して吾々海軍軍人は一齊に共和制に投票したりと、得意満面であつたことを。聞けば此國にては苟くも政府にして變化すれば、文官は固より、陸海軍兵卒より尙正、大學教授に至るまで變化するを例とする、而して今日の政府はヴェニセロス派即ち共和黨なれば、隨て陸海軍人は大概共和制に投票したのであると。然らば雅典の市内は、約十五分間毎に、陸海軍將校水兵を滿載したる貨物自動車が共和黨を連呼して、巷間を疾驅し、群衆は喝采を之に浴びせ、軍樂隊は、固に奏樂しては群衆に媚び、かくとも知らぬ春の日の長閑々々とアチカカ山の山々に没する際、即ち日没を期して投票は形の如くに終つたのである。

夕刻より通信省の露臺にては萬燭の電燈にて時々刻々に投票の結果を示す。國都雅典は可票六三、三五九、否票二一、七九一、即ち可三否一の割合で、雅典の門口たるピリアス及びファレロン即ち橫濱神奈川が可三四、三八三、否九、三三三、これも可三否一の割合で、全國第二の都會たるサロニカ即ち大阪は可七、二四〇、否一、七二九であつた。クレテ島即ち九州は流石にヴェニセロスの故郷のこと、て可は九割を占めた。かくて大勢は共和制ではあるが、田舎となると、アチカカ平原即ち雅典の近郊とも云ふべき武蔵野、練馬より井ノ頭辨天の邊の村落にては共和制三、〇七五、

日本國民生存の根柢(日本と希臘)

日本國民生存の根柢(日本と希臘)

王政四、七一五を示し、又武侯を以て古に鳴れる南のスマルタにては共和制四八二、王政一、〇四六を示し、北のテ
 スにても共和制二四二、王政五〇五を示し、スマルタとテメスとが南北呼應して雅典に拮抗する様は、今も昔も矢
 野蘭溪先生の經國美談を目前に讀むが如くである。
 かくては油断ならじと、コンスタチンツァン廣場に群れる萬衆は手に汗を握る折柄、通信省の萬燭は西部マセドニ
 アの結果を示した。雷の如き喝采は萬衆より起つた。西部マセドニアは王黨の根柢地と認められて居つた方面であ
 る、然るに共和制四〇六、王制三〇と示したからである。是に至て大事定まり矣と、治安大臣パンガロス將軍(大正
 十五年四月大統領に自立、八月返はる)は希臘國土を荒したるグルツクスアルヒ王家も倒れたりと公演し、陸軍大臣コン
 テウリオチス將軍は早くも「共和國の市民諸君子よ」と口頭で喚び懸けて公演した。かくて内閣議長即ち首相ババナス
 マツシオウ氏は覺書を發表した。其の末文に曰く、共和政體はヘリメ(希臘)國民の純潔無垢なる意思なりと。
 ア、以上が一昨々日には君主を逐ひ、一昨日には君主を迎へ、昨日には君主を逐ひ、而して今日には共和政體を擇
 びたる希臘國民の實際實境である。是は予が實際にノサリと歩いては目撃したる當日當夜の實境なれば、後世の
 歴史家が之を以て資料とせられても大過なかるべしと信ず。忘れざる内に記し置かんと、ホテルに歸り直ちに筆を把
 り、此の一篇を走り書して故國に送附することとした。
 かゝる間にもバイロン祭の人氣は盛んなもので、新聞紙でも街頭に賣る書でも繪端書でも活動寫真でもバイロン
 流屬の坡老。功名復不盡三周郎の眞面目を悟り得、即ち此句をバイロン祭に朗唱したる後、希臘を去らんと思ふ。
 希臘をして此極に至らしめたるは國民的不安である。佛者も云ふ三界不安なれば成佛し得ずと、日本
 國民は衣食住の三界に不安である、如何ぞ大文明を成就し得べけんや。衣食住の不安を去らしめんとす
 るに、國民をして知られざる國々を拓開……公明正大なる方法に依り……せしむるに在る、而して其
 の第一の方法は知られざる國々の事情を知るに在る、即ち参考の萬一に供せんものと、是れ此書ある
 所以。

知られざる國々 終。

氣化事業

氣化事業 (Acclimatization) ハ異風土ノ動植物ヲ新
 タナル環境ニ馴致シ、以テ衣食住ノ資料ヲ増殖シ
 以テ人類ノ生活ヲ裨補スルヲ目的トナス。
 日本ハ此事業ヲ遂行スルニ世界第一ニ順適セリ。
 一 陸 平面上 日本ノ地形ハ細長ク、半寒帯
 ヨリシテ熱帯ニ入レリ、即チ世界到ル處ヨリノ
 新ナル陸産物ヲ移植シテ漸ク氣化シ得ベキ事。
 二 陸 立方上 日本ノ地形ハ幅狭ク、海岸ヨ
 リ一萬數千尺ニ達セリ、即チ世界到ル處ヨリノ
 新ナル陸産物ヲ移植シテ漸ク氣化シ得ベキ事。
 三 水 平面上 日本ニハ北極ヨリノ寒流モ赤
 道ヨリノ暖流モ流駛ス、即チ世界到ル處ヨリノ
 新ナル水産物ヲ移植シテ漸ク氣化シ得ベキ事。
 四 水 深度上 日本ノ四周ノ海深ハ零尺ヨリ
 地球ノ最深所ニ達ス、即チ世界到ル處ヨリノ
 新ナル水産物ヲ移植シテ漸ク氣化シ得ベキ事。
 右氣化事業ヲ實行シツ、アルヲ以テ斯道ニ關スル
 御高教ヲ何卒奉仰候。

東京市外 代代木四七六番地 志賀方(電話 四谷九〇四番) 地理調査會假事務所

外國事情 質問

左ノ依頼ニ應ズ
 依頼者ハ紹介又ハ報酬、手数料、郵便返送料、
 其他一切ノ金品ヲ要セズ。
 依頼者ハ本會ヘ來臨セラル、トモ又ハ書面ヲ以
 テセラル、トモ何レニテモ宜シ。
 但シ來臨セラル、方ハ電話又ハ書面ヲ以テ本
 會主任ノ在否ヲ問合アリタシ。
 各外國事項ノ調査。
 各外國ヘノ旅行案内。
 各外國行ニ關スル心得。
 各外國行ニ關スル参考圖書ノ質問。
 在外日本人事業ノ調査。
 在外日本ノ宿所及職業調。
 旅券下附ニ關スル質問。
 旅券下附ノ成否鑑定。
 各外國行郵便物ノ宛名ノ認。
 但シ本會ハ右ノ圖書ヲ發行セズ。

明治四十四年五月個人の創立せる私的會
 隨て前後とも會費を徴せず寄附を仰ぐ
 都合に依り毎年七八、九の三個月は休會

索引 (五十音順)

ア行	アッシウリア帝國……………三三 アスンシオン市……………三三 アバダン(英國波斯石油會社工場)……………三三 アバデル・ラザク(波斯探検家)の大法螺……………三三 阿弗利加の沙漠横断……………三三 「亞刺比亞河」(シニアットル・エル・アラブ)……………三三 亞刺比亞の志士……………三三 亞刺比亞人の性質……………三三 亞刺比亞の宗敎……………三三 アンデス山頂の敎訓……………三三 アントファガスタ市(智利)……………三三 英吉利の國際的變化……………三三 イアン・サウド(ネジド國王)……………三三 イラク國……………三三 イラクの石油……………三三 印度……………三三 ウルグアイの婦人運動……………三三 グオルフ(獨逸巡洋艦)……………三三 エウフラト河……………三三 エムテン(獨逸巡洋艦)……………三三 オーストリア……………三三 オーストリア(墨西哥大統領)……………三三	カ行	加州に代はるべき地……………三三 回教の國土……………三三 樺太の石油……………三三 氣化法……………三三 「氣の狂へる白色濠洲主義」……………三三 玖馬……………三三 希臘の國情……………三三 クリチバ市(伯刺西爾巴拉州)……………三三 ケマル・パシヤ……………三三 ケラク國……………三三 ケラク國王の謁見……………三三 元史の研究……………三三	サ行	沙漠の横断……………三三 サンタ・カタリーナ州……………三三 サン・パウロ州の珈琲……………三三 最新の巴爾幹……………三三 シリヤ人の獨立運動……………三三 真の意味の忠君愛國……………三三 「ジュエッス」(小説)……………三三 ジョハネスバーク市……………三三 人口の増分(日本の)……………三三 世界的關係……………三三 石油政策(日本の)……………三三	タ行	チアパース湖……………三三 チアリス河……………三三 智利硝石の起因……………三三 智利硝石地方……………三三 中部墨西哥……………三三 テル・アグイ……………三三 デマスグ市……………三三 デグーザンク(石油王)……………三三	ナ行	南阿の有色人排斥……………三三 ニネウ……………三三 日本と希臘……………三三 日本に最も知られざる方面……………三三 日本品の不評判……………三三 乳兒の死亡原因(日本の)……………三三 ネジド國……………三三	マ行	マイダン・イ・ナフテン(石油ノ廣場)……………三三 マスカブト……………三三 マンサニョ……………三三 見込無き亞細亞聯盟……………三三 墨西哥の政變……………三三 メソポタミアに於ける石油爭奪……………三三 モスル油田……………三三 モハメラ國……………三三	ハ行	布哇……………三三 白色人種の由來……………三三 フエニキア人……………三三 ヘシアス國……………三三 北部墨西哥……………三三 バグダード市……………三三 バビロニア……………三三 バルチスタン人……………三三 緬甸(ベルマ)……………三三 物價の順序(世界の都市に於ける)……………三三 マデウイン人……………三三 パラグアイ國……………三三 パラナ州……………三三 ピレスタイン……………三三 ピタル州首府……………三三 ベグの臥如來……………三三 波斯の石油問題……………三三	ワ行	幼童の口想の變化……………三三 ラブラタ河……………三三 リオ・グランデ・ド・スール州……………三三 リサ汗(波斯獨裁官)……………三三 リシオン・レ・シオンの醸酒場……………三三 ワ行……………三三
-----------	--	-----------	--	-----------	--	-----------	---	-----------	--	-----------	---	-----------	--	-----------	---

大正十五年十一月十五日印刷
大正十五年十一月十八日發行

知られざる國々
定價 金壹圓

志賀重昂著兼發行

東京府豊多摩郡代代幡町大字代代木四百七十六番地
著作兼發行者 **志賀重昂**
(電話 四谷九〇四番)
東京市小石川區西古川町二十五番地
印刷者 **渡邊一郎**

世界當代地理

定價 金壹圓

右書又は知られざる國々は全國の有らゆる公共團體へは寄贈、御一個人の希望者へは御志までの郵券御封入に相成り候へば可差上候に付御遠慮無く御申越願上候

代東京市外 志賀方 **地理調査會** 假事務所
代代木四七六

311
265

(刷印社會式株刷印外中 京東)

日本人と云ふ日本人に回答を得たきは「日本人は如何にして將來食つて行くや」である。(一)土地は極めて少く(二)人口は増加する(三)農作すべき面積は少く、然らばとて(四)工業の原料の極めて少い國土に在ては如何して食つて行かれるか。世界の七十國中、面積、地勢、地形及び人口密度の日本に類似せる三國を擧げて比較せんか。面積の同一なるはパラグアイである、然しパラグアイは全くの山無シ國で、而も一方里の人口密度は三十三人、即ち日本内地の七十分の一である、此の如き地勢なれば面積は狭小でも衣食に懸念は無い。又日本の如く地形の細長くして而も山ダラケに、爲めに可耕地の極少なるは智利に於ても之を見る。然るに智利には硝石の無盡蔵がある、智利政府の毎年の歳入の約半分は此の硝石の輸出税のみで上る、山ダラケの耕地の少ない國なれども住民は食へて行ける。又地形の島國で、而して人口の稠密なる點は英吉利も同じである。然し英吉利は鐵と石炭とを多く産し、國民は工業及び貿易を以て食へて行かれる、況んや其の領土は本國に一百四十倍するのみか、其内には黄金と金剛石との産額に於て各々世界第一と稱へらる、南阿弗利加がある、米、茶、糖の産額に於て各々世界第一と稱へらる、印度がある、ゴム及び錫の産額に於て各々世界第一と稱へらる、馬來半島がある、羊毛の産額に於て世界第一と稱へらる、濠洲がある、木材の産額及び豊漁場として世界第一と稱へらる、加奈陀がある、即ち衣、食、住の各資料の豊富なること、工業原料の豊富なること、到底日本と日を同くして論ずべきものでない。日本は人の可住地即ち可耕地は僅に國土の一九%で、而も鐵も石炭も石油も揃ひに揃ひて乏しく、衣料たる棉も羊毛もゴムも無く、唯一の米すらも素と熱帶の沼澤地の原産のことなれば、日本の風土にては毎年不足勝ちなるは自然である。日本國民一日の所得は二十錢にも足らぬ、これでドーして食へて行けますか。世界に於ける國民一人の一個年所得高は

米 國	五六五圓	英吉利	四二六圓	佛蘭西	三六〇圓	白耳義	二五七圓	獨逸	二三〇圓
伊太利	一七〇圓	羅馬尼	一一八圓	露西亞	八五圓	日本	七一圓		

露西亞なり羅馬尼なり伊太利なりに政治上の變動否陰謀の多きは右の表にて反證する。日本人一人當の所得は此等の三國だにも及ばず、一ヶ年七十一圓、即ち一ヶ月六圓弱、一日二十錢にも足らぬ、全く國民的に食へないことは數にても分る。日本人は食はれないのである、國民的不安は偶然でない。然れば日本人は如何にしたるなれば將來食つて行かれるや』其の解決の參考の一端にまでと聊か此の一小冊子を著はした、憐レ片々たる小冊子、亦た四十年來藏むる心血の澁ぐ所。

MADE IN JAPAN

終